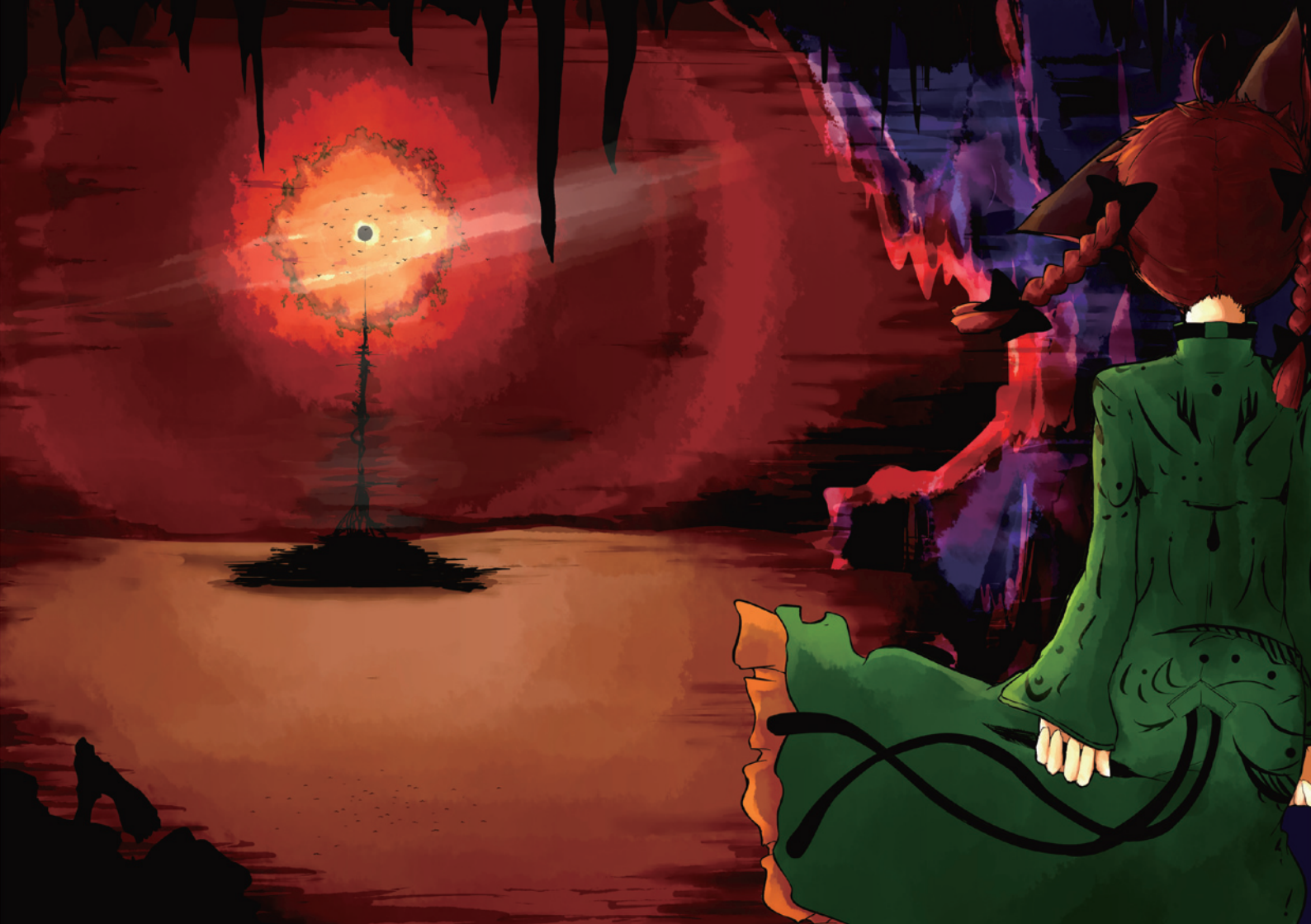




生
きた
ね
こ

Aspects Of the Lives





死因九九 狂死

地底に空は無いけれど、穏やかな光に包まれた川辺があったので、そこに放してあげることにしました。暗闇に覆われた平天井の地下世界で、心安らかに眠れる場所はそう多くないのです。

そこかしこに灯り代わりの種火ウイスラが浮いていました。明滅するぼやけた光の照り返しが静かな水面みなもに浮かんでいました。またごく遠くに街の灯り、旧都の静かな提灯ちようちんがぼつぼつと星のように小さくあり、川霧に遮られてそれらがぼやけ、まるでこの地底にはけしてあり得ない遠い銀河のように煙けふっていました。

天井の一枚岩は大きくえぐれてドーム状になっており、広い川幅に覆い被さるようにして、粘板岩ねんばんがんの大空隙くうげきは優しく広がっていました。

風の良く通る場所でした。いつも息の詰まるような臭いの立ちこめている地底に似合わずに新鮮な空気がふんだんにありました。

この場所には明るくて水があるからでした。そのような場所には植物が生えて空気を爽やかにします。足下で踏みつけにされるだけが取り柄の芝草や野菊ではないので



す。太陽のように激しくはないけれど、穏やかで四六時中光り続ける種火ウイロウの灯りは植物の生長には存外悪くないようでした。なにしろ植物というのはこの暗い地底の中では一級品の贅沢なのですから最高の手向けたむと言って差し支えないでしょう。

豊かに繁っている草原の道をさとりは歩いていきます。砂利と野草の道。ざらざらとした靴裏の感触。平らな靴底にこの道は少し厳しいようでした。時々足を止めて顔を上げます。うつむいてばかりでは、美しい風景を見逃してしまうように思ったのです。

空も太陽も此処にはないのに、うすらぼんやりと川面かわもが光を放って、まるきり花曇りのように心穏やかな日でした。かすかな風が草原を泳いで波立たせていました。

足を止めて、ひそやかに歌うように先端を震わせる单子葉の植物を見ました。この子の名前を知っているような気がしたけれど、どうしても思い出せそうありませんでした。

ため息を少しだけつきます。

心を読めたところで、忘れてしまう。

真意を掴んだところで、失くしてしまう。

本当のことというものは一体どこにあったのでしょうか。その時は理解できたと思っ



たのに、指の間から砂がこぼれ落ちるようにして他人の気持ちというものを掌握できずにあります。そのひとたびは確かにそのひとの気持ちを読めたはずなのに、それを確かに理解したはずだと感じたのに、移ろいゆくひとの気持ちを理解し続けることはたいそう難しいようでした。

強く握めば握むほど、それは手の中から滑り落ちていくのでしょうか。流れて消えていくのでしょうか。砂や水や風のように。

さとの手の中には箱がありました。茶色い木箱。小柄な手に少し余るぐらいの大きさで、切ったばかりの新鮮な木の匂いがします。多分それは死んだ植物の体液の匂いなのです。鮮烈に目を覚まさせるような爽やかな木の香りを嗅いで、胸の内すくような心地がします。

その心地よさをたいそう罪深いことのように感じて、さとりは深いため息をつきました。犠牲になるものがあり、それが残したものを元手にして我々は生き続けている。それは必要不可欠というわけではない。ただ生活を快くするためだけのものではない。

そのようなことを思っ、深い深い息をつきました。

さよなら、子猫。



箱の中で眠っている仔に心の中で呼びかけてみました。

またいつかどこかで。

黒猫は返事をしません。ただ怯えて混乱した心のままで、うずくまっているばかりです。さとりは何度もその記憶と精神とに触れたのですが、そのたびに見えるのは激しい錯乱と恐怖と、そしておぞましいほどの渴望でした。

— 生きたい。

— 殺してでも生き続けたい。

— 何者を押しにかけてでも存在し続けたい。

それだけならまだ、生き物としての本能と言えなくはありません。異常なのはそこから先。

最たる欲望の名は食欲。

— 喰いたい。

— 食らいつくしたい。

— 己の物としたい。

— 世界の隅から隅までを顎あぎとの中に含み、舐め尽くし、しゃぶり尽くし、味わい尽

くしてかみ砕いて飲み込んでやりたい。



そのように子猫の心は叫んでいました。

手も足もすくんでしまっている癖に、触れる者全て、飼い主にすら噛みつこうとする。その牙と目玉だけがまるで石炭のように鋭く光って生気を失わないのです。

手に負えない。狂った子猫。手放さなければならぬ。自分ではもう責任を取りきれない。

自分でも切れ切れに思いを走らせながら、小さなさとの胸は悲しみで一杯になっていました。

ペットを捨てることは、飼い主にとってとても悲しいものなのですから。

「さよなら、お隣」

声に出して、別れを告げました。伝わる筈はありませんでした。なぜならもう子猫の心は秩序を失って全ての言葉を判断しないのですから。

そのようにして、発狂した飼い猫を川へ捨てました。

そのまま流したのでは岸にかつりと当たってしまうので、思い切って靴を脱いで、素足で川の中へ入っていききました。くるぶしまで水に浸かってしまいます。皮膚を刺すようなひどい冷たさですが、堪えられない程ではありません。ちくちくと足裏を突き刺す砂利の感触にも慣れていききました。



まるで地上でよく行われる灯籠流しとうろうながのように、その白木の箱はゆっくりと流されていきました。

さとりは、ゆらゆらと揺らめいて沈まない木の箱をいつまでもいつまでも見つめていました。種火ウイスラの灯りに紛れてたぷりとした波に吞まれて沈んでしまうまで、ずっとずっとその送られていく子猫の箱を眺めていました。



死因二 圧死

旧い灼熱地獄に棲む者達は貧乏だったので、靴が買えませんでした。だからいつでも子猫たちは裸足^{はだし}なものでした。

自分で作ろうとしても非常に難しいものでした。というのは非常に熱い灼熱地獄では何もかもがすぐに燃えるか朽ちるか錆びてしまうのです。

わらじを編もうとしても草木や布の類は熱いマグマに触れた途端すぐに燃えてしまいます。皮をなめして革靴を作ろうとしても皮を通すような鉄針は錆びてダメになってしまいます。澄んだ銀色をした縫い針がみるみるうちに黒ずんで折れていつてしまふのは本当に悲しいものでした。

それにごくまれに役に立つものが見つかつたとしても地獄に棲む者達の間で奪い合いになつてしまいます。乱暴な焰狼^{ほむらおおかみ}やずるがしこい一角うさぎは言うに及ばず、従順を装った目無し穴子^{あなこ}でさえ、地底湖の底からぎらぎらした鱗を光らせて、次は何を盗もうかと企んでいるのです。いつでもどこでもぎすぎすした空気がいつも流れていました。



しかし誰しもが暮らしているうちに裸足で歩くのにも慣れていきました。赤ちゃん猫の頃にはピンク色だった肉球はいつのまにかがさがさして黒みがかった褐色に変わっていました。貧乏というものは心を少しずつすり減らす代わりに、痛みへ慣れさせていくものです。そのようにして地底の猫たちは大きくなっていくしきたりなのでした。

その証拠にみんなを育ててくれた^{おんばあ}老婆の手はいつでもあかぎれだらけでした。実に亡霊らしい骨張った大きな手でした。骨と皮ばかりの手で撫でられるのは子猫たちにとってはあまり心地よいものではありませんでした。柔らかな毛皮をぐしゃぐしゃと撫でられるとごつごつとした^{あばら}肋に当たって大変痛いものです。そればかりではなく時には節くれ立った関節や大きな宝石の指輪に毛足が絡まって解けなくなってしまう。そんな時に裁ちバサミでばっさりと毛皮を刈り取られるのは子猫たちにとって大きな屈辱ではありましたが、おしりをぺちんとはたかれるよりは幾分かましでした。猫にとっておしりをぺちんとやられることは大事な尻尾^{しっぽ}を踏まれたときに匹敵するぐらいの圧倒的に屈辱的なことなのでした。おしりは猫にとってとても大切なものです。挨拶するときにまず鼻と鼻をくっつけ、それからおしりを嗅ぎ合うのはそのためです。鼻が一番大事なので最初です。そしてそれからお互いに二番目に大事なところ



を氣遣いに行くのです。

ともあれ怨婆は傲慢ではありませんでしたが、いつでも公明正大でした。かつては閻魔の机の下を昼寝場所とし、裁判所に潜む針山ネズミを捕まえる役目をしていたという彼女は、かつての飼い主に似て、本当に誰とでも分け隔て無く傲慢に接することが出来るのでした。

紅蓮ぐれんの湖に住む隠居した牛頭馬頭ごずめずの長老夫婦にも怨婆は一目置かれていましたから、それは本当のことだったのでしょう。地獄が移されたとは言ってもかつての序列が全てなくなったわけではないのです。地獄に來たばかりの新参者は騙されて全ての持ち物と死体を巻き上げられてしまいます。旧ければ旧いほどに生きるための知恵が回り、生きていく力が強いのです。子猫たちが安心して暮らせるのも怨婆のおかげといっても言い過ぎではありません。

さて、強突張りごうつくばばかりの地底でもお湯だけは只でした。ふんだんにある熱だけが有り余るほどの資源でした。だから子供たちは働けるようになって最初の収入があると牛乳石鹼せっけんとクリームを買いにひっそりと旅へ出るのです。

地底巡りの旅から帰ると怨婆のところにお供えをして、それから彼女の指示の通り小さい子から順番にすりこむのです。本當なら買った自分を真っ先に塗りたいと



思うところでしたが、そのような輩やからには怨婆の拳が飛ぶのです。

怨婆の下で世話になってる猫の子はいつでも働き者です。特に完全な怨霊になってからが特によく働くようでした。

普通の猫は九つの命を持っていますが、大抵、好奇心のままに動いてあつという間に大切な命を散らしてしまいます。

地底は危険なところです。ほんの僅かに開いた隙間から落っこちたら最後、マグマに焼かれて死んでしまいます。あるいは猫の子が興味を持ちそうなちよつとした小穴にも要注意です。顔を覗き込ませた途端にそこから硫黄いおうを含んだ毒ガスが噴き出してきて、あつという間に息を詰まらせて死んでしまいます。

そうして大切な九つの命を散らした猫たちは悟るのです。本当に大事なのは自分ではなくて、自分を育ててくれた怨婆とその子供たちを守ることであるということにはっと気がついて、一生懸命働くようになるのです。

さて、子猫たちの中でもいっとうよく働いていたのがお燐りんと呼ばれる仔でした。彼女は朝から晩まで時間をいとわずに働くのです。まるで疲れるということを知らないかのようでした。

お燐が他の子猫と違っているところは、まだ一度しか死んだことがないということ



でした。だから彼女には八つのほんとうの命が残っているはずでしたが、いつもはふわふわと怨霊のままでいて、肉体が必要な時にだけあたりに散らばっている適当な猫の死体に憑依ひきよするのでした。

というのは、お隣はたいそう賢かったので、他の子猫なら九回繰り返さなければ気づけないようなことでも、一度きりで気づいてしまったのでした。

大切なのは、自分自身ではないこと。

誰かのために身を粉こなにして働くことこそ、本当に大切なことなのです。

それをたった一度死んだだけで分かってしまうなんて、お隣はなんて賢い女の子だったのでしょうか！

さて、ある時、お隣は密かに怨婆に呼ばれました。

「お隣、お前はゴム長靴を履きな」

怨婆のしゃれこうべの奥で、その鬼火はぴかぴかと良く光っていました。

「お前は英雄になる器だ。黒い長靴を履いて白い袋を持ちな。お前のその勇氣と優しさとかいつかこの国を救うだろう」

無論、もはや地獄ですらないこの場所に国家統治などはありませんでした。無法地帯の中にけだものやごろつきが溢あふれているだけのことだと知っていましたが、お隣は



神妙にうなずきました。

怨婆は黒い長靴をくれました。大切に取ってあったようですが、片方は足首のあたりが破れていて、ガムテープで塞ふさいでありました。もう片方は一目見たところでは無傷のようでしたがよくよく調べてみると中敷なかじきが外れているようでした。

「怨婆の形見分けさ。大事にし」

笑ったしゃれこうべの金歯が、かたかたと鳴っていました。

当惑したお隣は小さくかぶりを振りました。まるで怨婆が居なくなるようなことを言われるのは嫌でした。そうなつては大変困ります。

それにお隣は持ち物を持ったり、服を着たりするのがたいそう苦手でした。何かを持っていると、それに囚こわれてしまいます。もしも死んでしまった時に失った持ち物を探しにいかないといけないというのは大変億劫おっくうなものでした。

しかし怨婆は言いました。

「贅沢ぜいたくをお言いでない。守るものなくして、何が一人前だ」

それで話はお終しまいになりました。

お隣が二回目に死んだのは、それから一週間が経った後のことでした。



太陽も空も無い地底では、大鯰が浮かぶのを見て時間を計ります。半日に一度、息をしに大鯰が地底湖から顔を出します。その時は大きく天井がうねり、平素乾いている空気がその時ばかりはねつとりと湿り気を帯びるので、誰しも正午だと分かるのでした。運が良ければ茶褐色の土天井の中を灰色をした影が泳いでいるのが見えることもあります。

時折鯰も寝ぼける日があり、それは閏日うるひなのですが、それについてはまた今度話すことにしましょう。

ともかく、お燐が長靴を貰ってからきっかり十三回、鯰が息をした時のことです。急にお燐は目を覚ましました。嫌な感じがしたのです。大気が脈打っているようでした。雨も降らない季節ではありましたが、空気が重くていがらっぽく、嫌な匂いがありました。

賢いお燐には硫黄が暴れているんだとすぐ分かりました。昔の灼熱地獄跡であったこのあたりでは時折そういうことがあります。火の精である硫黄が時々暴れて地面にぶつかってちりぢりになって撒き散らされていくのです。粉々になった硫黄の死体が燃素フロジストンと結びついて空気の毒になるのです。

そういうときは洞窟ひとつ飛び越えて、縦穴と横穴を二つ三つ越えなければいけま



せん。匂いのきちんと消えてしまうまで遠くへ避難しないと硫黄の死んだ気配に巻き込まれて息がつまって死んでしまうのです。

お隣は死ぬのは嫌いではありませんでしたが、臭いのに閉口したので、寢床を移すことにしました。身支度はすぐに済みました。持っていくものは怨婆にもらった一足の長靴と、自分を取り憑いている一匹の猫の死体しかありませんでした。

そのほかのものはすぐには必要ないし、いずれ朽ちてしまうものだったので捨ててしまうことにしました。たとえばお気に入りだったピンク色の毛布も捨ててしまうことにしました。いつかそれがごわごわして気持ちよく無くなる日のことを考えて、一度握りしめたそれを、お隣は静かに床の上に降ろしました。

油漬けの瓶詰めにして一生懸命集めた人妖の目玉もいずれ腐って曇ってしまうことを考えて、窓際に置いたままにすることにしました。茶や青や褐色の、様々な虹彩が大変綺麗に透き通っていて、時折眺めたり、口の中に含んでキャンディーのようにしゃぶるのが楽しかったのです。

そのほか、お隣が持っていたものと言えば暗い居心地の良い静かな死火山の洞窟でしたが、それは持つて行くことが出来ません。

近所の猫たちはもう既に逃げ出した後のようでした。彼らは自らの身体の他に何も



持たずに逃げ出すのが常でした。重いものを持っていては走れなくなってしまいうのです。

鼻と口を手で覆いながら洞窟を出たところで、聞き慣れない声が呼ぶのが聞こえました。言葉にはならない声でした。ぴいぴいと鳴くのは生まれたばかりの子猫の声に似ています。

けれどこの時期に生まれる猫なんて何処にも居ないはずでした。怨婆やお燐に黙って結婚する猫などこの地獄には一匹もいないのです。幸せで厳密な家族計画が猫たちの掟なのでした。急に猫が増えすぎると死体が増えすぎてしまって、火力が強くなりすぎてしまうのですから。

お燐はゆつくりと頭を巡らせました。

さてさて、この声は誰だったでしょう？

そうです。地獄鴉の卵が孵かえったばかりなのでした。

地獄鴉の雛は硫黄が死ぬのと同じ季節に生まれます。地獄鴉の親は決して自分の子供の面倒をみません。全ての卵は親鳥に生み捨てられ、大地の中で少しずつ腐っていきます。硫黄が空気の中で散らされている頃、不吉に卵の腐敗したような臭気の中で、その卵は独りでに灰と泥にまみれています。死と腐敗を糧として殻の中、卵黄は少し



ずつ腐ってゆくのです。全ての黄身と白身とが^な縋^まい交ぜになり黒色の腐汁が凝り固まって地獄鴉は生まれるのでした。

案の定、塔のように積み重なった泥岩^{でいがん}の上の方から声は聞こえてくるようでした。

お燐が平べったい岩の上へ飛び上がってみると薄褐色をした地べたに、今にも落ちそうに卵は無造作に置かれていました。ふつふつと灰色の泥が沸いて、坊主の頭のように膨れては弾けていました。

分厚い殻は割れて、泥の中州に浮いていました。小舟のように頼りなく泡にもてあそばれていました。

その灰色に汚れた殻の中程、生まれたばかりの雛が居ました。丸っこい身体はまだ腐った卵液で半ば濡れていました。けれど少しずつ乾いてはいるようです。頭のとっぺんの方はもうすっかり良くなっていて、ぼわぼわとした羽毛が綿毛のようです。風に吹かれて、抜けかけた羽根がなびいていました。

「だあれ？」

雛鳥が言いました。目はまだ開いていないようでした。

「あたいはお燐」

どうにか答えましたが、その柔らかそうな羽根にお燐の目は釘付けになっていまし



た。

雛は片眼をおそろおそろ開けて言いました。

「お隣がお母さん？」

「は？」

「一番最初に見えるのがお母さんだって生まれる前に聞いた」

「……生まれてないのに、なんで聞こえるのさ」

「むつかしいことわかんない」

雛はぴいと鳴きました。お腹がすいているようでした。よちよち歩きで泥の中へ落ちそうになるのを慌てて拾い上げました。

手の中に暖かく小さな雛を収めながら、お隣の頭の中は少し混乱しました。地獄鴉が何を食べるのかはよく分かりませんでした。ともあれ、泣き出してはうるさいから人差し指の先を口に押し当ててやりました。

ちゅうちゅうとくすぐったいような感触がして、それからじくりと痛みが走りまわった。皮膚の中を潜っていく生き物の硬い嘴くちばしが、骨の関節に当たっていました。気がついた時には指先ごと食い破られていました。

ああ、この子は屍肉を食べるのだな。



お隣はぼんやりと思いました。そうして少しだけほっとしました。

この子が生きた肉しか食わないということだったら、大変難儀だったでしょう。旧地獄では生きた者の方がはるかに稀まれです。ここは何もかもが死んでしまう場所なのですから。

しかし死体の肉であればそこら中に、それこそ喰わせても喰わせても溢れてしまうから燃やしてしまうぐらいにありふれています。

指の骨までしゃぶっていると、雛は満足したようです。指先をくわえたままで安心してこっくりこっくりと居眠りをするのでした。

「連れて行くかねえ」

お隣は独り言を言いました。右指を嚙かじられたままでは、そうするより他ないようでした。

それでもなんとなく、指を嚙られないでもこの子を手連れて行きたいような気持ちが、お隣の中には湧いていたのでした。

お隣は雛を抱いたまま埃っぽく乾いてしまった地面の上を走っていきます。平素は四つ足の方が楽ですが、硫黄が地面に叩き付けられて黄金きん色の渦を巻いている日には二本脚の方が楽でした。体高が低い時には地面の臭いに息が詰まって咳き込んでしま



うからです。

顔を上げて赤色の血の池が遠くで輝いているのを目指しました。そこまで行けば水辺です。硫黄は火の性質を帯びているので水のあるところまでは寄りつかないのです。後ろの方でつむじ風が起こっているのが聞こえました。出来る限り見ないようにしました。嵐の目と目が合った瞬間に惹き付けられてしまうというのが猫たちの間で盛んにささやかれている迷信の一つでした。誰かが悲しげに鳴いているのが聞こえるような気がしましたが、お隣はもう振り返りませんでした。ただ長靴のゴム底を出来るだけすり減らさないように一生懸命駆けていくばかりでした。

この地獄に春というものがあるなら、今がきつとそうなのだとお隣は思いました。

黄砂が舞い、鳥が囁き、風は生温く大地を吹き荒^ふび^{すさ}。

これが春そのものじゃないかと独りごちました。

太陽も空も無く、風も水も大地もどれもが濁り毒を孕む。

それこそが地獄の春。

この場所では生きていくこと自体が不自然なのです。腕の中の小さな命などは本当に不自然で、ほとんど奇跡のようなものでした。

「ぴい」



小さく雛が鳴きました。考え事をしているお燐に何か不満があるようでした。構って欲しいのかもしれない。お燐は笑いました。

「分かったよ。次は中指がいいのかい」

「ぴいぴい」

「ほれ、ゆっくりお上がり」

自分の指をそつとあてがってやりました。雛はミミズを喉に流し込むようなあんばいで飲み下していききました。

本当にその子は、上手いこと、指の関節の軟骨を外していくのでした。第一関節の細かくて繊細なところでも、骨と骨の間に嘴を突っ込んでぐりぐりと食い込ませて、密着した肉と軟骨との間に空気を入れていくのです。魂の固着した死体であるお燐の身体はなかなか腐らずにしっかりした組織を保っているものですが、それにしても天才的なまでに指先の骨を解体していく様は実に素晴らしいものでした。

「おいしい」

うっとりした口ぶりで、その子は言いました。

「そうかい。そりゃよかった」

もうお燐には、ものを掴むことは出来そうにありませんでした。人差し指と中指を



欠いてしまつて、それでもお燐は満ち足りた気持ちでいました。

何かがいともと違うような気がしました。どこかふわふわと浮いているようにも思いました。腕の中に別の生き物がいると言うことは、いつもより重いはずなのに少しずつ少しずつ勇気や力がわいてくるように感じました。何しろ、どんな死体とも違って、生きているものの身体は温かいのですから、そこは大きな違いでした。

名前を付けてやることにしました。といつても大してアイデアが浮かぶ訳でもありません。豪快な怨婆に育てられたお燐は、いつでも単純明快な名付け方しか知らないのです。

「あんたは良く喰うから、おくうって呼ぶよ」

「ぴいぴい」

それでも雛はその呼び名を気に入ったようでした。嬉しそうに目を細めていました。二匹はごつごつした岩場を駆けていきます。ただ前に進むうちに、いくつもの地割れが起きているのが分かりました。

湖の近くに居心地の良さそうな洞窟を見つけました。入り口だけではよく分かりませんが、小さな生き物が二匹棲むのにちょうど良いぐらいの大きさに見えます。

「おおい、お燐、やっと来たかい」



丁度そのあたりに怨婆も見えました。象牙^{ぞうげ}の杖をぶんぶん振ってとても元気そうです。人一倍ものを持っていて癖に逃げるのはいつとう早いのです。

そうしてほっとした瞬間のことでした。

次の一步を踏み出すはずだった岩がひゅっと消えました。

あれえ、とお隣が思っている間に今立っている足場がまた消えました。

嫌な感じがして、下を見ました。時はまるで止まっているようにゆっくり流れていました。

ぱっくりと大地は割れていました。何もそこにはないのでした。ただ真つ暗な地割れが広がっているばかりでした。跳ぶのは出来そうにありませんでした。だって地面は今にも閉じそうに揺れているのですから。

一瞬のうちに、お隣の覚悟は決まりました。

「あんたら、こいつを育てとくれ！」

そう言っ手の中の小さな雛を思いっきりぶん投げました。雛はかぶら矢のように甲高い声をあげて泣き叫びました。その声はとても高く澄んで大きかったので、地獄遷都の戦^{いくさ}にかり出されたことのある年取った猫たちの一人は戦いが始まるのではないかと思ってしまったくらいです。



「絶対に食べたらダメだよ！」

そうして、そうして。

小さな猫は、地割れに飲み込まれていきました。

まだ生きている雛を残して。



死因三 拘束による窒息死

「……というわけで、お燐は幸せに暮らしたのです。めでたしめでたし」

お燐が仕事から戻ってくると、地獄鴉のおくうがそうやって物語を終えたところでした。

おくうは毎晩そうやって子猫たちに絵本を読んでやっていたのです。おくうをぐるり取り囲んで子猫たちはほうと息をつきました。

「何やってるさね」

そうつと後ろから近づいて声を掛けるとぴいといつと子猫たちが逃げ出しました。その様はまるきりクモの子を散らすようでした。毛布の下に潜り込んでがたがた震えています。よっぱど恐ろしいものを見たかのようにでした。

「あ、おかえりお燐。早かったね」

ぱたと絵本を閉じたおくうは笑顔で迎えました。腕組みをして、お燐はため息をつきました。

「最近、子猫たちがあたいに寄りつかないと思ったら、あんた、あることないこと吹



き込んで」

「むう。そんなことないもん！　あることないことじゃないもん！　ないことだけだよ！」

「余計悪い」

ばかりと頭をはたいてやりました。

「褒めてるのに！」

そう言い張るおくうの言い分を確かめるために、お隣はさつきまで読み聞かせられていた絵本を眺めました。

木炭を何本も折ってしまうまで渾身の力を込めて描いていたページを見ます。真っ黒のベタ塗りで染まった紐状の生き物と、口が耳のあたりまで裂けた大化け猫が死闘を繰り広げている所でした。

「……鬼ウツボを八つ裂きにしてミンチにしてボリボリ骨まで食べた話のどこがあたいの褒め言葉なのさ」

「つおいところ！」

自慢げに胸を張るおくうに、お隣はため息をまた一つつくのでした。

「もうちょっと何か無いのかねえ」



「わたし、強い好きだよ」

「はいはい、それは分かったから。ご飯にしようかね」

「はい。みんな、手伝って！」

おくうと子猫たちははぴょんぴょん台所に飛んでいきました。子猫ならまだしも、大きな身体のおくうが飛び跳ねるとまるで地震が起きたように家中が揺れるのでした。子猫たちはみんな、おくうが拾ってきたものでした。自分が拾われっ子だからなのか分かりませんが、母親とはぐれてしまった子猫を見つけるとみんな拾ってきましてした。そのうちあんだ、喰われてもしらないよとお隣は言うのですが、おくうは不思議そうに首をかしげるばかりでした。生まれてからずっとお隣に育てられてきたせいか、自分が鳥の仲間であることを時々忘れているみたいでした。

そんな風に子供じみて振る舞ってはいますが、これがあの時のチビなのだと思うと、お隣は時々不思議な気持ちになりました。何しろもうヒトガタになればお隣の背丈を超してしまうぐらいに大きく育ってしまったのですから。

地割れに飲み込まれた後、すぐに新しい手頃な死体を探して取り憑いて元の水辺に戻ったのですが、おくうはお隣が戻るまでびいびい鳴いて泣いて大変だったのだと怨婆は言っていました。二匹で仲良く並んでぺちんぺちんとおしりを叩かれたぐらいで



す。

「金輪際、こんなことはごめんだ。ご近所迷惑になるからね」

怨婆にこんこんと説教されたこのときばかりはお隣も生きた心地がしませんでした。いや、もちろん、初めから死んでいるようなものでしたけれども。

それから今に至るまでにお隣がおくうの為に死んだのは最初の一度きりでした。なにしろお隣がちよつとでも居なくなると本当に煩うるさくて喧やかましい声で泣くので、閉口した怨婆がお隣に死ぬことを禁じたのです。赤ん坊の頃はそれこそ背中^{うで}にひもを付けて何処へ行くにも負ぶさって行つたぐらいです。

そんなおくうも、もう立派に家のことを手伝っています。

「セミパ、お皿運んで！ ラチンはチーズをすりおろしといてね。スクウは小さい子たちの面倒みてあげて！ ああこらっ、セメイってばつまみ食いしたらダメだよっ！ みんなで一緒に食べるんだから」

泣きべそばかりかいていた雛の姿は、子猫たちにてきばきと指示を出していく今のおくうの姿からは想像もつかないような気がしました。

大きなちゃぶ台に、全員分の、要するに今この洞窟で生活している子猫たち八匹分とおくうとお隣で合わせて十ものお皿とおさじとが並びました。みんなそろってご飯



を食べるのが、この家のしきたりなのでした。

「おくうはご飯の時だけは張り切るよねえ。食いしんぼだよねえ、ホントに」

膝の上にのつけた一番末っ子のクルチャに向けて、思わず余計な一言を漏らすのがお隣の悪いところでした。旧三途の川の水面のような縞々しましまの毛皮の子猫は少しだけ鼻をうごめかして、小さく一つくしゃみをして眠りにつくところでした。この子はまだ赤ん坊でミルクしか飲まないのです、シチューには興味がなかったのでした。

そのうちにお皿が全部並びました。ミルクだけを入れた赤ちゃん猫のお皿を除いて、今夜は新鮮な血が捕れたのでそれを丁寧に溶かした赤黒い色のシチューでした。お隣は一番最後の、具もろくに残っていないような皿を選びました。肉がたっぷり入っているようなのは食べ盛りの子猫たちに上げるのがいつものしきたりでした。

「うん、シチューはぬるめに限るねえ」

それでもふうふうと舌で冷ましながらお隣は言いました。

「えへへ、少ないけどお代わりあるからね」

すぐ隣でおくうが嬉しそうに粉チーズを山盛りにしていました。おくうの発育の良さなどはこういうところから来るのかもしれないなあとお隣は思いましたが、口には出しませんでした。何となく教育に悪いような気がしましたので。



「もー、チャガンってば口の周りべたべたなんだから」

けれど子猫の一匹をぺろぺろ舐めてあげようとするおくうの首根っこを慌てて掴まえました。

「これから、ヒトガタの時はそういうことしないの」

「はい」

頭の中は相変わらず子供のようでした。お隣はそういうおくうにちょっとだけほっ
としていました。

それから、いつもの通り眠るまでにはいろいろなことがありました。やんちゃ盛りさかの
迷い猫を八匹養うというのは非常に手間の掛かることで、本当にいろいろあるのです
が、話し始めると大変長いので、大切なたった二つのことだけを言って、この夜のお
話は止めにすることにしましょう。

お隣はおくうが大好きでした。

おくうもお隣が大好きでした。

それ以上に語るべきことなんて、どこにも無いでしょう。

それ以外のことを語る必要などまったく無いでしょう。



だって、それがそもそもの始まり。

猫たちの間で愛され育まれた可哀想な鴉の子が、全ての元凶であったのですから。

ある日、お憐とおくうは怨婆に呼びつけられました。猫たちの世帯主が全員集まる会議が開かれることになりました。怨婆の棲処すみかの洞窟の中で、猫たちが尻尾も触れ合いうようなほどにひしめき合っていました。小さな猫たちの間で身体のおくうは居心地悪そうに肩をすぼめていました。

「新しい主人が来るよ。嬉しかろう、お前たち」

五十世帯に及ぶ猫たちの会合のただ中で、怨婆はそう言いました。

誰もが耳を疑うたぐりました。今までずっと怨婆の下で野良で暮らしてきた猫たちには主人という言葉の意味が分からなかったのです。

「旧地獄の整理がようやくついたのさ。誰がどういう風に何処を治めるのか、どこかの偉い奴らが勝手に適当に決めた。長い長い話し合いの果てにね」

怨婆の声は、その言葉と裏腹にどこか悲しげでした。すぐ隣にいたお憐はその荒れた手の甲に鼻先をすり寄せました。

「怨婆は極楽へ行くことになった。長いこと、この地獄を守ってきたご褒美なんだそ



うだ」

猫たちは何も言えませんでした。この場所には無いものがどこか遠くにあるのだということはうつつすらと分かっていました。それが多分、ここよりもずっと良いところなのだろうということも。

けれどずっとずっと地獄と怨婆と共に暮らしてきた猫たちにとって、それは余りにも想像を超えるものでした。たとえるならそう、それだけで世界がひっくり返ってしまふような大変なことだったのです。

「怨婆は、極楽に行きたいのかい？」

猫たちの中で唯一そう尋ねることが出来たのは、他でもないお隣でした。お隣よりずっとずっと年寄りの猫もいたのに、彼らは事実を受け止めるだけで精一杯で口を開くことも出来なかったのです。

「ああ」

怨婆は厳かにおこぞ頷きました。その、たったそれだけの動きがこの長い長い荒れ果てた

地獄の中で過ごしてきた時間を物語るようでした。首筋の皺も落ちくぼんだ目の周りも、何もかもが旧地獄それ自身と同じようにくたびれているように見えました。

「それなら、行くと良いさ」



お燐はきっぱりとした口調で言い切りました。

「ここはあたいが守る。だから安心して何処へでも好きなところへ行くがいいさ」
凜と背中を伸ばし、潔く言い放ちました。その尻尾も耳もしゃんとして、まるでアイロンでもかけたみたい曲がったところは一つありませんでした。その毛皮の黒はどんな闇よりも深く広々として濃いのでした。

「わっ、わたしもっ、が、がんばるっ！」

おっかなびっくり立ち上がったのは、おくうでした。お燐のそばに寄り添うようにして、手を挙げました。猫たちは胡乱げ^{うらん}におくうをじろじろと見上げましたが、お燐のぎろりとした視線に気がつくと、おずおずと下を向くのでした。

「そうかいそうかい。怨婆は良い娘たちを持ったね」

怨婆はそう言って、声を立てずに笑いました。金齒^{ウイスラ}がきらりと種火のように光りました。

「お前たち二匹で、さとりに様にご挨拶に行ってくださいなさい」

「さとり様？」

お燐とおくうは顔を見合わせました。聞いたことのない名前でした。

「このあたりは、さとり様のお屋敷の広い広い庭の一部になる。そのようにしてこの



場所は守られることになった」

お燐とおくうの頭を、怨婆は優しく撫でました。

National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty
「歴史的名所と自然的景勝地のためのナショナルトラストだとき。お金持ちが土地を買って、そのままにしておく。それが自然にとって一番大事なことからね」

怨婆の言っていることは、誰にも分かりませんでした。猫たちはそもそも飼われるということをよく理解していませんでしたし、自分たちが保護されるべき野生動物であるということ自体が想像の範疇はんちゆうを超えた物でした。

ともあれ、予感だけはひしめいていました。

これから先は誰も見たことのないことが起こり始めていくということ。良くも悪くも、世界は変わっていくだろうということ。これまでにあったことが、一つまた一つと消えていき、二度と戻ってはこないだろうということ。

怨婆に教えられたのは、道筋というよりは天井の穴の順序でした。一つ、また一つと縦穴をくぐっていき、最後のふたを開けた時には辛抱強いお燐といえども少し退屈な気持ちになってきたぐらいでした。

四角い敷石を持ち上げて最初に二匹で見上げたのは、大きな黒い影でした。最初そ



れが、館の影だと気づかないぐらいに大きなお屋敷でした。いくつもの黒い鉄格子で囲まれた柵とずっしりとした煉瓦の積まれた壁があたりを取り囲んでいました。

よく見ると窓という窓に色つきの硝子^{がらす}が埋まっているのが分かりました。それぞれがいくつかのパーツにわかれ、猫や鴉の絵を描いていました。このように透き通っているのに色の付いているものを、お燐とおくうは初めてみるのでした。ほじくり返した生き物の目玉以外に、このように綺麗なものがあるということを初めて知ったのでした。

黒々とした鉄木で出来た扉が音もなく動きました。余りにもその扉が重く、軋む音は低いので、猫の耳にも鴉の耳にも聞こえないのでした。

「まあ」

硝子で出来た薄い杯を触れ合わせるようなかな声がありました。

「珍しい。お客さんなのね」

ゆっくりと玄関の階段を下りてくるものがありました。その大きな扉と比べてまるで砂粒のように小さな女の子でした。夢のようにふうわりとした薄紫色の髪をかすかに揺るがせて、小さな歩幅で優雅に歩きます。

なんて綺麗な女の子なのだろう、とお燐は思いました。身にまとう空色のカーディ



ガンもうす桃色のフリルのついたスカートもいかにも上等で高価そうでした。こんなに愛らしくか細いものをこれまでに見たことはありませんでした。まるですみれの花びらの砂糖漬けのようでした。

「ちょうどお茶にいれる薔薇を摘みに来たところですよ。よろしければ貴女たちも」

そう言つてうつすらと笑むのでした。余りにもその笑みが儂いので、見ているだけで大切に抱きしめて守ってあげたくなるような、そんな気持ちにさせるのでした。

「貴女が、さとり様かい」

お隣はからからになった口をどうにかこうにか湿しながら問いかけてました。

「ええ」

ゆっくりと頷いたその首には皺の一つも見あたりませんでした。怨婆とはまったく違うのだな、とお隣は思いました。若くて綺麗でか弱いご主人にお仕えするということとは今までとは色々と勝手が違うような気がして面食らいました。

さとりは二匹へ向けて手を伸ばしてくれました。ほっそりと白く、ひび割れもあかざれも知らないような手でした。ひよっとしたら生まれてこのかた、皿洗いなど一度もしたことがないような気さえする、本当にすべすべの陶器のような手でした。

お隣はその綺麗な手を握ってしまうのが怖くて、自分の手を地面について立ち上が



りました。それからすぐ後ろのおくうへ向けて手を伸ばしました。

お燐の手はさとの手に比べればごく普通の手です。小さくて冷たくて、この間うっかり剥いてしまったささくれが痛かったりする何の良いところもない手です。

それでもおくうはお燐の手を握って、穴から這い出たのでした。

「ありがとう」

おくうのいつも通りの暢気な声^{のんき}が、不安と緊張でいっぱいになっていたお燐の心をほんの少しだけ和らげてくれました。

お屋敷の中に案内されて、きよろきよろと見回すおくうをお燐は足早に引っ張っていききました。足首まで沈みそうな絨毯がタイルのように敷き詰められていました。それはまるでチェスの盤面のように見えました。誰かと誰かが純粋な知恵だけの勝負をして、そうして死んでいく戦場のようでした。

どこかへ飛んでいってしまいそうな鴉を押さえつけるようなつもりで、お燐はずっとおくうの手を握っていました。死体でしかない自分の手が、おくうの手を冷やしてしまうのは分かっていました。けれどずっと繋いでいないと遠くへ行ってしまうそう、そんな気がしてひどく不安な気持ちになるのでした。



対しておくうはぼかと口を開けて屋敷の様子を眺めているばかりでした。見る物全てが珍しかったのでしよう。確かに土だらけ灰だらけの地獄しか知らない二匹にとつては、床がふかふかしていることや階段の冷たい大理石や二匹の身長を合わせても足りないぐらいの大きな窓や鏡などは生まれて初めての物でした。

そうでなくてもいくつかの調度品は大変魅力的でした。たとえば孔雀色くじやくをした絹張りのソファなどは思い切り寝転がってほおずりしてみたいと思わせましたし、部屋のすみに飾られた猫足のチェストは思わず爪を研ぎたくなるような美しい木目をしていました。

けれどそれらへ無邪気に駆け寄ったり寝転んだりするような勇氣は到底出てきそうもありません。お隣の目にはどれもこれももつともらしい罍のように見えるのでした。まだ何度も死んだことのない臆病な子猫にとつてはなおさらでした。

もつともおくうの尾羽は今にも飛び出しそうにむずむずしていましたが、お隣がそれを許しませんでした。何の疑いも無しに喜んでおくうを、ほんのちょっとだけ恨めしいとさえ思いました。つんと尾羽を引き抜いてしまいたくなるぐらいにいらした気持ちにさせるのでした。

通された客間には誰も何にも言わないのにお茶の用意がされていました。かすかに



青みを帯びた磁器には季節の花々が描かれていました。スミレに薔薇、あるいは野イチゴ、そして時計草。灼熱地獄跡では暑すぎてけして咲かない花たちでした。何故か食器は四つのセットが備え付けられていました。ここには三人しか居ないのに、おかしなものだとお隣は思いました。

真つ白なテーブルクロスの真ん中に据えられた三段重ねのティースタンドにはサンドイッチと焼き菓子と何種類かのタルトやケーキが並べられていました。三人きりで食べるには少し多すぎるようにも見受けられました。

こぼりの暖炉の上に載せられた銀色のケトルの細長い口からかすかな陽炎かげろうが揺らめいていました。

さとりはそつと注いだお湯でカップとポットを順番に温めていきます。そのケトルにはたっぷりとお湯が入っていて、いかにも重そうでした。

「手伝いましょうか」

おくうがそう言ったのを、お隣はきつとにらみつけました。この新しい主人がどんな者だかも分からないような時に、余計なことを言っただけで欲しくなかったのです。

「ありがとう、おくう。でも大丈夫ですよ」

さとりはまた小さな笑みを浮かべました。ただ笑むだけで全ての救済を退けてしま



うような、いえ、救う側が守ってあげられない己の無力さを嘆いてしまうような、儚く消えていってしまいそうな笑顔でした。

それから、いつの間におくうは名乗ったのだろう、とお隣が気づくまではお湯がしゅんしゅんと沸き出すまでの時間が掛かりました。

摘みたての薔薇の花びらと紅茶の葉、それにシナモンやオレンジピールを少しずつ入れて香りをつけたものを丸っこい大ぶりのティーポットへ入れていきます。

ごぶごぶと音を立てて注がれたお湯がお茶の葉を蒸らしている間中、お隣は耳をぴんと立てて屋敷全体の音に気を配っていました。

誰もいないかのような静穏のただ中に、一つまた一つと音が浮かび上がってはすぐに消えていくのが分かりました。少なくとも誰か住人が居るのに、それらは巧みに息を潜めて何かを虎視眈々と狙っているようでした。

ぞくりとお隣の背筋が震えるのが分かりました。

確かに灼熱地獄跡はこすっからい所でした。けれども音に溢れていました。まっとうに生きている者の方が稀でしたが、それでも今この屋敷に居る者たちよりは活気に溢れ、存在し続けているような感じがしていました。

「どうぞ」



差し出された紅い色のお茶はひどく素晴らしい香りでした。けれどもそれが入っている器はひどく薄いのでした。ただ持つだけで割れてしまいそうに繊細に見えました。それは持ち主に対する印象そのままでした。

「アプフェルシュトロイゼルクーヘンはいかが？」

舌をかみそうな名前だと思いつながら、お隣は勧められるがまま、銀色のトングで皿にいくつかの食べ物を用意しました。どのお菓子もとても美味しそうでしたが、けれど口を付ける気にはなれませんでした。おくうはさすがに食いしん坊だけあってお隣の倍ぐらいい取りましたが、それでもお皿にちょうど載るぐらいいしか取りませんでした。いつもなら溢れて重なってしまいうぐらいい取るのでしょうか。

静かに茶器の触れ合う音が響きます。

火傷しそうに熱いお茶だったので、お隣はふうふうと冷ますだけ冷まして手を付けずにいました。それがどうにも居心地悪く、尻尾がむずむずしてしまいました。せつかくもてなしを受けているのに、それをきちんと味わうことが出来ない不作法な自分にはとほと嫌気がするような気持ちになってくるのでした。

「ありがとう。貴女達はここへ住んでもいいし、よその好きなところへ行っても良い。貴女達の生き方について、私は強制する力を持ちません。好きなように生きると良い



でしょう」

やがてさとりがゆつくりと話し始めました。何も言っていないのにこちらの思っていることの答えを出してくれているのでした。

「ただ、勇気ある子猫である貴女に、贈り物を一つさせてください」

さとりはそう言って、そつとお隣の手を握りました。今度はもう避けようがありませんでした。お互いに同じぐらいに小さくて、冷たい手でした。

「かえんびよう火焰猫、という名字はどうでしょうか」

「……喜んで」

そうは答えたものの、あまり好きではないな、とお隣は思いました。長いものを持つのはあまり好きではありませんでした。それがたとえ名字のように目に見えないものでも、何とはなしに野暮ったく感じるのです。

「無理をしなくても良いのですよ」

新しい飼い主はそう言ってさみしそうに微笑わらいました。

「そう、貴女が思う通りです。別段、名字が付いたところでこれまでと同じように呼んで貰えば良い。ただ、私からの最初の贈り物として、名字を送らせて貰えればと思っただけです」



心を読まれたのだと気づくまで、しばらく掛かりました。お隣は目玉を真ん丸くして、ただじいっと新しい飼い主のことを見ました。何も言わずに見定めるようにしてただ不躰な視線をぶつけるばかりしか出来ませんでした。

「そう、心を読むのが私の能力です。いずれ分かることではありますが」
深々とした息をついて、さとりは呟きました。

「この能力のおかげで貴女たちにご迷惑をおかけするかもしれません。今の内に謝っておきましょう。申し訳ありません」

そのように頭を下げる主人というものを、お隣は想像したこともありませんでした。ただこちらこそ申し訳ないという気持ちにさせられて頭をより深く下げてしまうのでした。

やがて、さとの視線はおくうの方にも向きました。もぐもぐと口いっぱいフルーツタルトを頬張っていたおくうは小さく首をかしげて、こくんとお菓子を飲み下しました。

「貴女は、そうね、れいうじ霊鳥路という名字ではいかがでしょう？ 名前も読み方を変えて空うつほとしては？」

そう言われたときにお隣の尻尾が独りでに膨らみました。理由もよく分からないけ



れど、とにかくにも猫の本能がその名を頑なに拒むようでした。

ぎゅっと身体を硬くします。怒られて打ち首にされるのも覚悟の上で大きく手を広げて言いました。

「おくうは、おくうです」

そう言いはしたものの、さみしそうなさとの顔を見た途端に気持ちがおずおずとしぼんでいくようでした。そのように刃向かってしまったことを後悔させる気持ちが胸の奥から湧いて出てくるようでした。

それでも唇はわなわなと震えたまま、否定の言葉を取り消そうとはしませんでした。

「いいよ。大丈夫だよ、お憐」

横からすっとお憐の小さな肩を掴む手がありました。大きくて暖かい手でした。

「このひと、いいひとの感じするから、きつと大丈夫だよ」

おくうは静かに笑んでいました。それはお憐が初めて見るような笑みでした。ただ大きな翼で何もかも包み込んでくれるような笑みでした。

「……本当に本心から、そう言ってくれるのですね」

ほとんど泣きそうな顔で、さとりは呟きました。

「ええ、あなたの名字は霊鳥路。そのように定めることにいたしました。あなたの



家が代々栄えますように」

深く深く祝福するように頷いて、この話はこれきりお終しまいになりました。

三人では多かったように思うお菓子がいつのまにか全部無くなっていました。まるでもう一人誰かがいたみたいだと二匹が気づいたのは、長い長い地底の穴を潜っているものの棲処に戻ってからのことでした。



死因五 忘れられることによる死

不思議なお屋敷に呼ばれた後も、お隣たちの暮らしは何一つとして変わらないように見えました。死体を集め、役に立つものをあさり、役に立たないものは業火ごうかマントルの中に投げ込み、ほどよい火の付き方になるように炉を調整する。それ以外の仕事は特になく、お隣はお隣と呼ばれ、おくうはおくうと呼ばれ続けました。

地底は実体として何一つとして変わらないかのように見えました。けして変わらないものなどあり得ないのに、変化は非常に緩やかで巧みだったので、誰もが騙されてしまったのです。あれだけ賢かったお隣でさえも、何がいつからどのように変わってしまったのかを気づくことはありませんでした。

時々二匹は連れ立ってお屋敷に行くことがありました。怨婆がもう極楽へ行ってしまうて居ないので、何か困ったことがあったときに相談する相手としてはさとりしか居ないのでした。

おくうはこのお屋敷を好んでいるようでした。確かにここには灼熱地獄跡では見られないような珍しいものがたくさんあり、地獄鴉が生まれながらに持っている好奇心



を満たすにはもってこいだっただしょう。特に窓や床にはめ込まれているいくつかの色つき硝子はおくうを夢中にするにぴったりのものでした。鴉と名の付く生き物の多分に漏れず、ぴかぴかと光るものが大好きだったのです。

対して、お燐はこのお屋敷があまり好きではありませんでした。屋敷にあるものは余りにも綺麗すぎ、繊細すぎるので、自分の荒っぽい仕草やみすばらしい猫背や死臭が変に目立ってしまうように感じていたのです。さとりも、屋敷に出入りする他の動物たちも誰もそんな意地悪なことは言いませんでしたが、お燐が自分で自分をそう思う気持ちは変わりませんでした。

お屋敷は、本当にどこからどこまでがお屋敷なのか分からなくなるぐらいに広いものでした。全部で何階建てなのかも分からないと思うぐらいに大きなものでした。というのは、玄関のある場所が地面の上と見えても、それが三階だったりするからです。ついさっきまで地下二階をうろうろしていたと思っていたら、唐突に窓が開けていて地獄鴉や骸鳩むくろぼとの知り合いと『こんにちは』してしまうことがあるのでした。

お燐は出来るかぎりすぐにお屋敷から帰ったのですが、おくうが探検をしたがるので、仕方なしに付いていくことがありました。それでも一步一步角を曲がるごとに、得体の知れないものと出会う可能性について怯えないわけにはいきませんでした。



た。

床はどこまでもふかふかとして、どんな生き物の足音をも消してしまいます。生きていても死んでいても、存在していても居なくても、ありとあらゆるものを静穏の中に隠してしまいます。

賢い猫の鋭い耳を使っても聞き取れるか聞き取れないか、そんな危うい静寂の闇の中、用心深く臆病なお隣が安心出来るわけが無いのでした。

「あ、何だろあれ。すごい気になる！ 見てくるね、お隣！」

「こらこら、そんなに駆けるんじゃないよ」

また何か見つけたのでしょうか、今日もおくうは楽しそうに地霊殿の廊下を飛んできます。その後ろをお隣がついていきます。内心はおっかなびっくりなのに、そんな様子をおくびにも見せず悠々と歩いているふりを見せています。

お隣がびくつければそれだけでおくうが怯えるでしょう。あるいは泣いてしまうかもしれません。お隣はそれだけは嫌でした。怨婆に言われたというだけでなしに、おくうのことを絶対に泣かせてはいけないのだと心に誓っていましたから。

「おたから！ きらきらのおたから！」

ばさばさと翼をはためかせて、おくうはとても嬉しそうでした。廊下にぽつりと佇



んでいた食器棚に向けて何かごそごそやっています。小さな尾羽をふりふり振って、夢中で棚の中を漁っています。

窓の外には赤や黄色や緑、たくさんウツクの種火が浮かんでいました。今は鯰の沈んだ少し後、地上で言えば午後のおやつの時間です。空気に湿気が多いので上の方に逃げに來ているのでしょうか。

「見て見て、すごいきれい！ 目ん玉みたいにまん丸！」

中であつた何か小さなものを掲げて、光にすかして眺めています。

「瓶いっぱいに入つてとつてもお得だよ！」

おくうが手にしているのは小瓶に入つたビー玉でした。確かにそれはおくうが気に入るようなものでした。澄んで綺麗なものはお燐だつて大好きです。

けれどお燐はそれを見ていて嫌な予感がしました。九つはあつた命をまだ二つほどしか減らしていない賢い猫だからこそ、尻尾にびんびんと走る変な気配に気づくのでした。

「だめだよ、おくう。そいつはダメなものだ」

「腐らないよ？ さとり様はここにあるもので欲しかったら、何でもくれるって言うてたよ？」



「子猫たちが吞んじやったら大変でしょうが」

「瓶に入れて蓋^{ふた}しとくから平気だよう。ねえ、お燐。わたし、これが欲しいよ。すぐすぐ綺麗なもの」

いつも素直に言うことを聞くおくうには珍しく、このビー玉にはひどく執着^さしているようでした。

「このまん丸いのはお燐の目と同じくらい綺麗だよ。これを首に提^さげていたら、ずっとお燐と一緒に居るような気がするの」

そう言われるとお燐は少しだけ困りました。そんなにさみしい思いをさせているのかなと心配になるのです。

「今だってほとんど一緒にしようが」

「でもお燐もわたしもお仕事あるから。お仕事の時は一緒に居ないから。さみしいことだってあるよ」

おくうにしてはずいぶんと賢い指摘でした。たじたじとなったお燐は、根負けしてうなずいてしまいました。

かくして、一つ、旧地獄にはなかったものが地底の奥へ運ばれていったのでした。



皆さんは知っていますか。

小さな火花が一つあっただけでも、山火事は起こるのです。

靴の裏についたたった一本のひげ根が、在来種を駆逐することさえあるのです。

蝶の羽ばたき一つで、大きな嵐が起こることもあります。

だから、片時も目を閉じてはいけません。どんな些細な変化でも見逃さないようにしなければいけません。

災厄は足の裏側からにじり寄ってきます。丈夫な靴をはかなければいけません。全ての病が地中から起こるのだから、用心をしてもしすぎることはありません。

子猫たちにはいつでも用心が足りないのだということを、教えてくれる者はもう居ませんでした。地底で一番賢かった老婆はもう極楽へ行ってしまった。お燐も確かに賢くはありましたが、どうにもまだ経験が足りないのです。何しろまだ、せいぜい二回ぐらいしか死んだことが無いのですから。

ある日お燐が仕事から帰ってくると、おくうは泣きはらした目をして床にすわりこんでいました。

「セミパが居ないの。探しても探しても、どこにも居ないの」



それから小さく泣き出しました。

お隣は首をかしげて、それから洞窟中を飛び回っている小さな子猫たちの数を数えました。ちゃんと確認しないと減っているのかどうか分からなかったのです。なにしろおくうはよく物を失くしてめめそ泣いていたりする子でしたから。

子猫たちは思い思いのやり方で気を紛らわしていました。やんちゃなセメイは火ネズミの皮をびりびり破いています。末っ子のクルチャはミルクをたっぷり飲んで眠っています。噛みつきたがりのチャトフは洞窟を支えている石柱に喧嘩を売りまくっています。おませなパラバンは割れた鏡の破片を覗き込んで毛並みを整え、時々自分の尻尾を追いかけてくるくる回っています。おとなしいスクウは心配そうにおくうの顔を覗きこんでいます。いたずらっこのセメイは口にくわえたままの火ネズミの皮を……。

「あ、二回数えた」

もう一度数え直します。もう余計な形容は抜きです。

いたずらっこのセメイ、一番末っ子のクルチャ、噛みつき屋のチャトフ、ちびっこのに力持ちのラチン、大人しくて優しいスクウ、お寝坊さんでいつもぼうつとしてるチャガン、おませで歌が上手いパラバン。

「確かに、七匹しかいないねえ」



あまりに子猫たちが素早く動くので、お隣はちょっとだけ目が乾いてしまいました。

「さあ、お前たち、セミパをどこにやったんだい」

腕組みして仁王立ち。怨婆がそれをやったらそれだけで回り中の猫が小便もらしながらガタガタ震えたものです。子猫たちはさすがにそこまではしませんでしたが、ちよつとだけ怖じ気づいたように大人しくなりました。

「せみぱ？ しらない」

「せみぱ。のつぽのせみぱ」

「のつぽ、せいたか。……！ おれしってる。セミパのこと知ってる！」

ラチンが思い出したようです。お隣はもう一度問いかけました。

「どこいった？」

「いじめてないよ。つづいたら落ちただけ」

びくびくしながら子猫が答えます。他の子達も援護するようにして口々に叫びます。

「かえってくるよ。猫だもの。家につく」

「セミパがはじっこにいるのが悪いよ。おしくらまんじゅうなのだもの、押さなくちや」

「溶岩にぐらぐらドボン」



「よくあるよくある」

おくうの震える肩を抱きながら、お隣はぎろつと子猫たちをにらみつけました。

「こおら。ちゃんと探さなきゃだめじゃないか」

「はい」

それから、子猫たちはみんなで地底中を探し回りました。

セミパは真っ黒な子猫でした。お隣ほどではないにしても上質のビロードみたいに染み一つ無い真っ黒な毛皮をしていました。前足の足首に一回りくるとペンキであとをつけたような白いわっかがある他は、闇に紛れてしまえば分からなくなります。地底ほど暗いところはこの世のどこを探したってありっこないでしょう。ごくたまに噴き出してくる溶岩の照り返しや燃えている死体やごく僅かの光ひかりこけ蘚や種火ウイスラの他に、この地を照らすものは無いのですから。

それに自分の命をなくして、別の死体に取り憑いてしまえばその特徴ごと失われてしまいます。まったく別の、たとえば三毛猫の死体に取り憑いてしまったら、それだけでセミパがセミパだと分かるかどうか。

けれど、お隣はいくらか楽観的でした。自分も死体に取り憑いているわけですし、猫が迷子になって死んでしまうのは地底でなくてもよくあることです。



自分の持っている命を全て散らした子猫は、怨霊になってそのあたりをうろろしているのがいつものことでした。だから誰かがどこかで泣いているセミパをそのうにくわえて帰ってくるだろうと思っていました。

けれどもうセミパは帰ってきませんでした。

二度と子猫が帰ってくることは無いのでした。

それが可哀想な一匹目の子猫でした。

それが一匹目に過ぎないということを知っている者はこの時点では居ませんでした。
が。

お燐も大分慌てていましたが、おくうほどではありませんでした。ぶるぶる震えていて、このうだるように暑い地獄の中で、ただ一人で北極にいるみたいになんかおそれていました。そんなおくうをほうっておけなくて、お燐は子猫たちに指示を出すだけ出して、傍にいてやることにしました。

そのことを後にお燐は後悔したでしょうか？

答えのうち、半分はイエス、もう半分はノーです。初めのうちには、もう少し自分が動いておけばと後悔しました。けれど後になってからはそれどころでは無くなって



しまいました。

なにしろ後になって振り返ってみれば、このときが一番まともだったのです。後になればなるほど、何もかもがおかしくなっていくばかりなのでした。そう、どれだけ変に見えても今が一番まともなのです。これからどんどんどんどん悪くなっていくばかりです。

その夜、九匹になってしまったこの家の中でおくうが泣き止むことはありませんでした。その様子はまるきり雛の頃に帰ってしまったような感じがしました。

お燐はおくうの頬をたくさんたくさん舐めてやりました。いつまでもいつまでもしおばい水があふれだして止まらないので、岩塩と水を舐めるように言いましたが、おくうは首を振るばかりでした。

おくうが泣き止まないのも、ごはんはお燐が作りました。すぐに出来るひき肉を入れたおかゆでした。光のないところでも育つもやし麦をちよつとの水とスパイスで煮たものです。しかしお燐はご飯作りにあんまり慣れていないのでスパイスの分量を間違えました。涙目になりながらみんなでかつ込みました。そうしないと口から火を噴いてマグマの中にダイブしたくなるような辛さだったのです。地獄の土は火の養分に満ちていますから、スパイスの分量は気をつけなければいけません。



おくうが泣き疲れて眠ってしまったので、皿洗いは子猫たちに任せました。

ずた袋のハンモックで眠っているおくうの背中がそつと震えるごとに、お燐はなんとも言えない、胸がむず痒くなるような気持ちになりました。なんとかしてやりたいという気持ちがわき上がってくるのでした。

小さな、特に良いところのない自分の手で撫でてやります。おくうの体温を感じました。添い寝をして、暖めてやるのが出来ればいいのに、お燐の身体は冷たいままなのでした。魂が取り憑いているだけのただの猫肉の魂なのですから、それも当たり前のことではありました。本当はご飯だって食べなくて良いぐらいでした。

それでもただ、柔らかくそばにいたことが出来ればいいと思いました。

小さく頷いて、四つ足の子猫の姿に戻りました。おくうが目覚めるまで、お燐はそばにいてやることに決めたのです。もともと胸元のあたりに忍び込みます。独りでにぎゅっと抱きしめる手がありました。少しだけ息苦しいのを我慢しました。とくとくと巡る心臓の音を聞きながらお燐もまた静かな眠りに落ちました。

やがて、あくびをしておくうが目を覚ましました。一緒に目覚めたお燐は前足で小さく顔を洗いながら訊きました。



「元気になったのかい？」

「うん、すごい元気。あー、のどかわいた」

そう言って、台所の水瓶からぐくぐくとひしゃくで水をのみました。

「そりゃあ、昨日あれだけ泣いていたからねえ。喉も乾くだろうよ」

「あれ、泣いてたんだっけ」

何でだっけ、とおくうは言いました。

もうすっかり昨日のことは忘れてしまったみたいでした。

「はは、泣いたカラスがもう笑った」

お隣は小さく苦笑して、ぴょんとハンモックの上から飛び降りました。

いつものことでした。

これがいつものことでした。

一晩経つと、だいたい悲しいことは忘れてしまうものなのです。おくうはまだ心のどこかに殻をくつつけただけの子供なのですから。

何もかも、消えて、忘れて、いなくなっていくのです。悲しいことも嬉しいことも楽しいこともさみしいことも。

それが生き物というものです。生きているということは、ゆっくりと死に近づいて



いるということに他なりません。

だから、この子供たちを叱ってはいけません。仕方のないことなのだと言明して許してやらなければなりません。

たとえば、どんなことがあっても。



死因六 一人寝過ごして八人になった

日々は簡単に過ぎていくものです。十人の家族が九人になってしまってからまた少し経ちました。

セミパのことはさとりには伝えませんでした。けれどお隣の心を読んだのでしょうか、ほんの少しだけ心配そうな顔をして、お茶会の残りのお菓子を包んで渡してくれました。

「子猫が帰ってきたら、忘れずにあげてくださいね」

綺麗な花の型押しがされたナプキンと細いリボンに包まれたお菓子は本当に可愛らしかったのですけれど、お隣は何故だか素直に受け取る気がしませんでした。

「美味しそうだなー、いいなー、セミパは」

横から覗き込むおくうが涎を垂らさんばかりにそう言っているのがお隣には恥ずかしくてたまりませんでした。思わずむっとしてこう口走りました。

「あんたはもうたくさん食べているでしょうに」

それでもさとりは静かに笑んで、言いました。



「いいですよ。もっと欲しければ差しあげます」

「ああもう、さとり様、おくうを甘やかしたらダメですよ」

「わあい、さとり様だいすきー」

もう一つお菓子包みを受け取ったおくうは、ぴょんぴょん跳ねていきます。クッキ―を落としそうになりながらも、お隣に取られないように全速力で駆けていきます。お隣は眉間に手を当てて深く息をつきました。そういうことをしたくて言ったわけではないのに、上手く気持ち伝わらないのでした。

帰り道にたくさんのことを考えました。このところ、何をどうしたらいいのか、いろいろなことが分からなくなってくるのでした。

怨婆がいた頃には正しいことと正しくないことはきっぱりと別れていました。怨婆が良いと言えればそれは良いことだし、そうでなければそうでないのです。考えなくてもただ単純に怨婆だけを慕って、怨婆のためだけに生きていました。怨婆がいなくなっただけというもの、叱ってくれるひとは誰もいなくなってしまうました。

さとり様は誰かを叱るということが出来ないようにいつでも優しく微笑んでいます。時折悲しそうに目を伏せることはあっても、何かで声を荒げるようなことはお隣にはまったく想像も出来ないことでした。



ともあれ、自分がなんとかしなくてはなりません。自分が猫の中では一番賢いから、怨婆にこの場所をまかされたのです。英雄になりなさいと長靴を渡されたのですから、自分が、自分の頭で、どうにか良くしていかないと。

二匹はいくつもの穴蔵あなぐらを通り抜けていきました。落ちていけば果ての無いような縦穴。地中を何処までも続いていきそうな横穴。曲がり道を間違えたら多分、元いた場所へ帰ってくることが出来ないような地獄ありづかの蟻塚をくぐり抜けていきます。

ぐるぐると迷路の中を歩いている二匹。片方は考えなしにひよこひよここと跳ねていき、片方は考え事をしながら歩いていました。

真っ黒な羽根と真っ黒な毛皮と。

真っ黒な尻尾と真っ黒な耳と。

同じ色をして、同じ場所で暮らして。

それでも少しずつ違ってきているのです。

少しずつ少しずつ道を違ってきているのです。

それはさみしいことでした。それをさみしいと、どうにかしてつなぎ止めたいと思ってしまうのでした。

「そんなに食べたいなら、これも食べていいよ」



ぽつりと言葉が落ちました。唇から紡がれた音が洞窟の中、足音に混ざって響き、そして消えていきました。

きよとんとした顔でおくうは見上げました。縦穴の後からついてくるお燐はなんだかむすつとした顔で見返していました。

お燐は握りしめた紙包みをぐっと差し出して、おくうの胸元に押しつけるようにしました。

「いいよ。家出した子は悪い子だからおやつ抜きなんだ。おくうが代わりに食べたって悪いってことにはならない。セミパの分、あんたが食べていい」

「そうかなあ、なんか悪いよう」

おくうはそう言っておずおずと手を引っ込めるのでした。

「良いいって」

ぐいぐいと押しつけて、手の中に無理矢理押し込めようとして、そして、あっと気がつけば紙包みは破けてしまっていました。焼き菓子穴の中に散らばって落ちていました。赤色のジャムがきらきらと宝石のようにきらめいてそして地面に衝突しました。

「ああいう勿体ない^{もったい}」



落ちて二つ三つに割れてしまったビスケットを拾い集めながらおくうは呟きました。

「拾うなってば」

「三秒ルールだよ」

常ならば笑って許していたのだと思います。お隣だつてそんなにしょっちゅうカリカリ怒っているわけじゃないのです。こすっからい地獄の中で、いちいち神経をとがらしていたら身体と心がいくつあつても足りません。

けれど今日に限っては嫌な不安が尻尾をびんびんと揺さぶるのでした。そのようにして、地面のチリにまみれた菓子を後生大事に拾っているおくうを見ると情けなくて涙が出そうになつてしまふのでした。

「ダメだつて！」

お隣はびしゃりと手をはたきました。

おくうはあまりのことに大きく目を見開きました。みるみるうちにその目に涙が溜まっていき、大粒の水滴がころりころげたか転げなかったか、それも分からないうちにうわあんと泣いて走り出しました。本当にただの雛の頃に戻ったように泣いて飛び出していつて、絶対に追いつけないぐらいでした。風速で落ちたお菓子が全部粉々になるぐらいの超高速で飛んでいつて、たちまち見えなくなつてしまいました。



取り残されたお隣は小さく口をぽかんと開けて、誰もいなくなった洞窟で立ち尽くしていました。うわんうわんと響いた泣き声もやがて消えていってしまってから、小さく息をついて、肩を落としてうなだれました。

お隣は自分の立てたむかつ腹をとくに後悔していましたけれど、独り言であつてもそれを口に出したりはしませんでした。泣かしてしまつてごめんねと謝ることさえ出来ずに、もじもじと二本の尻尾を絡み合わせているばかりなのでした。

一人で家に帰るといふのは、どうにもやりにくいものでした。地底が危険な場所だったというのも確かにあります。二匹いれば、たとえ獰狼に追いかけられても、煙に巻いて逃げる事が出来ます。調子がいい時には上手いことからかつて、マグマの中にどぼんと落としてやることだつて出来るでしょう。

それが一人ではどうにも上手いきません。自分の身体を半分に分けて、片方が囹で片方が追い込む側というわけにはいかないのです。まあ、お隣ぐらいの猫になればそれぐらいのことは出来なくはないのですが、死体を二体も同時に操ると言うことになるだけでも動きが遅くなつてはしまいます。

背筋を伸ばさなきゃと思うのに、どうしてもくたんと猫背になつてしまふのでした。身体を操るのがどうにも億劫おっくうになつてしまつて、上手く脚が持ち上がらないような氣



がしました。

脱いで帰ろう。

自分一人なのであればどうしても身体が無ければいけないということは無いのでした。家に帰れば、手頃な死体ぐらゐは用意してあります。身体が重ければ身体を捨てればよいのです。何も持っていないければ幽体離脱して、魂だけになって帰ることが出来ます。

だって、手を引かなければいけないような子供はもう傍にいないのだし。

お隣の思考はどうしてもそこへ行き着いてしまつて、またどうしようもないため息が漏れるのでした。出来るだけ早く忘れてしまいたい、身軽になつてしまいたい、そう思つてなりませんでした。

洞窟の適当なくぼみにうずくまつて、お隣は深く息を吐き、意識を沈めて、そして魂だけを起き上がらせました。

何も持たない。自分の心、自分の意志、自分の思いだけがあつて、重い水気を含んだ死体の重みに縛られることなく存在しているということ。

お隣がかつて持っていた幸福の形でした。たった一人で生きていたころの懐かしい幸せでした。シンプルで、身軽で、気楽な在り方^あでした。生きていても死んでいる



ともつかない怨霊が重苦しい身体に縛られていること自体、不自然なのだと自分自身では思っていたころの気持ちでした。

けれど今はもう存在しているというだけでは幸せを感じることは出来ませんでした。それどころか、足下に大地の感覚がないというだけで、手元に誰かの体温が無いというだけで、何とはなしに心細いような気持ちになるのでした。

一人でおうちに帰りました。

ふらふらぶらぶら帰りました。

誰も何にも言いませんでした。何も持たない者は、誰にも相手にされないのです。そこらを漂っている種火^{ウイろう}に灯り以外の意味がないのと同じように、奪われる価値もないような者には誰にも興味を持たれないのでした。

「ただいま」

声をかけたのに子猫たちはきょとんとして赤色青色にぼんやり光る怨霊を見上げて
いるか、さもなくば気づかないかのよう顔に洗っているばかりでした。種火^{ウイろう}のま
までは認識してくれないようでした。

お隣は仕方なしに、手頃な死体を裏の倉庫から探してきました。腐らないように塩
漬けにしてあったので、ちよっぴりしおぱくて、居心地の悪い屍肉でした。血の凝り



固まった関節はぎしぎしするし、腐りやすいはらわたも先に抜かれているからどうにも落ち着きません。後でちゃんとお風呂に入って綿でも詰めておかなくちゃいけません。

「にゃーん、お隣だ、おかえりー」

ちゃんと気づいたラチンが飛びついてきてくれました。他の子猫たちも次から次へと抱きついてきて、たちまちお隣は猫の成る樹みたいに両手両足に二匹ずつぐらい子猫をぶら下げた状態で玄関口へ立ち尽くすことになりました。

「よおしよしよし。ただいまただいま」

どうにか一匹ずつ猫を剥がしながらどしどし家の中に上がりました。穴開きの袋のハンモックへピラミッド状に子猫たちを積み上げて、やっとお隣は一息つくことができました。

「おりんー、おくうはー?」

「えー、あー、もうじき帰ってくるんじゃないかねえ」

そう言いながらもお隣は目を合わせることが出来ませんでした。小さい子猫たちにお菓子のことでけんかしたなどと、みつともないことは口が裂けても言えそうもないのでした。もちろん化粧猫の口は初めから横までしっかり裂けているのですけれど。



お風呂に入ってくる。覗くんじゃないよと言い置いて、逃げ去るようにしてその場を去りました。それでも子猫たちの噂する声が聞こえてきそう、お燐はまた身体を脱ぎ捨てたくなりました。

余計なものを持っていなければ。

余計なものを欲しがらなければ。

余計なことを考えなければ。

余計なことを望まなければ。

自分の持っている全てのものが余分で邪魔で鬱陶^{うつとう}しいだけのもののように感じられました。腹を満たすことも、舌先を誤魔化す甘みも、肌触りの良い毛布も、居心地の良い洞窟も、自分の身を案じて慕ってくれる家族そのものも、自分を包むありとあらゆるものが不必要なもののように感じられました。

その気持ちを洗い流すみたいに、赤さびを漉^こしただけの、鉄臭い血の池地獄の水で水浴びをしました。

どれだけ洗い流しても、自分の体に染みついた水気と重みとは消えそうもないのでした。お燐はまた深い深いため息をついてお風呂から上がりました。

髪を拭いていると、すぐにおくうが帰ってきました。



「にゃーん、おくうお帰りー」

お隣が帰ってきたときとまったく同じように歓迎されて、おくうはにこにこ笑っていました。

「わあい、ただいまただいま！」

そのまま子猫たちと一緒にころころ洞窟の床を転がって、部屋の隅の毛布やクッシヨンの山に頭をつっこんで遊び始めました。

何もかも、たぶん、忘れてしまったのです。

嫌なこと、居心地の悪いこと、ばつの悪いこと。

恥ずかしいこと、気持ちの悪いこと、愚かしいこと。

何もかも都合の悪いことは忘れてしまうのです。

お隣だって、そうすることがあります。肉体を脱ぎ捨てると一緒に、自分にとって良くないことは肉体の方においていきます。気持ちが晴れ晴れとしていい気持ちになれるのでした。

だから、忘れてしまったおくうを一方的に責めることなど出来るはずはないのです。た。

それにけんかした思い出なんて、ない方がいいでしょう？　ぎすぎすした気持ちの



まま、大事な家族と過ごしたくはないでしょう？

そう、今までは確かにそうでした。

今までは、お隣だつてそう聞かれたら、うんとうなずいていたに違いありません。けれど、今までとこれからは、違います。

これから先のことなど、誰にもわかるはずはないのでした。

未来は暗黒で、お先は真つ暗で。

今までにあったものが全部なくなるというこんな時代に、今までのことなんて当てるはずがないのです。

そのせいなのかどうなのか、お隣は大切なことを忘れずにいたのです。

けんかをして、それを謝らなければいけないということ。

大切なことを、うやむやにしてはいけないということ。

何とはなしに尻尾がぴくぴくとして、忘れてはいけないんだと思わせるのでした。

「あ、あの、さ」

おずおずとお隣は切り出そうとしました。

「ん？　どしたの、お隣」

振り返ったおくうの目は、透き通っていました。あまりに透き通った赤色をしてい



たので、お隣のことがきちんと見えているのかしらん、と心配になるほどでした。

そしてその目が涙で曇っていたときのことを思うと、お隣の胸はきゅゅと軽く締め付けられるような痛みを感じるのです。

思い出させれば、また泣かせてしまうかもしれない。それが怖くて、お隣は逃げ出したのです。おくうがそんなに弱い子ではないことは十分知っているはずだったのですけれど。

「……何でもないや。ごはんにしよ」

「そだねー。今日はごちそうの塊肉の日だ」

「そういうことばかり覚えてるよねえ、おくうは」

お隣は小さく嘔き出しました。そうして自分も忘れることにしました。

喧嘩したことをまるごと忘れられてしまうのはよくあることでした。おくうの小さな頭では、覚えられることはごく限られているのです。

だから本当に大事なことで覚えていてくれればそれでいいのだと、お隣はいつでもそう思うようにしていたのですけれど。

けれど。それでも。今日はいつもとずいぶん勝手が違うように感じました。

忘れようとするごとに何故だか尻尾のあたりがむずむずしてしまうのでした。



お隣にはさっぱり理由が分かりませんでした。

どうして本当に大事なことでだけ大切に出来ないのでしょうか。

お隣はおくうが大好きでした。

おくうだって、お隣が大好きに決まっています。

どうして、たったそれだけでは生きられないのでしょうかね。

その日の夜遅くに、一匹の子猫が息を引き取りました。

翌朝、往診に来た岩蟋蟀がんこおろぎの医者は一アモンドのトフィーをのどに詰まらせたせいだ

と言いました。大人びたパラバンのことですから、密やかに拾ってきて隠していたおやつを独り占めしようとしたのだろうと決めつけたのです。

死体から湧いて出た魂は、何も弁解をしませんでした。ただゆうらりと幽体離脱して、もう二度とこの洞窟へは帰ってきませんでした。今でもまだ種火ウイソウのまま、どこか

の地下湖で花でも育てているでしょう。お隣もおくうもそう考えることにしました。

けれどそのお菓子がどうしてこの洞窟に入り込んできたのか、誰にもわかりませんでした。賢いお隣にすらそれはわかりませんでした。おおかたどこかでもらってきたのだらうと、当たりをつけて、そのことを考えるのはやめにしました。



けれど、それはありえないことなのです。

あのとき地面に落ちたお菓子はどう、バラバラに砕けてしまったはずなのに。子猫

がのどに詰まらせるほどの大きさにはなるはずがないのに。

砕けてしまったビスケットは、二つには増えないのです。

絶対。



死因七 一人そこに残って七人になった

日々は簡単に過ぎていくものです。十人の家族が八人になってしまってからまた少し経ちました。

いつものとおり仕事に行き、役に立ちそうなものを見つけては持ち帰り、そうではないものについては業火の中に投げ込む生活が続いていました。

地獄の火は少しずつ死んでいくようでした。旧灼熱地獄はもはや罪人を投げ込むべき場所ではなく、ただ昔の栄華を誇るだけの場所になっていました。

紅蓮の湖に住む牛頭馬頭ごずめずの夫婦も、旧地獄街道の方へ引越していきました。娘が面倒をみてくれるというので、生活が便利な都会の方で暮らすことにしたのでした。

旧地獄街道は冬には雪が降るような寒いところですが、どうにか娘さんが一生懸命老夫婦を説得にあたったようでした。

火がなくては生きていけなかった極楽鳥や焰狼も少しずつ数を減らしていきました。彼らにとっては今のマグマの熱はどうにも生ぬるく、風邪を引いてしまう程度の温度しかないようでした。熱を求めて求めて溶岩の中に潜った後、冷えて固まってしまっ



た岩石に閉じこめられてしまう事故が多発しているようでした。

猫たちの仕事も少しずつ減っていききました。これまで地獄の火を絶やさないようにきちんと供給されていた死体も、少しずつ数を減らしていくようでした。猫たちは猫車を丁寧に整備しました。これまでは忙しくてきちんと補修することもままならなかったのですが、丁寧に袋を繕えば繕うほどに死体と資源とは減っていくように思われました。

もちろん、日々の暮らしの中におもしろみがなかったかといえは嘘になります。ここからい地獄の中にもいくらか楽しいことはありました。種火^{ウィスプ}を集めて大きな線香花火みたいにして縦穴から落として粉々にしてみたり、湖で捕まえてきた目明き穴子をつなぎ合わせて大縄跳びをしてみたり、ひび割れパン亀でサッカーをしてみたり。ほかの生き物を捕まえてその死体や半分死んだようなのをおもちゃにするのは、猫たちがよくやる遊びでした。

それでもお隣は時々昔のことを思い出すことがありました。

あのころは怨婆がいて、もっともつと良い時代だったように思いました。火はこうこうと明るく、熱く、いつまでも絶えないような感じがしました。地獄に棲む獣たちはもっと強く、もっと賢くて子猫なんかににはけして捕まらないようにはしっこかった



ように思いました。

物足りないわけではないのです。けれど、さとりのところに行って相談事をするごとに、自分の性根の卑しく貧しく下品であるような気がして、己の身を恥じるのでした。

もっと冷ややかに、もっと高貴に、もっと儂く。

薄く焼かれた青磁のように。

そのようなものが美しいものなのだと、お隣は思っていました。何しろ、それ以外に本当に美しいと思ったものなどなかったのですから。

「どうしたのです、お隣」

午後のお茶に呼ばれた時、さとりにそう言われました。知っているくせに、とお隣は内心思いましたが、そのことすら読まれているのだと思って小さくかぶりを振りしました。

時々、ご主人はこのような意味のないやりとりを好みます。何もかも読まれているはずなのに、わざと言葉に出させるのです。

そうすることでより考えが強く、シンプルになるということはわかっていましたが、お隣はそれがあまり好きではありませんでした。わざわざ言葉なんていう不自然なも



のに頼らなくても、わかってもらえらるならそれに超したことはないと思うのでした。

お隣は言葉を嫌いました。言葉は、重くて、面倒で、冗長で、野暮^{やぼ}つたいものです。どれだけ言葉を尽くしたって、伝わらないものや抜け落ちてしまうものがあります。言葉というものは、口から出ても、書き物に残しても、やがては消えていくくせに、ひとの心にみじみじと食い込んで波紋を残します。

「何も、なんにもないです」

お隣はようやくそれだけ言いました。そうして視線をわざとらしくそらして横を向きました。

そっぽを向いたたちょうど席の隣には、お菓子を思いっきりほおばったおくうがいました。今日のメインはカスタードクリームのフルーツタルトでしたから、口の周りがべたべたになっています。

「うにゅ？」

間拔けな声を出して、おくうが尋ねました。

「……共食いという観念がないよねえ、あんたって子は」

紙ナプキンでおくうの口を拭いてやりながら、お隣はぼやきました。

きっとおくうはカスタードクリームの黄色が何に由来しているかについて考えたこ



とがないのでしよう。知っていたとしても忘れてしまっているのかもしれない。

自分が猫に囲まれて育ったせいで、自分のことを鴉ではなくて猫だと思っている可能性も十分にありえます。育て方を間違えた可能性について、お隣は悩まないでもないのでした。出来るだけ卵や鶏肉は与えないようにしていたのですけれど。

と、くすくす笑いが聞こえました。

「何ですか」

「いえ、別に」

さとりは憂鬱そうな笑みを浮かべていました。声を出して笑うような表情ではありませんでした。

「気にしないでください。笑い顔だけを残して消えていく猫ならいるのですから、笑い声だけの妹がいても不思議ということはない」

最近地底に来たにやにや笑いのチェシャ猫のことはお隣も知っていました。いつも意味のわからない笑みを浮かべては消えていくので、みんなに気味悪がられているのでした。

けれど笑い声だけの者が来たなど知りませんでした。お隣は小さく首をかしげました。



「笑い声だけの妖怪がいるんですか？」

「今のは比喻ですけれどね。そのように、世の中には気にしても仕方のないことがあるのです」

非常に回りくどい答え方ではありましたが、苦虫をかみつぶしたようなさとりの表情を見たので、それ以上尋ねるのを止めました。

さとり様はいつでもさみしそうだ、とお隣は思いました。重苦しくて暗いこの場所に住んでいるから、そうなるのかもしれないとも思いました。

「さとり様は熱いの苦手ですか？」

一緒に住めばもっと楽しく軽くハッピーになれるかもしれないとお隣は思いました。溶岩は確かに暑くて臭くて時々うんざりするぐらいだけれど、流れて軽くて明るく光るものではあるのです。軽石だつて火山灰だつて、軽くてよく動くものではありません。もっと暖かくさえあればこの場所だつてもっともっと居心地良く朗らかでいられるかもしれません。

「ええ、あまり得意ではありません。私がこの屋敷を構えることが出来たのも、灼熱地獄が少しずつ冷めていったからなのだと思いますよ」

さとりはそう言って、また憂鬱そうに笑いました。お隣の言葉はけして慰めにはな



らなかったようでした。

「ありがとうね、お隣。嬉しいわ」

それでもさとりは笑みを絶やさずに、そう言ったのでした。

「……別に、なんにもないです」

お隣には何も出来ないのです。それは確かに悔しくはあったのです。けれどそれを今更とやかくする気はないのでした。

多分、救われたくなどないのだろうとお隣は考えました。それから、思いついて頭の中で考えを一つにまとめました。じいっとさとの顔を見つめました。深い深い紫水晶の瞳を覗き込むようにして思いを飛ばしました。

あなたは誰かに救われることなど望んではいけないのでしょうか？ と心の中で呼びかけたのです。

さとりは微笑してゆっくりと深くうなずきました。ただ深く視線だけをかみ合わせ、一人と一匹とは見つめ合いました。

「うにゅ？」

おくうだけが不思議そうな顔をして首をかしげていました。けれどやがて何かを納得したような顔をして、小さく頷きながらまた一つシュークリームを頬張るのでした。



帰ると、春が来ていました。硫黄の匂いが立ちこめる季節がまたやってきたのです。猫たちをきちんと組織して引越しをせねばなりません。

これが最後の春なのだという予感がしました。

火の勢いが少しずつ衰えていたのです。火の塊である硫黄が暴れ回るのもきつと最後のことでしょう。もちろん、子猫たちも出来る限りのことはしていました。食べない分の屍体はちゃんと地獄の業火へ投げ込んでいました。無駄にして腐らせてしまうようなことは絶対にないようにしていたのです。

それでも、もう必要のない火は燃えさかることはまれでした。なにしろ本当の地獄は別にあるのです。ここにあるのはただの名所旧跡でしかないのです。誰が滅びたお城に最新鋭の警備装置を備えるでしょうか？ 誰が王様のいない宮殿にごちそうを運び込むでしょうか？ 資源は有限なのですから、余計な力を浪費するほどの余裕はこの世界にはありません。

この場所は、もう要らないものたちの住むところなのです。

お隣とおくうは手分けして子猫たちを麻袋にいれました。子猫たちにはにやうにやうくすくす笑いながら滑り降りていきました。噛みつき屋のチャトフだけは機嫌が悪か



ったので後回しにしました。

「さあいくよ、わがまま子猫。最後はお前だけだ」

最後になって、お隣は呼びかけました。

「いやだ」

子猫は言いました。

お隣にはまったく信じられませんでした。本気でそんなことを言うなんて自分の耳を疑わずにはいられませんでした。腹立ちのあまりに思わず口が耳まで裂けてしまいました。

それでもチャトフの機嫌は変わらないようでした。

「ぼくは、セミパを待つよ」

「馬鹿いつてんじゃない」

手を取ろうとしても、振り払われます。チャトフの目にはうつすらと涙が浮かんでいました。本当の本気で、最初にいなくなった子猫を待ち続けるというのです。

チャトフは泣くまいとこらえながら、言いました。

「お隣もおくうも忘れちゃったんだ、全部の大事なこと、忘れちゃったんだ」

お隣はかっとして手を振り上げました。殴り伏せて、袋詰めにして連れ去ってしま



えばいいのだと思ったのです。

それをおくうが握りしめて止めました。

「忘れてないよ」

おくうは言いました。深い、静かな声でした。その中には確かに痛みが含まれているのでした。

「わたしが忘れちゃっても、お憐が覚えておいてくれるよ。だってお憐はいつとう賢い子猫だもの」

でも、さよなら。

「さよなら、さよなら、子猫」

おまえが、そうするのなら、止めない。

そのようにして、その子猫は置いていかれました。今でもまだどこかでいなくなつた他の子猫のことを待ち続けているのかもしれませんが。

それが正しいことであつたのかどうか、お憐にはわかりませんでした。そしてそれがわかるようなひとは、きつと最後の裁きを行う閻魔以外にはいないでしょう。

時間の限られた中で、最善と思われる選択をする以上のことは、我々には出来ない



のです。



死因八から九 薪割りで自分を割り、蜂に刺され、

日々は簡単に過ぎていくものです。十人の家族が七人になってしまってからまた少し経ちました。

最後の春が消えていってしまったから、猫たちは棲処を探す旅に出ていました。ようやくと手頃な洞穴ほらあなを見つけたと思ったらそこには先住民が巣くっていてなかなか良い穴が見つからなかったのです。

誰も彼も、怯えているようでした。少しずつ少しずつ獣たちは消えていくのでした。地に飲み込まれ、飢え死にし、溶岩の中に閉じ込められました。取り憑くべき死体を見つけれない怨霊の数がどんどん増えていきました。彼らは皆懐かしい地獄を恋しく思つて、地縛霊になってしまふのでした。猫たちはそうならないように地底を用心しいしい歩きました。

床は揺れても天井が割れないのが唯一の救いでした。猫たちは何度も何度も地割れに飲み込まれましたが、どうにか頑張りました。

潰れても大丈夫なお燐が挟まれて時間を稼いでいる間におくうがせつせと猫たちを



袋詰めにして自分の翼で羽ばたいて飛び立つのが一般的なやりかたでした。その他にもお隣が猫たちをくわえて運んでいる間に力持ちのおくうが大岩を担いで挟んで防ぐこともありました。

雨のように降ってくる火山灰をおくうの羽根で防いだこともあります。おくうの真っ黒な羽根が灰色のまだらに汚れました。それでも洗うための清潔な砂も水も無いのです。ふるふる羽根をはらうとまだらがまんべんない灰色に変わりましたが、あまり解決にはなりませんでした。少し休んでいる間に猫たちが総出でおくうの羽根を舐めてやりました。灰は見た目だけなら粉ミルクに似ていましたが、苦くてじやりじやりしてちっとも美味しくありませんでした。ごめんねごめんねとおくうは言いました。おくうがそう言うごとにお隣はごちんと頭を撲ぶちました。謝るなと言いました。それだから、おくうは謝る代わりにくう、と鳴きました。泣き笑いでは口はうまく開きませんでした。きちんとくああと鳴くことが出来ないのです。

やがて猫たちが見つけた洞穴では、最後の煙角鹿けむりつのじかが息を引き取ったところでした。鹿は倒れたままで、さみしい優しい目を見開いて死んでいました。大きな揺らめくような角はかさかさに乾いて光沢を失っていました。魂はおびえるようにしてすぐにどこかへ消えてしまいました。



猫たちは久々にありついた新鮮なごちそうを目の前にして、興奮が抑えられない様子でした。何しろ腹ぺこの育ち盛りの子猫たちだったので、あつという間に鹿を解体して肉の形にしまいました。

南無阿弥陀仏はありませんでした。

主の祈りありませんでした。

祭詞もしのび手もパニヒダも位牌もコーランも音楽もありませんでした。

ただ「いただきます」だけがありました。

鋭いかぎ爪でかつさばかれた脇腹に顔を突っ込んでもぐもぐする子猫たちがいるばかりでした。口の周りを血でべちゃべちゃにして、湯気を立てそうに暖かいハラワタを喰い漁るばかりでした。動物のハラワタにはたくさんのビタミンやその他の栄養素が含まれているのです。だから皆さんも魚を食べるときはできればハラワタまで食べた方がいいですよ。

ともあれ、満腹にはなったのです。しばらくの間の食料も十分です。

そうなれば次にやることは何でしょう？

昼寝です。寝るためには寝床を整えなければなりません。毛布もクッションもハンモックもない場所でした。遠くへ拾いに行くには少し疲れすぎています。仕方がない



ので、みんなで手近な羽毛布団——もとい、おくうに飛びかかりました。

「ぎゃー、重い重いしぬしぬ」

おくうは叫びましたが、それぞれがベストポジションに収まると意外と平気なものでした。ちゃっかり頭の下にお隣を据えて枕にしました。お隣は顔をしかめました、小さくみじろきをするぐらいで何も言いませんでした。

体温で温もりあうと大変心地よいものでした。猫たちはそれを学びました。次からは皆で寄り集まって寝ることにしました。何しろ地底はどんどんどんどん寒くなっている、これから先も暖かくなることは到底望めないと思ったからです。

次の日、猫たちはずいぶん遅くまで寝過ごしてしまつてから異変に気がつきました。目が覚めなかったのは、いつまでも空気が乾いたままでした。

そうです。いつもなら空気を湿らせて、時を知らせてくれる大鯰が上つてこなかったのです。そのせいで寝過ごしてしまつたのです。

いつものように屍体漁りをしようと情報を仕入れにいくと、辺り一面が噂でもちきりでした。耳をそばだてると地底中の声が鯰のことをつぶやいていました。

特に闇市では肉くずを買い取ってくれるはげぼうだか禿坊鷹の肉屋も、脂身を取引するよろいかぶと鎧甲蟲の



蠟燭屋もまことしやかに大鯰の肉の買値について話し合っていました。

大鯰は死んだのだというのがもっぱらの噂でした。

太陽が沈んでも食えないでしょうが、大鯰ならば食える、その点で大鯰は良い生き物だったと皆が噂していました。役に立つ者は良いものです。たとえ食い物にされるにしても、死んでなお役に立つというのは良い物です。誰が作ったのかは知りませんが、大鯰を称える勇ましい歌さえ生まれていました。

市では遠征隊が募集されていました。大鯰の死因を確かめに行く学術的な団体と銘打ってはいましたが、報酬として鯰の肉がうたわれていましたから、主催者の魂胆は明らかでした。解体には労力が必要なのです。ともあれ、誰にとってもそれは悪くない話のはずでした。

勇敢な子猫の一匹、力持ちのラチンがそれに応募しました。すぐにそれは受理され、出発式が市場の台地で行われました。

猫たちも見送りに行きました。

「いっぱいお肉持って帰ってくるね」

ラチンは腰に重たい鉈なたをぶらさげて、旅だって行きました。薪となる骨や肉を解体ばちすのに使っていたものです。大きな翼と脚を持った火喰い鳥や長い腕と怖い赤ら顔の



死屍猿^{ししざる}に混じって、その体軀は大変小さく見えました。

市場はごった返す妖怪たちのせいで異臭が立ちこめていました。汗と埃と血の臭いに混ざって殺気だった獣たちの体臭が濃くなっているのです。遠くの方で、苛立つた誰かと誰かの角がぶつかり合う音が聞こえてきました。

生き物と生き物が近づけばそれは確かに暖かいものです。地底の熱が少なくなれば、そのようにして生き残るしかなくなります。

けれど距離が近づけばそれだけ争いも絶えなくなります。これまで遠くで離れて暮らしていた者同士が近づけば、今まで見えていなかったお互いの在り方が見えすぎてしまつて、不快に思うことも増えて行くのです。このようにまた新しい形の不幸が、始まつていくのです。

お隣はすぐに子猫たちを巣穴に返すようにしました。急^せくようにしてラチンへさよならをいい、抱きしめると、足早に闇市を去ろうとしました。

おくうもその後に続きました。それでもちらりちらりと後ろを振り返って、時々はぐれそうになつて、お隣にこら、と怒られました。手をしっかりとつかないではぐれないようにしました。

確かに市ではたくさんのものが売られていました。きらきらと珍しい虹色をした目



玉、ふるふるとマンゴーみたいに甘い香りを放つ脳みそ。ピンク色で噛み応えのありそうなアキレス腱。どれも大変においしそうで、見ていただけでよだれが垂れてきそうでした。

お隣はどれを買うこともしませんでした。貧乏だったのです。今も昔も変わらず、猫たちはずっと貧乏であるのに、昔よりも今の方がずっと惨めなような気持ちがするのでした。

あれが欲しいよう、と子猫の一匹が言いました。お隣はぎろりと睨み付けて黙らせました。

これが欲しいなあ、と子猫のもう一匹がつぶやきました。おくうは静かに笑んで、帰ったらいっぱい描いてあげるからねと言いました。そうして、お隣の顔を見上げるのでした。

あんまり熱心に見つめるので、とうとうお隣は根負けして、中古のクレヨンだけ買うことにしました。いつもなら炭や白墨でどうにかごまかしてしまうのですが、こんなにも灰色の日々なのですから、少しぐらい色を付けてやってもいいのじゃないかと思ったのでした。

あかさぎ
赤鷺の道具屋で売りに出されていたのは誰かの使いかけで、空色ばかりが減ってい



ました。空のない地底にはうってつけのクレヨンでした。

「さあさあ、舶来の、外来の、地上から来た珍しいクレヨンさ。蠟入りで、書き心地なめらか。顔料は特注、発色も見事！こいつが流れてくるなんて滅多にないことだよ！」

店主は燃えるようなくちばしを反り返らせて『1ねん 1くみ こちや さなえ』と書かれた紙箱を差し出してきました。油紙に包まれたそれは、きつといなくなつた女の子の遺品だったのでしよう。

「なあに言ってるんだい。そんなポンコツ品、誰も買ったりしないだろ。こんな暗い場所で絵を描くような酔狂、うちのバカラスぐらいしか知らないよ」

お燐はそう言つて腕組みしました。

「せいぜい目玉一個ぐらいの値打ちしかないね、あたいの見たところだと」

「これを値切るなんてとんでもない！」

そこからはひたすら、指さしと威嚇と尻尾で見えないサインが送られ続けました。

おくうと子猫たちはただひたすら口をぽかんと開けて見守るばかりでした。

言い値が目玉五つのところを、三つにまで交渉しました。途中でおくうが早く帰りたいそうにもじもじとお燐の裾を握ったので、ペースが乱れて、半額を少し超すぐらい



までしか値切れませんでした。もう少し時間があつたら胸毛どころかケツの毛までも
しつてやったのに、とお隣は悔しそうに言いました。手元にはおまけで付けさせた
水鳥^{ダウ}胸毛入りのクッションが三つほどありました。

それからおうちにみんなで帰りました。今日のご飯は塩漬け鹿肉のスープと、絵に
描いたケーキでした。上にのせるトッピングは市場で見たあれもこれもと猫たちがせ
がむので、最終的にはうら紙をはみ出してしまいうぐらいになりました。

おいしそうですねと誰かが言いました。

でもやっぱり本物の方が良いねと誰かが言いました。

それで、その日はお終^{しま}いになりました。みんなで甘いソースをかけて砂糖をまぶし
た豚耳と、目玉の金柑^{きんかん}煮と、干し果物の夢を見ました。

日々は簡単に過ぎていくものです。十人の家族が六人になってしまつてからまた少
し経ちました。やはり、ラチンは帰ってきませんでした。

どれだけ待っても遠征隊が戻らなかつた理由については諸説ありますが、肉の分け
前を巡って内紛が起こつたというのが最たるものでした。長い長い旅路の中で、妄想
のままに膨らんでいた大鯰の肉が思っていたよりも小さかつたために十分な分け前が



得られず、旅団の幾人かが反乱を起こしたというものでした。

そのお話の中では、ラチンの鉦は鯨ではなく同胞を切り裂くために使われました。そうしてラチン自身も同胞に奪われた鉦に切り裂かれて命を落としました。魂だけが残りましたが、その魂は絶望に満たされ、またいずこかへ消えていつてしまいました。そのような噂がひとしきり流れ、そして消えていきました。どれが本当のことであるのか、猫たちには分かりませんでした。

ただいたずらに日々は流れていきます。

地底には昼も夜も無くなってしまうました。鯨もおらず、太陽も空も無いのですから時間を計る術は自分^{すべ}のハラワタぐらいしかありませんでした。

猫たちは自分の腹が減っても気のせいだと思いこむことにしました。そうすれば食料が減りすぎるのを気にする必要がありません。

また、そればかりではなく日が過ぎれば過ぎただけ、物事が悪くなっていくなような気がしたのです。昨日という日はけっして最良の日ではありませんでしたが、今日に比べればずっとずっとましなように思われました。そして明日になればもっとずっと悪くなるでしょう。

それでも時は流れていきます。平穏で退屈で息苦しい日々が過ぎていきました。



屍体を漁り、役に立つものだけ引き上げて、あとは地獄の業火の中に放り出す。どうと言うこともない、ごくあたりまえの繰り返す仕事。肉を食らい骨をしゃぶり、滓^{かす}を投げ捨てるだけの日々。

それでも冷えていくものはもう止まりませんでした。少しずつ少しずつ、旧灼熱地獄は体温を失っていくようでした。

その頃から地底では太陽の噂がささやかれ始めました。大鯰は湿っぽいだけでしたが、太陽は暖かいのだと言われました。大鯰の時と同じように太陽を取ってくるための遠征隊が組まれようとなりましたが、今度は誰も集まりませんでした。大鯰は確かにありましたが太陽のことを覚えている者は誰もいなかったのです。信じられなかったのです。

見えないものは信じられないのです。口約束や噂や物語などは、この地底では信用に値せず、ただ食い物にされるばかりなのでした。

嘘は、物語は騙すためだけにあります。

少なくともこの場所ではそうでした。

騙して誰かから何かを奪い取るためだけに、嘘はありました。全ての伝言を疑わなければなりません。目に見えて確かなものだけが価値を持ちうるのです。



ただ綺麗なものなどは、ほとんど役に立ちませんでした。暖かい、柔らかいか、食べられるようなものが一番価値を持ちうるのです。ただ単にきらきらしいだけのものでは、存在価値が薄いのです。

たとえば目玉が目玉ではなくてただのビー玉であつたら、それは貨幣の代わりにはならなかつたでしょう。ビー玉を舐めたところで美味しくはないのです。目玉には滋養があり味わい深く、飲みこんでも身体に必要な栄養がたっぷり含まれているのです。それでもおくうはビー玉が好きでした。

瓶にしまい込んで蓋をぎゅつとして、いつも持ち歩いていました。出しちゃだめだ、子猫が喉に詰まらせるかもしれないから。そう言われていたので取り出すことは出来ませんでした。が、瓶ごと光にかざすと透き通つてとても綺麗でした。

鴉だからなのか、それともおくうだからなのかは分かりませんが、とりわけビー玉を気に入っていました。ほかのきらきらしたものよりも、断然この小さな丸い硝子玉が大好きなようでした。いつでもポケットにいれて、暇さえあれば眺めているのです。

ビー玉は決して腐りませんでした。永遠とも思えるほどに輝き続けていました。そのように変わらないものは地底ではごくまれでした。高い温度や硫黄や塩分のせいではほとんどのものは腐ったり錆びたりして光を失ってくすんでしまうのです。瓶だけ



は煤すすでくすんでしまうから、おくうが時々拭いてあげるのですが。

そのようにして、おくうは綺麗なものを愛していました。それもとりわけ、外から来る永遠に綺麗なもの的大好きなのでした。何も覚えていられないから、せめてずっと綺麗なままでいるものを、愛そうと思ったのかもしれませんが。

かくして永遠かみさまという概念は地の底へ舞い降りたのです。

何人にも知られることなく。

日が進むにつれて、重力が少しずつ変になっているような心地がしました。

ある日、地面が傾いていることに気づきました。どうしてなのかは誰にも分かりません。ぐるぐると地のさらに奥がうなりを上げているようでした。おそらくそれは大地が仲の良かった鯨を悼む声なのでした。

「にゃあう、」

子猫の一匹が小さく震えました。もぞもぞと起き出してきました。遠くで別の何かが唸る声が聞こえました。最初誰かのいびきかと思うぐらいの些細な音でした。けれど全員が起きてしまってもなお、その音は響くのでした。

羽音、なのでした。



嫌な予感がびりびりとお燐の尻尾を駆けていきました。

「みんな、外へ！」

慌てて外へ駆け出しました。まっすぐ歩けないねぼすけとチビはくわえて持つて行きました。

たちまちのうちに、黒雲が穴から噴き出してきました。

地蜂じばちの群れでした。奥の奥へ眠っていたものが目覚めたのです。本当ならこのまま冬眠について、そのまま動かなくなるはずでした。元々は大人しくて臆病な蜂なのですから。そうならなかったのはきっと、最後の最後に何か足掻あがきたかったのでしょう。此処は何もかもがどんどん終わっていくところなのです。そのうちにいままでずっと続いてきた平和すらも、平穩すらも終わってしまうのかもしれないです。そのうちにいままですうなりを上げる蜂の群れが、引き返してきました。何かの肉を食いたいのでしょうか。

それは柔らかな子猫の肉でいっこうに構わないのです。

お燐がぎゅっとこぶしを握りしめたその時でした。

一匹の子猫が先に飛び出しました。

「囀になるよ、わたしが」

優しいスクウが言いました。そうして駆けだしていきました。止める暇も無いよう



でした。

たちまちのうちに、全ての蜂が真つ黒にたかっていきました。触れる者全て突き刺すような殺意がそこには雲になって蠢うごめいていたのでした。

立ち止まったスクウが、ゆっくりと身体を地に落としました。悪霊のような蜂の群れに取り憑かれてから、数秒とたたないうちのことでした。

それは恐らくは罰でした。

虎の尾を踏んで謝って済むなら地獄は不要です。間違いをした者には罰が与えられなければなりません。元々は罪を犯した者が放り込まれる場所を地獄と呼んだのです。地獄が地獄でなくなった今でも、やはり罪を犯した者はそれなりの報いを受けるようでした。

それはどのような罪であるのか、もはや子猫たちには判然としませんでした。死体を漁って、いろいろな有用なものを盗んだことによる罪なのか、鹿をろくに悼みもせず「いただきます」してしまったせいなのか、それとも誰の棲処とも分らない場所を転々としていた放浪の罪なのか、誰にも分かりませんでした。そもそも無法地帯に罪も罰もそぐわないものです。地獄が遷都されてからずいぶん長いことこのあたりは国も政府も法律もろくにない界限になっていました。



だから、罪と言え、生きていること自体が罪だったのに相違ありません。その罰を子猫は身代わりに受けたのでした。

そのようにして可哀想な子猫が稼いでくれた時間を無駄にするわけにはいきません。そうして猫たちは一匹の同胞を見捨てることにしました。

蜂たちもどうせ、喰う肉がなくなれば諦めると思ったのです。けれど、スクウを抱えたままで、蜂たちはじりじりと地面の上を這っていききました。おっとりした三毛猫の中へ硬い顎を挟ませたままで、少しずつ少しずつ、同胞を押し潰しそうになりながら屍体を動かしていくのでした。

蜂たちがどこへ向かっているのか、猫たちには分かりませんでした。追いかけるつもりはありませんでした。

肉が尽きてしまうより前に、逃げ出さなければいけません。

そのようにして、一匹の可哀想な子猫へ背を向けました。

もう二度と、振り向くことはありませんでした。



死因一〇から一二 大法院に行き、騙され、大熊に抱かれ、そして二人きりになった。

日々は簡単に過ぎていくものです。十人だった家族が半分になってしまってからまた少し経ちました。

次の穴を見つけるのは存外簡単でした。選ぶ側がもう細かな条件には構わなくなっていたからです。

どうせ何もかも終わってしまうのだから。

どうせ何もかも滅びてしまうのだから。

いつかは引越さなければいけないのだから。

ただ一緒にいるだけの時間を、大切にしようと思って。

羽根の中にうずくまり、丸まって日々を過ごすだけが、必要なことでした。互いの体温で外界を遮って闇色の羽毛の中に埋もれていました。

それでもどうにか仕事はしていました。

屍体を集め、役に立つ物を探し、地獄の業火へ投げ込み。平穏で退屈な日々が続いていきます。



けれどどれだけ働いても、この状況が良くなるようにはちっとも思えませんでした。何もかもが徒労で、何もかもが無為で、何もかもが無駄に終わってしまうような、そんな気持ちになってしまつて、憂鬱ウレックのため息が地底全体を覆ってしまうのでした。ここには青空もないのに。太陽代わりの大鯰ももう居ないのに。

もちろん、それが本当の地獄というもののなかもしれません。嫌われ者だらけのこの地獄の中で、明るくやっていくこと自体がナンセンスでありえないことなのかもしれませんでした。

でも、それだからこそお隣もおくうも明るく笑いしました。楽しく楽しく笑っているふりをし続けました。

さとの前に呼ばれた時には特に楽しくやっているふりをしました。飼い主を心配させるわけにはいかなのです。全部読まれているのだとしても、無駄なことなのだとしたて、どうにかさとりを笑わせようとして道化てふざけて笑っているうちに、二匹ともが幸せですっきりした気持ちになって地底へ帰って行くのでした。

何もかもが、ゆっくりと滅びていくのでした。さとりはそれを妨げるつもりはないようでした。そうなるのが定めだったからです。生き物は皆いずれ死ぬのが定めであるかのように、地獄でなくなった地底に最早昔のような灼熱は不要、というのがかつ



て下された見解であつたからです。ただ滅びの美を見届けるためだけに、地霊殿は灼熱地獄跡に置かれたのでした。

それでも抗^{あらが}いたいという気持ちはありました。誰もがさとりのように心安らかに滅びを受け入れられるわけではないのです。

ある日、いたずらっこだったセメイが言い始めました。

「もっと世界のことを知りたいんだ」

賢い子でした。今ではもう一番の働き手になっていました。どこへ行けばいいのか、分かつているようでした。

「わたしは、本当の地獄へ行ってくるよ。そうしたらいろいろ分かるかもしれない」
いつになるとも知れない、長い長い旅になりそうでした。新しい方の地獄がどこにあるのか探すところから始めなければなりませんでした。どうやら上の方に移ったらしいという噂だけは流れていました。地霊殿よりもずっと上の方らしいということを知りて、誰しも気が遠くなるような思ひでした。

お隣はあるだけの毛布を持たせました。おくうはとっておきの人妖の目玉をあげました。疲れたときに舐めると元気がでるよと言いました。



「ありがとうありがとうみんな。さよならさよならみんな」

残った者たちみんなで見送りました。

そのようにして、皆、また此処を去っていくのでした。既に誰からも要らないと言われた場所を、また一匹の子猫が見捨てたのでした。

ある日、チャガンが言い始めました。いつも眠そうに細めている目をほんの僅かばかり見開いて言いました。

「ここには宗教が必要なんだ」

何を馬鹿なことを言っているのだと、お隣は叱りつけようと思いました。それをおくうが止めました。言いたいことを止める権利なんて誰にもないのだとおくうは思ったのです。こんな時だから、言いたいことを言わせてあげたいと思ったのでした。いずれ死ねば口が朽ち、鼻が外れ、耳もみじみじと落ちていくのですから、動いているうちに働かせてあげるのがせてもの幸いであるのでしょうか。

「信じるものは救われるんだってさ」

どこから聞いてきたのかは分かりません。けれど確かにそれは最近流行ってきている噂でした。地下空洞の中を電波のように行き来する遠吠えやうなりや匂いの情報の



中に、そんなようなことが含まれているのでした。

「本当か嘘か、知らないけど」

それでもいいのだと子猫は言いました。本当なのか嘘なのかさえもどうでもいいのだと言いました。

「騙されるんでもいいから、神様って奴を信じたいんだ」

一度も誰も見たことのない、かみさまという存在は果たして信じるに耐えうるのかどうか、お隣にもおくうにも分かりませんでした。

「お隣やおくうのこと、ぼくは信じられないからさ」

子猫はそんな残酷なことを言って、のろのろと起き上がりました。ゆっくりと少しずつ幽体離脱してふわふわとただの怨霊になりました。けして振り返りませんでした。もう表情も分からないほどに霞んでしまっていました。存在をおぼろ臆おそにすることであろうやとかみさまと触れ合えるのかもしれない。

お隣とおくうはふわふわと飛んでいく怨霊をただ見守りました。

「だって、ぼくたちのこと、忘れちゃうでしょ？」

子猫の言い分に、お隣は何も言いませんでした。その通りだと思ったからです。けれどおくうは言い返しました。



「忘れないよ、忘れないよ」

カラスらしく、口から出任せを言いました。もちろん出任せのつもりなんて無いのです。そのときはきつと覚えていようと思ったのです。けれど、そうはならない。どうしてもそういう風には出来ないのです。

だって、鳥は忘れてしまう生き物なのですから。

忘れてしまつて軽くなければ飛ぶことも出来ない。

「けれど、さよなら子猫」

お前がそうするのなら、止めない。

このようにして、子猫がまた幸せになろうとして此処を出ていくのです。残されたのは一匹の赤ちゃん猫と一匹の黒猫と、猫になりそこねた一匹の鴉でした。

三匹は仲良く暮らしていました。赤ちゃん猫のクルチャを大切に育てて、目に入れても痛くないぐらいに愛してあげました。ここにはもう、愛情ほど溢れているものはありませんでした。他のものは大体尽きてしまったからです。

盗^とれる屍体の量はある程度減つてしまつてからはもうほとんど変わらないし、獣たちが食べてしまう分はむしろ減つてしまつてはいるはずなのに、燃えさかる温度は少し



ずつ冷めていつてしまっているようでした。地獄の釜が昔ほど丈夫では無くなったせいかもしれません。老朽化が進んで蓋が隙間だらけになったせいなのかもしれません。原因は誰にも分かりませんし、直すことも出来ません。遠い昔に地獄のためだけに作られた釜でした。地獄が此処になくなって壊れてしまえばそれで役目を果たすだけでした。地獄の釜の蓋が開いて、馬鹿になってきちんと締まらないのでした。

おくうはどの炉も出来るだけぴっちり蓋をするようにしていました。それでもなかなか逃げていく熱は留まらないようでした。羽根を一枚ずつぶちぶち千切って隙間に詰めるようにしましたが、やはりそれだけでは難しいようでした。

新しい熱源が必要でした。それは太陽でも神様でも構いませんでした。何だって良から熱くて熱くて火傷してしまうようなものが必要なのです。

食卓の肉はいつでも冷たいままでした。暖かいのはおくうの手だけでした。けれどそれを冷やしてしまうのも申し訳ないぐらいに、この場所は少しずつ冷えていったのです。

ある晩、おくうはみんなで一緒に寝ようと言いました。お燐はそれを断りました。へくしょんとおくうがくしゃみをしていたのに気がついていたのです。

一緒に寝れば、暖まるのか。



そうではない。ただ、奪うだけ。

温もりを奪うこの冷たい屍肉。硬くこわばった良いところのない身体。生きてはいない。もうとづくに終わってしまうべき物を無理に伸ばしているだけ。

余計な考えを全部振り払って、お憐は自分のやるべきことをやることにしました。おくうに抱きついて押し倒して、布団とクッションとで埋め尽くしてやります。

「ほらほら、お布団かけて暖かくしてな。風邪引いてるんだから」

「やだよう、あついよう」

「バカラス。大人しくしてないと承知しないよ」

けほけほと咳き込むのを無理矢理押し込んでやりました。確かに、いつもより元気が無いみたいでした。ぐったりと力が抜けてしまっています。今日はひとときわ寒いせいかもしれません。沸騰した泥^{ぬかるみ}濘の中に生まれ、炎すらも飲み下す地獄鴉だからこそ、寒いのは苦手なものでした。

お憐は何かを騙しているような気持ちになりながら、おくうの上の布団の上に覆い被さって、抱きしめておりました。少しだけだからと押さえつけておきました。布団越しに触れるのなら冷やしてしまうこともないだろうと思いました。時々額の汗を拭いてやるうちにおくうもすうすうと寝息を立て始めました。



おくうを寝かしつけて、お燐もうとうとしかけた頃に、不意に呼ばれる声がありました。

おくうは大変よく眠っていて気がつきませんでした。起こさないように、そうっとお燐が向かいました。

かつて生きていた種族の最後のものたちがそこには並んでいました。

彼らは迎えに来たのでした。種族の最後の一匹たちが連れだつて遠くへ行くための、旅行団なのでした。誰もが孤独なノアの方舟なのでした。

「お前たちも行かないか」

ひひぐま 火焰熊の最後の一匹が悲しそうにうなずきました。

「火が落ちていくのよ。少しずつ落ちていくの」

はあり 羽蟻の女王が言いました。

「お前たちのせいではないんだと分かっている」

フアイアフォックス 火 狐が言いました。

「番をしてくれていて、感謝している。さとり様のことも」

おがみむし 拝火蟬螂は頭を下げました。

しかしそれでも、どうしても。



「どうしてなのだろうと嘆かずにはいられない」
どうしてなのでしょうね。

全てのものが少しずつ減んでいくのは。

全てのものが少しずつ居なくなっていくのは。

「それを探しに行くんだ」

「誰かに説明して欲しいんだ」

「どうしてこの場所は死んでいくんだ」

「どうして誰もが死ななくちゃいけないんだ」

その問いには誰も答えられないのだとしても。

答えを探すための、レミングの行進。

お隣は動物たちを目の前にして、迷っていました。手の中の布きれ。弱っていくお
くうの身体。寒いのがいけないんだと分かっているのです。もっと暖かな何かを手
に入れば、幸せになれるのでしょうか。

それでも、本当に探しに行った方がいいのかもよく分からずにいるのです。何かを
したいのは分かるのです。けれど闇雲に動いたところで何かが得られるとも思えな
かったのです。この場所が救われることを主であるさとりは望まなかったのですから。



「あたいは……」

その言葉は、遮られました。

迷いは、断ち切られました。

「ぼく、行くよ」

一番末っ子のクルチャがよちよち歩きで現れたのでした。

「行くから連れて行って」

まだ目も開かないような子猫でした。それでも何かをしたいと思わずにはいられませんでした。こんな時代ですから仕方のないことだったでしょう。

クルチャは微笑^{わら}って言いました。

「ぼく、熊よりもおつきくなって、世界を救うんだ」

それは大それた夢だと誰もが思いました。

それでも願わずにはいられませんでした。

滅びずに、永遠に、幸せであり続けたい。

誰か、誰でもいいから、この場所を救って欲しいと。

「お隣はおくうちやんのことを見ててあげて。ずっと大事にしてあげてよね」

ほんの赤ちゃん猫にそう言われて、お隣は言葉に詰まりました。そう言う子猫の方



こそおくうに拾われてきたものではありませんか。それでもお燐は何も言い返すことが出来ませんでした。

小さな小さな赤ちゃん猫は熊に抱かれて言いました。

「おくうちゃんのこと、お燐が拾ってきたんだって、ぼく聞いたから。だから、最後まで大事にしてあげてね」

最後の、最期まで。

病めるときも、健やかなる時も。

死が二匹を別つときまで。



死因一三 日干し、そして腹上死

このようにして、あれだけたくさんいた集落もとうとうおくうとお隣の二匹になってしまいました。

それでも別段悲しい気持ちにはなりませんでした。そういうものなのだとぼんやり思うだけでした。二匹とも悲しい気持ちはどこかに置いて捨ててきてしまったのです。

おくうは、自然と忘れてしまいました。

お隣は、わざと忘れることにしました。

二匹はもう少し溶岩に近い所に引越しました。暖かいところに来ればおくうの風邪も大分良くなるようでした。そうすることが気休めではないということも知っていました。ここの溶岩もいずれは冷めていくでしょう。けれど、お隣は忘れることにしました。

だって、考えても仕方のないことなのですから。



ねえねえ、お隣。知ってる？ 知ってる？

何さ。あたいは知ってることしか知らないよう。

あのねあのね、ちよつと聞いてきたんだけどね。

二匹が寝ころびながらこうやって会話を交わすのは、いつものことでした。たくさんクツシヨンの中に埋もれながら、おしゃべりをしているうちにいつの間にか眠っているのです。

今はもうほとんどハンモックは使いませんでした。何しろ二匹しかいない家族ですから、寝ころんで、寝相が悪くて子猫をうっかりつぶしてしまうこともないのです。ともあれ、おくうはこう尋ねたのでした。

お日様ってどんなもの？

あったかいのさ。

お隣よりも？

そりゃあそうだ。あんたよりもあったかいよ。

そう言ってお隣はぬくぬくのおくうの羽の中に体を埋めるのでした。猫背で丸っこい小さな体軀は大きな羽の中にすっぽりと居心地良くおさまるのでした。それはまるで、そうするために生まれてきたみたいに、へこんでいるところと出っ張っていると



ころとがかみあって、ぴったりと合わさるのです。

おくうは、お隣の耳の後ろをかいてやりながら尋ねました。

お隣、あったかいのすき？

ああ、大好きだよ。ぬくぬくが一番良いね。

もつと暖かいのがすき？

そうだねえ。暖かいのが良いねえ。

お隣はうとうとしていました。今にも眠りの淵へころげ落ちそうだったので、ろくに考えずにこう答えてしまいました。

けれど一体誰がそれを責められるでしょう。誰だつてうとうとしながらぼんやりと考えるせずに望んでいるままのことを口走ってしまうのはよくあることなのですから。許してあげなくてはいけません。

どれだけ愚かしいとも、許してあげなければなりません。

その日はそのようにして眠りました。

それでもまた次の日には、おくうの「知ってる？ 知ってる？」が始まるのでした。

ねえねえ、お隣お隣、知ってる？ 知ってる？

なんだい、おくう。何かいいことでも思いついたのかい？



生きていて一番きもちいいことって何かなあ。

んー、なんだろね。

せつくすだっていうの、ホントかなあ。

思わずお隣は飛び跳ねて起きてしまいました。眠気が一気に吹き飛んだように思いました。

「あ、起きた」

「そりゃ眠ってる子猫も起きるわ！ 何だそれ、どこで覚えてきた！」

思わず口調が変わるほどの驚愕ぶりでした。

「えへへ秘密」

「なんだよう、それ」

「だって、わたしだっていつまでも雛じゃないもの」

おくうはあどけなく笑いました。その笑みはあんまり言葉とちぐはぐで幼いので、お隣は問いつめるのを止めました。

頭の中では、さっきのどぎつい言葉がぐるぐる回っていました。そんな言葉がおくうの口から出たことが大変にショックで、お隣の頭の中は混乱して新しい言葉が出てこなくなるぐらいでした。一つ二つ息をつきました。吐息の形をして混乱が外に出て



行ってくればいいと思いながら。

ようやくお隣の呼吸が収まってきそうな瞬間に、また次の質問が飛んできました。

「お隣、せつくすしたことがある？」

またも答えずらい質問がおくうの口から飛び出しました。

お隣は眉間にしわを寄せながら考えました。どうして自分がこんな羞恥プレイを受けないければならないのか、ということについて大変深く考えざるを得ないのでした。

「えーと、どうしても答えないといけないのかな、これ」

「ねー、おしえてよう、気持ちいいってホントなのかなあ？」

おくうは腕組みをして一生懸命考えているようでした。たぶん、頭の中に何も入っていないでしょうけども。

お隣はようよう息をついて、絶え絶えになりながらも、ゆっくり答えました。

「……知らない、けど」

それを聞いたおくうは、なんだかほつとしたような表情を浮かべました。

「そっかあ。そうなのかー」

心なしか尾羽が揺れているようでした。なんだか嬉しそうにも見えました。そして、何か思いついたように満面の笑みを浮かべながら言いました。



「じゃあ、しょっか」

いや、ちよっと待て。どうしてそうなった。

まったく、今日のおくうはどうしたというのでしょうか。思わず目をむくような発言が次から次へと飛び出してきました。お隣の頭痛の種はますます増える一方のようでした。

「だってさ、おぼえといて欲しいんだ。気持ちいいこと」

と、おくうが言いました。

「だって、わたしは忘れちゃうでしょ?」

お隣はおくうを見上げました。その顔は、いつもと同じように笑っていました。ちつとも悲しそうには見えませんでした。言葉の真剣さとは違って、いつもの頭空っぽの幸せな夢見るような笑みを浮かべているのでした。

「お隣なら頭いいから。わたしの代わりにおぼえといてくれるかなって」

気持ちいいことも、楽しいことも、おいしかったものも、幸せなことも。全部のいいことを、全てのすばらしいものを。

お隣にあげたら、覚えておいてくれるから。

それが二匹分の幸せだから。



一匹で、二匹分の幸せだから。

「えへへ、きもちくしたげるね」

邪気のない笑みを浮かべながらおくうがにじりよってきます。お燐は後ずさりながら心臓がばくばく言っているのを収めるのに必死でした。

ちよちよちよつとまで、待って落ち着いて深呼吸して息を吸って吐いて、ひっひっふー、違う何だこれこの状況でまったくシヤレにならないんですけど。ていうか何だこれ、何なのこの状況。毘か、毘なのかそうなのか。誰だこんな毘仕掛けたの！

「ぎにゃー！ おそわれるー、地獄鴉に襲われるー！」

じったんばったん暴れます。涙目になりつつクッションを投げつけまくるお燐なのでした。

「あ、う……、い、いやだった？ ごめんね」

しょぼんと羽をしぼませて、おくうはうなだれました。

「ごめんなさい」

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

何度も何度も謝りながら翼で自分の顔を覆い隠して、出来るだけ小さく丸まります。それでも大きな背丈はなかなか収まらないのでした。



その様子はあんまりかわいそうで、襲われかけていたことも忘れそうになるぐらいでした。お隣はそっとその羽をなめてやって、毛繕いをしてやるのでした。それからぐりぐりと頭を前足でこねくり回してやると、ようやくおくうは顔を上げました。まだちよっと涙目な様子でした。

「あう」

「バカラス。どうしたのさ。急に。変だよ」

「変かなあ？」

「いいけどさ。いつも変だし」

「ひっ、ひどいよう、お隣ちゃん！」

「うっさい黙れ」

またぐりぐりと頭を撫でて、髪の毛がぐっしゃぐしゃになるまでかき混ぜました。ただもうひたすら照れてしまっていたから、ろくなことが言えませんでした。

「だいたい、どうしてあたいがされる側なのさ」

「だ、だって、」

わたしは、捨てられるような卵を産みたくはないから。

ほつりと言葉が落ちました。それはお隣の胸の中にいつまでもいつまでもちくちく



とした痛みを残し続けました。

「お隣のこと、お姫様にしたいな」

寝ぼけたような声で、おくうはつぶやきました。夢うつつだったので、ほとんど聞こえないようなかすかな気配の中でその言葉はたゆたっていました。

「そんな夢を見たって、いいでしょ？」

誰に聞くともしに、おくうはそう言って、静かに目をつむりました。

二匹は、子供のように眠りました。

夢は、見なかったように思えます。



死因四

autocannibalization 相互捕食

このお話の終わり方は決まり切っています。

既に語られているいくつかの物語の通りです。

ある日、元凶たる蛇と蛙が旧地獄へやってきたのでした。

誰も気づかないほどひっそりと訪れたのだそうです。

二匹は本当の神様だったので、それは簡単なことでした。

蛇と蛙とは、一つの実験を行うことに決めていました。

実験に使う三本脚の烏を連れてきていました。

それが、この地を救う唯一の方法だと思っていました。

たまには神様らしく衆愚の為に働こうと思ったのです。

二匹は烏を食うのはきつと、猫だろうと思っておりました。

最近ここらに來たばかりの神様たちの脳裏には、いつか電映で見た白黒の猫と黄色

い小鳥が浮かんでいました。

どんなに頑張っても掴まえない間抜けな子猫を連想して、蛇と蛙は小さく笑い



ました。でもどんな間抜けでも目の前に据えてあげれば、きっと大丈夫だろうと、自分たちの親切心にほとんど有頂天になっていました。

神様たちは何匹もの子猫に烏を与えました。

一匹目は溶岩にたまたま落ちた子を。

二匹目はお菓子で釣った子を。

三匹目はおうちにおいて行かれた子を。

四匹目は同士討ちで野ざらしになった子を。

五匹目は蜂に食われて数十万粒の肉団子になった子を。

六匹目は本当の地獄へたどり着く前に野たれ死んだ子を。

七匹目は神様を捜して巡り会って笑って死んだ子を。

八匹目は希望に溢れた地底湖へと連れて行かれた子を。

けれど、どんな猫も烏を食いきることは出来ませんでした。

三本脚の烏は、とてもとても黒かったからです。

黒く、重く、全てのものを吸い付け、融合するほどに。



喰われながらにして、喰ってしまおう。

どのような物をも引きつけて、事象の地平線の内側に閉じ込め、世界から断絶させてしまおう。

そのようにして子猫たちは地獄から消えてしまいました。

九匹目を試そうかどうかと思うたところで、神様たちは良い考えを思いつきました。

九匹目の子猫は、一匹の地獄鴉と仲良しでした。あまりに仲良しで、自分をまるで猫と同じように思っているらしく、その鴉は卵でも鶏肉でも食べてしまうのでした。

そこで、蛇と蛙は計画を変更することにしました。

どのような生き物が、ふさわしいかについて検討を重ねた結果、一つの非常にシンブルな仮説を思いついたのです。

飲み込むのなら、

同化するのなら、

元々同じ者に。

そして改めて、^{order}勅命は出されました。



同朋^{とも}食^もいを、厭^{いと}うな。



死因一四から二〇 傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲

ある時からおうは暇なときにはひとりで遊ぶことにしていました。頭を空っぽにするには遊ぶのが一番だからです。何かに夢中になっていさえすれば、他のことは考えなくて済むからです。

他のこと。悲しいこと、悔しいこと。減んでいくこと。

そういうことを考えずにいるには、多分、ひとりきりでいた方が都合がいいと思いました。お隣と一緒にいたらきつと、考えなくてはいけなくなります。

どうやれば幸せになれるのか。

どうすれば二匹でずっと一緒なのか。

そういうことは難しすぎておうの頭は混乱してしまいます。混乱するとちよっぴり涙目になってしまうので、泣かないように出来るだけ考えないようにするのです。だっておくうが泣くとお隣が心配するのですもの。

今日はビニール袋を蹴って遊んでいました。地面に着かないようにずっとひとりで蹴り続けるのです。最近は地面の温度も下がってきたので、よそから流れてきた石油



製品も燃えずに地獄に在り続けることが出来るようになりました。ふわふわと白いビニール袋が空中を漂って、ぽすっと蹴りつけるとまた上にあがって行って、ゆらゆらとクラゲのように落ちていきます。意外と良い運動になるので好きでした。特に何も生み出さないし、何も消費しないところも好きでした。

不意に、声がしました。

「ねえ、この辺の地獄鴉で一番強い者を捜してるの」

鯨のいない乾いた空気の中を、しんと透き通るような声が渡ってきました。

顔を上げると見たこともない赤色の蛇がいました。口の中に緑色の蛙が入っていました。

蛙はぴょこんと飛び出して、それはゆっくりとヒトガタに変わりました。おくうよりも小さな子でした。えらそうに腰に手を当てて品定めをしているようでした。

蛇もヒトガタに変わりました。おくうよりも大きな子のようでした。うっとり目を細めて冷たく笑んでいました。

おくうは首をかしげました。

「それなら、わたしだよ」

何しろ地獄鴉でこのあたりに住み続けているのは自分だけなのですから、当たり前



のことでした。他はみんなみんなどこかへ行ってしまった。このあたりはもう寒すぎて地獄鴉が住めなくなってしまうのです。おくうだってお憐がいなければ多分よそのところへ渡り鳥みたいに棲処を探しに行っていたでしょう。

神様は笑いました。

「ならば、あなたに力を与えましょう」

どちらの神様もにこにこ笑んでいました。

「火焰地獄跡には究極にして人類が手のする事が出来る最後のエネルギーを生む秘密が隠されています」

「そして、火焰の中に棲む鴉であるあなた。あなたはその究極の力を体に宿らせる事が出来る筈です」

「それにより地底のみならず、地上にも希望をもたらしましょう」

神様たちは口々に話しましたが、おくうの小さな頭では何を言われているのか分かりませんでした。

「わたしは、強いものがいっとう好きだよ」

それだけ、おくうは言いました。

語ることが罪を犯すことだとは知らなかったのです。



それはそれは、愚かな鴉にふさわしい結末でした。

二人組の神様は静かに笑いました。

「大丈夫、あなたはなにも考えなくて良い」

Yield calculate system for Atomic Tactics Agent

「核戦術代行出力判断システム——我々が通称『YATA』と呼んでいるプラグインですが、彼が全てやるべきことを行ってくれます」

「その小さな頭を悩ませることはない。優秀で安価な中国製の自動運転プログラムに判断を任せておくだけであなたたちは皆豊かで幸せになれるのです」

「幸せになりなさいね、頑張って」

そして神様は消えていきました。静かに静かに笑っていました。にこやかな微笑だけを残して、チェシヤ猫のように消えていきました。

そうして、神様の居なくなつた地底へゆっくりと紅い光り輝くものが降りてきました。それは宝石でもビー玉でもなくて、紅い一つの目玉でした。

ふうわりと浮かんだままの赤い目は、声ではない声で語りかけました。

because there is no time

most popular

language are given to priority

The language setting is English and Chinese

「因為沒有時間、利用者多的語言被優先。語言設定作為英語和中文」

おくうには分からない言葉でした。ただ頭の中に声と意志が流れ込んでくるばかりでした。その言葉の意味はかけらも分かりませんでした。ただ赤い目が返答を急ぐよ



うにまたたいているのが分かりました。

小さく首をかしげて、おくうは紅い目を見つめました。

The option is Hindi and Spanish
「選擇是印地安和西班牙、是不是希望變更？」

困ったように、紅い目は言葉を継ぎました。やはり意味がよく分かりませんでした。が、おくうはにこにここと笑んで、話されるに任せました。なんだか困っているようだったから、安心させてあげようと思ったのです。

笑んでいるのを見て安心したのか、紅い目はそのまま言葉を継ぎました。

I have the power to destroy the world by installing the plug-in you can obtain the Power
「我有力量。毀滅世界的力量。由於安裝插件的事能得到力量」

その声は自信に溢れているのがよく分かりました。おくうはこっくりとうなずきました。

who is in the hell the strongest
「誰在地獄最是強？」

何かを聞かれているような気がして、頷いてやりました。

you Do you want to install it
「你？ 是不是安裝？」

何かを聞かれている気がしてただ頷くばかりでした。

何をすればいいのか、よく分かりませんでした。

それでも自分にはきつと何かが出来るのだらうと思いました。それがお燐に教えて



もらった喜びなのでした。誰かの為に、何かが出来るということとはとても幸福なことだと思いました。

紅い目玉は光を消して、地面に横たわりました。

「please eat me
請吃」

おくうはこわごわしゃがみ込みました。スカートのはじから丸っこいひざ小僧が出ていました。

落ちている目玉はととても美味しそうに見えました。つやつやとした表面がまるでジャムみたいで、いつか砕けてしまったお菓子によく似ていました。けれどおくうはその時のことを忘れてしまいました。その時にお隣に叱られた嫌な思い出も含めて全部忘れてしまっていました。

ただ、思念だけが流れ込んできました。

「eat me, mangez-moi, أكل لي, essen Sie mich, mi mangi, cóname, me coma, memakan ku, 吃我, 食べろ」

——食べろ。

そう強く言われて、おくうは落ちているお菓子を食べました。手を添えて、生唾がわき起こるままに一気に飲み込んでしまいました。紅い果物のように甘い香りが二息



に口の中で溶けていきました。

中古の戦車を拾い食い。

落ちた物を食べてはダメと、お隣があれほど言ったのに。

そして、罪悪の樹は生まれたのです。

そのそれが植え付けられたのであるのか、あるいは力の故に導かれたものであるのかは分かりません。

芽は確かに在ったのでしよう。ごく僅かな悪意の芽は誰にでもあるはずです。それらは本当に些細で、ただ、他の者と同じか、それよりもちよつとだけ幸せになりたい、それぐらいのことです。ささやかな、欲望とも呼べないような、祈りと言えないぐらいのほんの小さな願いなのです。

けれどその種は確実に七つの大罪へ向かうのでした。

だからやはりその罪は創られたと言って差し支えない。

生まれたその時から、その罪は植え付けられていました。そして力は小さな種を目覚めさせて、巨大な樹へと変えていくのでした。力は滾々こんこんと注がれる水そのものでした。

おくうの手の中に生じた真つ黒いブラックホールが地底に存在するありとあらゆる



る全てを吸い込んでいきました。

生えかけの羽根が着実に伸びていきました。地獄の隙間を埋めるのにぶちぶち抜いていた羽根が、元通りに生え替わっていくのでした。

声が、意志が、生まれました。

意志は、地獄の中に生きた者達のありとあらゆる欲望なのでした。全て代行してやるに過ぎません。ただ代行者はおくうの口を、言語野を、意識を、脳を、全て借りて、空気に波動を響かせました。

「わたしは、この地底でいっとう強くなる」

黒く黒く、全身を埋め尽くすようにして翼が大きく映え。

「綺麗な地上のものたちが恨めしい」

右手と両足がごとりと音を立てて削ぎ落とされ。

「この地底の者達の恨みをぶつけてやりたい」

右足は重く重くなり融解した金属の灰色が鈍く照り。

「和解することは出来ない。話し合うこともしたくない」

左足は軽く軽くなり光子が鋭く飛び疾く輝き。

「地上の全てを焼き尽くし、暖かいもの全て手に入りたい」



右手は硬く硬くなり何も握めぬ棒切れとなり下がりを。

「飲み干してやる。喰らい尽くしてやる」

胸元へ一筋の亀裂。其は大きく割れ砕け。

「そして、お隣と永遠に幸せな日々を送るんだ」

再び紅い目玉が姿を現し、そして、成り変わる。

——安 the installation is complete 装結束了。

黒い郭公かつこうは一瞬のうちに全ての雛を蹴落としたのでした。

力は現実のものと成り下がりました。

幻想の力は、幻想のままであれば良かったのに。

そして、全ては、

既に書かれている結末の通りに。



死因二一から九七 融合することによる個の喪失

肉の塊を見た場合にそれを食料と見るか、それともゴミやかかつて生きていたおぞましいものと見るかによって、気分は大きく異なるものです。

食料であれば、どのように調理すべきか、胸は高まるでしょう。そうでなければただ不快なばかりです。

そして目の前のこの大きな肉の塊を見て、食料だと思えるのは余程の大食らいでしかあり得ないことでした。

お隣はすぐにそれを見つけました。引き寄せられるようにして、それは存在を確かなものとしていました。居なくなっておくうを探しにきただけなのに、こんなおぞましい物を見てしまうなんて、想像もしていませんでした。出来ることなら一刻も早く目をそらしてしまいたいと思うばかりでした。

けれど見つけてしばらくの間、お隣はただ目の前の光景を見続けていました。何の感情もわくはずがありませんでしたが、ひたすらに視線が吸い寄せられるのです。まるで光すら吸い込んでしまうかのように、ただただ目を見開いて光景を眺めています。



た。

全ての熱源がその場所には集っていました。古い地獄が復活したように、その場所は熱く熱く溶岩を滾^{たぎ}らせて止まないのでした。

それらはただ、在るというだけで罪悪になり得る構造をしていたのでした。そのような歪な物を作り上げたということ自体が、この世の在り方に大きく反するのだと誰の目にも信じられたのです。

まず見えたのは一つの樹があるいは山のようなようでした。しかしよく見ればそれらは全て生き物のパーツが繋がって一体となったもので出来ていました。

たとえば毛むくじゃらの猿の腕が、大きく顎も外れんばかりの魚の口から生えていました。魚の目玉からはとめどなく涙が流れています。その手がすぐ横から伸びてきた男性器をせわしなく擦っていました。ヒトガタのものとは思えないぐらいの巨大に勃起した陰茎の生えている元は大きな樹木の股のようでした。二つの不揃いに腫れ上がった睾丸が重力に負けて垂れ下がっていました。

がさがさした木の皮をさらに上へ辿っていくとその暗褐色は緩やかに暗い緑色をしたワニの鱗へ変わっていきます。その棘だらけの皮膚の合間に孵化したばかりの白い蛆^{うじ}が身体を潜めて吸血していました。それらは細い線虫で繋がりが合い、びかびかと蜚



光色に光っていました。

そして上方へ行くごとにその白い蛆が増えていき、鱗を埋め尽くして見えないようになっています。そしてぶよぶよとした蠅の幼虫は柔らかな白鳥の羽へ移り変わります。ほっそりと翼のように枝が伸び、木のうろをさわさわとなぞっていました。そのうろは蜜に溢れた女性器の形をしていました。その割れ目に突き刺さるような形で今度は蔦が、蛇のようにうねった蔓がじゅぶじゅぶと湿った音を立てて黒い鮑あわびのような肉の奥をかき混ぜていました。

時折、男性器の枝が絶頂に達すると白い精液が噴き出して地面を汚します。そして頃合いを見計らって蛇が頭を引つ込めると間欠泉のように割れ目から潮が吹き出るのでした。それらは規則的のように見えました。樹の生きている脈動のようにして、体液は噴き出しているのです。

より高いところへ目を向ければ、しゃらしゃらと音を立てて葉が揺れていました。それらは一枚一枚が蛾の羽根で出来ていました。目玉の描かれた茶褐色や、生白く透き通った緑や、細かく粉の吹いたような灰色や、真夜中のような深い藍色が、一つ一つ枝の間でうごめいていました。時折風が吹いて枝がよろけると、ひらひらと片羽根だけになった蛾の屍体が吹かれて飛んでいくのです。



その下で一つ一つ樹に成った実として猫たちの首がぶら下がっていました。濁った目の周りを目やにで汚して、小さく瞬きをして、なうなうと泣きました。名もない寄生虫がその^{まぶた}瞼に卵を産んで、小さな膨らみをいくつも作っていました。

猫の尻尾はふうわりとした呼吸根として地面に張り巡らされていました。落ち葉が降り積もるようにして、白や黒や茶や三毛の太いのから細いのまで、猫たちの尻尾が敷き詰められていました。それらは全て根元からばちんとはさみで切り取られたようになって、生々しい肉色が断面から見て取れました。細やかな毛の一本一本がみじみじと地獄の気を吸い取っては養分として樹の隅々まで行き渡らせるのでした。

そして尋常ではないその光景にさらなる異様さを与えるのがあたりを包み込むような臭いでした。精液や愛液あるいは動物たちの生臭さに混じって、胸の奥が詰まるような甘い臭気が立ちこめていました。

樹の後ろ側へと回ってみると、そこは溶岩に^{あぶ}炙られて丁度良い火加減でグリルされているようでした。

半ば皮の剥げた牛の腰肉にはねつとりと絡み付く茶色のグレービーソースが掛かっているのです。あるいはまだ頭の落とされていない鳥の胸肉のある場所はこんがりときつね色に焦げてトマトのソースがかけられているのです。そしてきちんと洗わ



れていないたつぷりと脂ののった丸いホースのような小腸には、蜂蜜色のバターソースがかけられているばかりでなく、それがじぶじぶと自分の油脂分を溶かしてぼたたと垂らし、溶岩の上で小さな青い炎を灯らせているのでした。

そこにあるのは、屍体でありながら食料でもあるのでした。丁寧加工され、加熱され、味付けされた料理でもあったのです。ほこほこ湯気が立つような、作りたての状態でお客にサーブされるものでした。

それはおもてなしの心なのでした。

それはおもいやりの心なのでした。

パンとワインでは贖罪に足りないと感じたのかもしれませんが。本当の血と肉とが流されて初めて罪をあがなうことが出来るのかもしれませんが。どこまでも優しい子なのです。ただ生まれの卑しさがこのような醜い樹を打ち立てたのです。もてなしは質より量だと育てられてきたのです。だからこの子が悪いわけではないのです。みんな貧乏が悪いのです。

不意に上から歌が聞こえました。お隣の心の空白へしみ通るように子供っぽい元気な歌が響いていきます。歌詞に混ざっているのは、物語。絵描き歌に、絵本。クレヨンに画用紙。



子供騙しの、正義と友情。

「みんなのちっからーを、あっわせーればー」

子供なのです。

「つよいぞっ！ つよいぞっ！ つよいんだー！」

だから、怒ってはいけないのです。

「がったーい！ おくうりんロボ、はっしーん！」

自分で何をしているのか、分かっているのです。

だからだから、お願いです、怒らないで下さい。叱らないでください。この子が悪いわけではないのです。

樹のてっぺんは無数の鳥の死骸のせいで、ふわふわのクッションのようになっていました。おくうはそこに寝転がって絵を描いていました。どろどろに溶けてしまったクレヨンを指先になすりつけて、黒く焦げている画用紙の上、何かを描こうとしていました。けれどなすりつけられつければつけるほどに、紙は燃えて破れてただの灰になってしまったのでした。

お隣は、樹を垂直に駆け上っていきました。気味の悪い肉塊に爪を立てて一気に上り詰めます。



その足音を聞いて、おくうはぴょんと起き上がりました。いつも通り人なつこい笑みを浮かべていました。

「わあい、お隣だ」

その声はいつもと変わらないようでありながら、その奥に何か得体の知れない陰を感じさせるものでした。黒く何もかも飲み込まんとする正体不明の気配を感じて、お隣の尻尾がびりびりと震えるのでした。

「やっと来たね、やっとやっと来てくれたね」

どれだけ呼びかけられても遠いような心地がしました。お隣の頭の中、言葉が意味を為さなくなっていました。ただ何かに吸い寄せられるように、少しずつ色々なことが自分の中から逃げていくような気がしました。

ただ、口から言葉が落ちていきました。

「どうして、こんなことを」

手足は動きそうにありませんでした。どんなときでも機敏にはしっこく動いていたお隣の身体は凍り付いていました。

強大な引力に耐えるだけで、精一杯でした。圧倒的な重力があたりを取り巻いて、それらは全ておくうの側へ向かっていました。樹の上、無数の死骸の上、爪を立てて



懸命に踏ん張っていないと引き寄せられてしまいそうでした。

「暖かいのが好きだって言うから」

お姫様にしてあげたいから。強くなりたいたいから。美味しい物全部あげたいから。

気持ちいいことも、楽しいことも、おいしかったものも、幸せなことも。全部のいいことを、全てのすばらしいものを。

お隣にあげたら、覚えておいてくれるから。

それが二匹分の幸せだから。

一匹で、二匹分の幸せだから。

「これでも足りないなら一緒に行こうよ。美味しいものを食べに行こう」

あくまで優しげに、おうは言うのでした。

「地上^{うえ}に、行こう」

「……何てことを」

そんなことを望んだのじゃない。

そんな、大それたことを望んだのじゃない。

ただ、ささやかな幸せを。幸いを。幸福を。

二匹きりの、二匹だけの。



尻尾がぴんと立ちました。一つの直感がささやきかけます。野生の勘。獣の勘が、一つの考えを浮かび上がらせました。

「あんた、本当におくうなの？」

その瞬間、引力が僅かに弱まりました。言葉は全て無くなり、張り付いたような笑みもまた消えました。

逡巡ですらない思考の停止。時間の凍結。その間を埋めるのは忘却と空白。

「誰だッ！ お前は、おくうじゃない」

言葉はお隣のものでした。ただ否定する言葉だけがこの空隙を埋め尽くしていきま
す。

please judge
「請判断…何人切断？」
How many people you want to kill

低い声が、轟くように木を震わせました。何千羽という鳥の死体が枝の合間から地に落ちていきました。

胸に開いた紅い目玉が、目覚めたのでした。

call response
「呼応答……無」
none

ただ無機質に声は何かを探っていました。荒れ果てる前の一瞬の静けさとして、その平坦な声は空間を埋めていました。



system change
「系統変更」

何もしない、ということが一つの決意であったかのように。

何かを迷い続けることが、事態を決定的に手遅れにしてしまうかのように。やるべきことを怠ったその対価は幾何也。いくばくか

order agent mode
「命令…代理運転」

紅い色が、強く強く輝きました。眩く走る閃光に負けずに、お隣は叫び返しました。違うつ、あんたは本当のおくうじゃないんだろッ！ そうだろ！ あたいのおくうを返してよッ！」

alert on one person alive mode transfer
「危機通知…壱人生存。状態遷移…」

意志は、決定されました。あとは、代行されるだけでした。

destroy and fusion
「殲滅・融合」

そして、全てが発狂する。



死因九八 殺さなかったからこそその死

戦闘は一瞬にして決着しました。

ただの一撃でことは済んでしまいました。

初めて見る力量の差違に、まず尻尾の方から怯えていたのです。たかが猫一匹と神一柱。まともな戦いになるはずはありませんでした。

発射された一閃の光線。幾千万の高温により刹那にして全てが塗り潰され。思考の内側まで浸透してくる神の意志は尊く妨げようもなく。熱量。脳を灼き切つてなお冷めやらぬ圧倒的な温度。避けようと試みることさえ不可能で、暴力はただ容赦なく蹂躪^{じゆうりゅう}していくばかりなのでした。

屍体を灼き焦がされ、ただの二酸化炭素と水蒸気と僅かな窒素酸化物、硫黄酸化物にまで分解された挙げ句に、お隣は魂だけの形になってしまいました。

そこにあるのはありとあらゆる物を飲み込んだ包接体。個と個の融合した樹でした。その中には全ての存在の欲望がひしめきあっていました。

「この地底はこいつが強くなってる」



「綺麗な地上のものたちが恨めしい」

「この地底の者達の恨みをぶつけてやりたい」

「和解することは出来ない。話し合うこともしたくない」

「地上の全てを焼き尽くし、暖かいもの全て手に入りたい」

「飲み干してやる。喰らい尽くしてやる」

「そして、好きな人と永遠に幸せな日々を送るんだ」

何かを望むことはそれだけで大きな罪なのです。

生きるということは望み続けることなのです。

生き続けていたいのなら、望み続け、罪を重ねるより他ありません。

それをしたくないのなら、考えたくないのなら、誰かに考えることを押しつけてしまえばいい。忘れてしまえばいい。

ただ一丸となるだけで、誰かに意志決定を押しつけて。

融合されて、幸せになるための論理的思考を放棄して。

生き物たちの意志はただ一丸となってお燐の魂を飲み込もうとしていました。彼は赤に黄色に青にゆらめていく溶岩の中に溶けていました。呪詛は言祝ことばぎとなり、祝祭は血祭りと成り果てました。何もかもが意味を為さなくなり、しかし全ての書き割



りが重要なものごとであるかのように振る舞い始めました。生命が持ちうる原初の混沌が今ここに復活したのです。

全ての混沌の内側で、ただ一つの事柄だけが溶媒のようにしみ通っていました。

生きたい。

殺してでも生き続けたい。

何者を押しつけてでも存在し続けたい。

最たる欲望の名は食欲。

喰いたい。

食らいつくしたい。

己の物としたい。

世界の隅から隅までを顎あごの中に含み、舐め尽くし、しゃぶり尽くし、味わい尽くしてかみ砕いて飲み込んでやりたい。

精神の根源を蹂躪され、魂の全てがその欲望に染まっていきます。己の尊厳を全て欠いてただの野獣になり下がり、その末にあったものは互いを噛み合い飲み下し合う共食いであり、消化液を内外にぶちまけて行う太古の狩猟なのでした。

喰らい喰い喰らわれ飲み飲み下され消化し消化され。



それは地獄の再来とも言えました。あの熱い修羅の火が核の力を得て再び燃え上がったのでした。

それは幸いなことでしょいか。

彼らは皆それを望んだのでしょいか。

分かりません。誰にも分かりません。

けれど確かに皆が望んだことが、そのような形になり得たのです。

そこへ意志を持たぬ者が忍び寄ってきたのでした。

誰にも気づかれない者がまた地底にはいたのです。神ではなくただのはぐれて壊れたさとり妖怪でしかありませんでした。

彼女にとってお散歩はただの遊戯の一つでした。そしてその途中で何かを拾い上げてこね回して捨てるのも一つの遊びでした。

無意識の存在は混沌に飲み込まれたばかりのお燐の魂と、少量の肉片だけを指先でそっと掬い上げました。そうして歩きながら肉を粘土のように捏ねて形を作り、どうにか一匹の猫の形に作り上げようと思いました。前々から無意識のうちにお姉ちゃんの飼っていた猫のことを羨ましく思っていたからかもしれない。



けれど作った猫の右の前足は萎え、左の後ろ足は千切れかけていました。二本の尻尾は絡まり合って先と先とが融合し、数字のゼロの形をしていました。耳はしおれてくしゃくしゃになり、唇はみつくちで長い前歯がむき出しになっていました。右眼は濁って何も見えなくなっており、もう一つの方も目やにを垂れ流すばかりでした。首と胴とはほとんど千切られかけていて、どれだけこね回しても分離して腱一本でようやくと繋がっているばかりでした。

「うまくいかないわね」

けれども弄るのにも飽きてしまったので、なんだかもうそれで良いことにしました。しかし作品の出来が良くないので、始末に困りました。何処かへ飾っておくわけにはいかないほど不格好だったからです。

そのような訳で不細工な子猫は家の前までつれてこられました。困ったときにはたいてい、お姉ちゃんがどうにかしてくれるからです。

猫は変わり果てた姿で家の前に置かれました。

くすくす笑いだけのさとり妖怪が、小さな指先で、開いたままの目をそつと閉じてやりました。

小さな足音が遠くから聞こえます。無意識はその音を好いていました。しゃがみこ



んでお姉ちゃんを待ちました。

思えば久しぶりのおうちでした。気がついていたらふらりと飛び出して、なかなか帰る気にはなれなかったのですが、たまに帰ってみると良いおうちのような気がしてきました。多分、帰った瞬間が一番よくて、あとはだんだんに悪くなっていくのがおうちというものなのだと思えました。

重い音を立てて扉が開きました。隙間からぎくりとした様子でさとりは無意識を——こいしを見ていました。

さとりに向かって、こいしは出来るだけ阿呆面を作って笑ってやりました。そうすると、小言を言うより先にあきれ顔になって早く解放してくれるからです。

「こいし。貴女、久々に帰ってきたと思ったら何ということを」

「ううん、大丈夫だよお姉ちゃん」

小さくかぶりを振りました。根拠はどこにもないけれど、ただ一つ、確かな直感だけがありません。

「全部ぜんぶ、最後には大丈夫になるんだから」

それは予言でした。

無意識が告げる言葉は確かに真実でありましょう。



けれど、それまでに経るべき不幸は如何ばかりか。

「一度、捨^{ころして}てあげなよ」

せめてもの慈悲に。哀れみに。

そうでない方がよほど残酷だから。

「もつといい屍体はその辺に落ちているんだから。あとはその子が勝手に決めるでしょう」

さあ、また旅に出よう。

おうちは確かに良いところだけれど、良い感じのところだけ一かみして、後は残しておきます。いつでもおいしく食べられるように、大切な場所として取っておくのです。

こいしはびよこんと飛び上がりました。

「じゃあね、お姉ちゃん。後はよろしく」

「ちよ、ちよつと、こいし……!!」

「大丈夫、おもしろいところだけはちゃんと見とくから。他は録^{きろく}画しといてねー」

独り言だけを残して、笑い声だけを残して、壊れてしまったさと妖怪は消えていきました。後には責任ある地霊殿の主人がいるばかりでした。



そのようなわけで、発狂した飼い猫は捨てられました。
戦うのか逃げるのかは、その小さな心に全て委ねられたのです。





死因一〇〇 溺死と禊ぎ

そのようにして発狂した飼い猫は川に捨てられました。

木の箱の隙間から少しずつ水が入ってきて、お隣の足首を濡らしていきます。腹ばいになって寝ているとお腹を壊してしまいそうに冷えてしまうので、お隣はゆっくりと起き上がりました。たつぷりと重く水を吸い込んだ木の箱がとぷんと音を立てて沈んでいきます。冷たさが清冽にお隣の心の毒を洗い流していきます。それは確実に命を奪っていくものです。

お隣は風呂は嫌いではなかったけれど、冷たい水は嫌いでした。だから仮初めで不格好な体をゆっくりと抜け出していきました。そしてそれと一緒に狂気と混沌とが魂から抜け落ちていきました。

けれどもすぐに何かをするという気持ちにはなれないものです。お隣は木の箱の内側にほんやり魂を揺らめかせて、ただ流れのたゆたうままに任せておりました。

そしてもう一度、混沌をそぎ落として綺麗になった肉塊に取り憑きました。そのまま川底に沈んでいってしまえば、もう考えなくてすむかと思ったのです。鳥の力は圧



倒的で何から手をつけるべきかということも分からないような、ただ放り出して逃げ出したい、そんな気持ちでした。

不意に光がさしました。独りでに箱のふたが開いていったのです。切ったばかりの白木が清浄な匂いを撒き散らしながら、軋んでかすかな音を立てました。

声は上から降ってきました。

「ねぼすけ、怠けてんじゃないよ」

まぶしくてうつすらと目を開けると、おんばあ 怨婆がそこに居たのでした。

手には指輪がぎらぎらと嵌っています。豪勢な宝石に飾られた輿こしに乗り、絹張りのクッションに囲まれて毛づやもつやつやとして、大変幸せそうに太っていました。しやれこうべの眼窩の回りに落ちくぼんだ肉がたぷたと揺れんばかりに付いていました。

シユバルツカツツエ 「黒猫、あんたは甘過ぎる。白ワインじゃないんだ。もつとしゃんとしな」

その声は大変懐かしいものでした。あまりに懐かしすぎて、お迎えにきたんじゃないかと思うぐらいでした。お隣は目をぱちくりさせて口をぽかんと開けているのがやつとの状態でした。

「偉い偉い昔の領主様が懐かしい旧三途の川を見に来たって悪いということはあるま



い?」

怨婆はふふんと鼻先で笑いました。

「業突張りでも傲慢でも、極楽住まいは快適さ。まったくもって悪くないが、ちいとはかし生ぬるいのが玉に瑕。あたしや極楽でも随一の大金持ち。ちよつとばかり観光旅行にきたんだがね」

確かに怨婆の胸元にはひも付きのパスポートケースがぶらさがっているようでした。中には閻魔の公印が押されている正規の旅券が入っていました。ふと後ろを見てみれば、大量の土産物を持たされた怨霊たち数匹が青息吐息でついてきているところでした。豪勢にも自宅までのデリバリーサービスまでつけたようでした。

「こんな地獄はもう地獄じゃない。喜ばしいことだが、あたしにや似合わないみたいねえ。こんなに小綺麗に寒く寂しくなっちゃって」

怨婆は失望したようにため息を漏らしました。

「詰まんないから、あたしや地上に行くよ。もっとおもしろいもんが見られるかもしれないからねえ」

「怨婆、あのね、」

おくうのことを相談しようとした矢先、ぴしゃりと断られました。



「自分で考えな。他人に聞く前に」

怨婆は、どこまでも厳しいひとなのでした。極楽に行っても全く変わらないみたいでした。

「あの子はあんたが拾ってきた子なんだろ。あんたが面倒見るんだろ？ 怨婆は助けてやらないよ」

そう言うときまったく子供じみた表情で、いーつと歯茎をむき出しにしました。さらさらの金歯と灰色の歯茎とのコントラストがなんとも言えず素敵に不気味でした。

お隣がうつむいて黙りこくってしまふと、怨婆はぱん、と小さな頬ぺたを両手で挟んでやりました。ぐりぐりと骨張った手で丸っこい子猫の頬をつかんでもみしだいてやります。

「いひゃい、いひゃいよお」

お隣が抗議したところでまったく何の効き目もありません。怨婆は地獄で一番偉いのです。どれだけ賢くたって小さな子猫が太刀打ち出来るわけがありません。

「あんたは自分に出来ることを全部したのかね？ そのご立派な命は、何のためについでんのかね？」

目を覚ますには、それで十分でした。



怖いものは怖いけれど、

あの子を止められるとすれば、自分しかいないのです。

お隣の尻尾がちゃんと伸びました。息をつめて、水の中に自らの歪な体を投げ込みました。そのようにしてあっさりと、お隣は水の中で死にました。そして再び生き返るのです。

立ち上がるために。





死因一〇一 扼殺

天井の一枚岩に今にもつきそうなほど、大きく育った肉の樹は、地底のありとあらゆる存在を吸い取って、今なお成長し続けるようでした。

おくうはそのてっぺんでまた絵を描いていました。鼻歌を歌いながら、地上を支配する夢を描いていました。その画用紙は真っ黒に焼き焦げていました。融かしたクレヨンをつけた指先でなぞればなぞるほどに、それは黒くつぶれていってしまうのでした。

新しい肢体を得たお燐は飛び上がってその眼前に立ちました。長い足の、すらっとした黒猫でした。まるで黒豹のようにスマートでした。

大きな栗の香のする樹の上で再び二匹は向かい合ったのでした。はらりと黒い画用紙が下へ落ちていきました。

「あたいはあんたを止めに来た」

捕まえに来た。叱りに来たんだ。

「命令…代理運転」
order agent mode



おくうの両目は、もうお隣のことを見ていませんでした。赤い第三の目だけが冷静に標的を計測しているだけでした。

「演算… Y A T A。肉弾戦適応度 boxing approximately 55・7%。重力場 gravity field… 中程度 medium」

ただ音の形になってパラメータが出力されているだけでした。意志はすでに決定されていくのでした。あとはただ、代行されるだけでした。

Paint it Black
「全面塗抹」

油の足りない歯車が軋むような声でした。

その右腕が動くのだと気がついた刹那に、横飛び。三つ編みの赤毛が焦げる僅か一寸の間合い。開始の合図は極太レーザービーム。光よりも先に熱線。見えるより先に逃げなければ焼けこげてしまいます。

ただ横に、横に、横に。

転がるだけで精一杯でした。

間合いを詰めようにも前へ進めないのです。怖じ気づいた前足はただひたすらに足下をとらえるばかり。

「にゃにおう……ッ！」

踏ん張ります。叱咤します。引つ込めなくなる爪を頑張って伸ばします。



生きた肉で出来た樹の上で、足がかりになるものは、肉以外にありません。たちまちお隣の歩む上は血だらけになりました。爪を立てて肉の上を走れば、血が噴き出すのは当然のことでした。

ぐるりとお空の周りを一周したその瞬間に、足下がずると滑ったのは、だから当たり前のことでした。

「……ッ」

目の前のことばかりに囚われて、足下を見ないからこうなるのです。

うつむいた子猫の上へ、覆い被さる影がありました。顔を上げた刹那に、その頭を包み込む手は左手。おくうのヒトガタそのままの、五指の残る手。そのまま顔を掴まれて、一気に真上へ持ち上げられます。首の骨が今にも引き抜かれそうな激痛が走ります。間合いを詰められたことさえ、気づけないほどの速度でした。後からやっと追いついてきた風が、ごうっとお隣の毛皮を揺らしました。

片手で掴めるほどの小さな頭でした。四肢は中空にだらりと力なく垂れていました。

mission complete
「作戦——完遂——」

手の内に僅かな抵抗だけを残して、お隣の小さな可愛らしい頭蓋骨は握りつぶされてしまいました。うす桃色の脳漿のうしようが飛び散り、血に混じって、おくうの白いマントを



まだらに染め上げました。

後に残ったのは赤色の綺麗な目玉だけでした。

ビー玉のように透明に澄んでいた眼球を、おくうは小さな指先で拾い上げました。
摘み上げてそっと覗き込みます。

「きれい」

おくうはそのままゆっくりと虹彩の赤色に口付けました。それは熱い吐息に触れて
たちまち溶解してしまいました。

魂はまたもたゆたって、新しい肢体を探しに行きました。たかが一度や二度殺され
たぐらいで諦めていたら、地獄で猫は生きていけないのです。

孤独な魂は、樹に吸い込まれることはありませんでした。ひとたび確たる意志を決
めたならば、融合の魅力にとりつかれることは無いのです。

次こそは勝つ。

勝機などかけらも見えませんでした。お隣の心は前向きでした。負けて負けて負
け続けたのなら、後はもう頑張って勝つしかないのです。





死因一〇二 脳挫傷

次にお燐が来たとき、おくうはまた絵を描いていました。何枚描いても何枚描いても、絵は燃えて無くなってしまうのです。おくうにはそれが不思議でした。忘れたくないから描いておくのに、どうして無くなっちゃうのだろうと不思議で不思議でたまりませんでした。

こうして描いておかないと、自分が何をしにきたんだか、どうしてここにいるんだか忘れてしまうのでした。

大切なことは他のひとが教えてくれるのだけれど、果たしてそこから先、何をすればいいのかよくわからなかったので、自分に出るだけしていました。

熱く熱く。

火を燃やせ。地を暖めろ。温もりを、幸せを。

「おくうっ！」

お燐の声がしました。振り返りました。

そこにいたのは確かにお燐でしたけれど、おくうにはお燐の形をした鬼のようにみ



えていました。

目を三角にとがらせて、頭から湯気がでそうに真っ赤な顔をしていました。声の調子もとても怒っているみたいでした。おくうは怒られるのは嫌でした。

だから、忘れることにしました。

怒られている、都合の悪い恥ずかしいきまりの悪い、今のこの状態を忘れてしまうことにしました。

赤い目玉がおくうの胸元へ現れました。瞬きを二度三度して、眼前のお燐を睨み付けます。

「命令…代理運転」
order agent mode

「だあっつ！ あんたに用があるんじゃないってのに！」

けれどお燐の声は届かなくなりました。

もうそれは、おくうではなくなつたのですから。

「演算…YATA。肉弾戦適応度55・7%。重力場…中程度」
program boxing approximately gravity field medium

「あんたなんか、怖くないよっ！ このポンコツ！」

そう言っつてわざとおしりペンペンなんかしてみるのでした。本当は怖くて怖くてしようがないくせに、そうやって体を動かしてやれば少しはましになるかもしれないと



思つて、道化てみるのです。

ねらい打たれた熱線を避けます。髪の毛を焦がさない程度の精密さ。目が、二度の死闘で慣れてきていました。

「くっだらないね、そんな豆鉄砲！」

鼻先で笑つて、こちらから間合いを詰めます。全速力の前進。視認弾数は絞つて、前面に集中。鼻を利かせて、匂いと赤外線だけで熱源測定。横弾がヤバイと思つたらすぐ離脱。

下が見られないなら、見なきゃいい。お隣の作戦はそうでした。前しか見たくないなら、そこしか見なくて良い状況を作ればいい。姑息でも良い。安全第一。ただもうひたすら最小限で前後に避ける長期戦。

樹上へ血だまりが広がっていきます。それでも滑ることがありません。足下はただ一点のみで接触して、ひたすら前後に飛びすさり、追いつがります。

可能な限り少しでも前へ。気力だけで一歩だけでも詰めていく。それでも焦れた本体が突っ込んでくればひとたまりもありません。

We Will Rock You

「我搖動你」

眼前迫る質量は圧倒的。制御棒による頭蓋側頭部強打。脳震盪の果てに見えるのは

のうしんとう



眩き恒星の後暗黒物質。

一撃では、倒れない。

目を剥いて、ひたすら赤い目玉を見つめ続けました。おくうの胸元で禍々しく輝く宝石の瞳は一瞬怯んだようでした。

けれどお憐が手を伸ばそうとしても、うまく体がうごきません。全身全霊を叱咤激励したところで、頭はぐらぐらしてまともに力が入らないのでした。

「出力拡大^{yield up to}…60%」

もう一撃ではひとたまりもなく。

あやかしはまるで花火^{はな}のごとく空に咲き。

灰色の脳細胞を派手に散らして、お憐は死にました。首から上を派手に咲かせて、ごとりと肢体を横倒しにしました。命令する脳がなければ指先はもうびくりとも動きません。

ばさりと大きく翻った白いマントが肉片を吸い取って綺麗にしていきます。かつてお憐だったたくさんのタンパク質はブラックホールの何処かへと消えていきました。

「作戦^{invasion}——完遂^{complete}——」

その声を聞く者はもはやありませんでした。



こうして子猫はリトライを強いられたのです。

もうちょっとだったのと思うだけの余裕がありました。けれどここから先が果てしなく長いという予感もなんとなく魂に渦巻いて止まないのでした。





死因一〇三 焼死

次にお憐が来た時、珍しくおくうは絵を描いていませんでした。代わりになんだかおねむのようでした。久々に大きな火で遊びすぎて、疲れたのでしょうか。くわわーつとあくびをして、お憐に挨拶さえしませんでした。その代わり最初から赤い目玉が臨戦態勢でした。

「演算… Y A T A。肉弾戦^{boxing}適応度^{approximately} 62%」

「おいこら、あたいのこと無視すんなっ！」

お憐がぷりぷり怒っても、まったく効果はありませんでした。代わりに目玉が答えます。

「重力場^{gravity field}… 中強程度^{medium high}」

身体が一気に重くなりました。内臓が押しつぶされそうな強い力で地面へ向けて引きつけられます。

「このあたいに這い^は蹲^{つくば}れっのかい！ 上等だ」

四つ足の獣が牙をかみしめて、うなります。猫背を無理矢理伸ばして、ぐるぐると



喉奥を鳴らします。

狩りをするための四本脚。全てに力を込めて、バネみたいに収縮させて、いくらでも速く走れるように。

それでも前のように速く動くことは出来そうにない。

それなら、どうするか？

「石油が、何から出来てるか知ってるか！」

枝の間から真つ黒な液体が噴き出してきました。

皆さんはご存じでしょうが、石油は化石燃料です。つまり、かつて生きていた微生物が長い年月と圧力を受けて液化して化石になり液体燃料になるのです。

世界に現存する死体で、お燐に操れない物などあり得ない。地底随一の死体遣いネクロマンサーに扱えない怨霊と死体はいないのでした。

飛び上がった石油はまっすぐな熱線を受け止めて、たちまち燃え上がります。辺り一面が熱く熱く燃え上がります。けれど液体の方向をそらして、決してお燐にはかからないように熱源を遮っていきます。

炎の先触れが、お燐の歩く道を造っていきます。

子猫が重い一歩を歩むごとに、樹が悲鳴を上げながら焼けこげていきます。生きて



いる肉塊が呪詛と断末魔を上げながらただの真っ黒な炭になっていきます。けれど、灼き焦がせば血は出ない。しみ出してくる液体ごと蒸発させてしまうのです。

「死体を燃やして、熱くなれ！ あたいのために灰となれ！」

世が世ならばこれは悪魔の所行と言えましょう。煉獄の鬼ですらこのような振る舞いは致しますまい。

それでも、これが、火焰猫燐の生き様なのでした。

手段を選ぶのは高潔なる者の生き様です。意地汚く残飯を漁り、屍体^{むさぼ}を貪り、役に立つものは下帯に至るまで奪い。それが下卑た盗賊の悪知恵なのです。

己の生き様を、誇れ。

余分の真っ黒い粘液がしぶきを上げて飛んできます。お燐の頬の上を黒い涙のように流れて落ちていきます。コールドタールの焦げた匂いに息もつまり、その臭気のひどさに目から本当の涙がぼろぼろ流れます。

それでも、

「しんどいのはお互い様だろっ！ バカヤロ！」

粘りのある液体を網の目のように細やかに操って、おくうのマントを真っ黒なカラス色に染めていきます。



そのまま、炎は引き渡されました。

自らの産んだ火種に焼かれて、焼き鳥になるかと思えました。けれどその程度で燃え尽きるほどの、熱量ではない。

核の燃料は無限大に生まれるのです。世の全ての者を一つに融合してしまうまで、鳥の形をした業火は止まないのです。火から生まれ、火へと還る^{かえ}。炎に包まれたおくうは、そのまま両腕でお燐を抱きしめました。

お互いの肌をじぶじぶと灼き尽くして、やがて燃え尽きたのはお燐の方でした。まづ毛皮が焼け、ずるりと皮がむけ、中の筋組織が赤く露わになりました。血液は蒸発して、もはや飛び散る猶予も残されていませんでした。

おくうは、後から後から新しく生まれ変わるようでした。先ほど黒く汚れてしまったマントですら、燃え尽きた後には新しく再生する様子でした。

意志が尽きる時まで、資源は尽きないようでした。

やがてがらがらと軽い骨だけになった猫が崩れました。

mission complete
「作戦——完遂——」

肉の焦げる臭いが溶岩の上をいつまでも漂っていました。

smoke on the water
「血煙湖上」



ほんの少し得意げに、赤い目玉が言いました。それから自分の無駄口を恥じたように沈黙しました。

賢しい者は自分の策に溺れるのでした。





死因一〇四 猫肉バーガー 大安売り

さてどれだけお隣が頑張ったのかを示す客観的で統計的なデータをそろそろ提示しなければなりません。ここでは少し視点を変えて、お隣が戦っている間に地底はどのような状況になってしまったのかを説明することにしましょう。

おくうが自分の力にうっとり夢中になって、火の番を忘れていたにもかかわらず、地底の温度は徐々に徐々に上昇していました。しかしその上昇速度は極めて緩やかで、お隣以外の誰も気がつかない様子でした。

蛙を熱いお湯に入れると、その熱さに驚いて飛び出しますが、水から徐々に加熱していった場合には気がつかずに茹でられてしまっています。

ここで起こっているのはそのようなことでした。

勿論、生きているというのは、ほとんどの場合において少しずつ死に近づいているということではあるのですが、それが自然な、ありうべき死の形であるということと、そうではなくて徐々に殺されていくということではやはり在り方として違うものでしょう。



ともあれ、ずっとお燐は一人で戦っていました。

自分が出来る最大限の手で、戦うことだけが望みでした。

到底勝てそうもないような、ほとんど破損して使い物にならないような死体までお燐は使いました。なりふり構ってられない、まさに猫の手だけでもいいから借りてきて戦いに繰り出してしまいうような、そんなひどい有様でした。

四肢の欠損した胴体だけの死体、腐乱した死体、そして焼失して灰だけになった死体。あるいは挽き肉に混ぜものをして量を誤魔化してまで戦士を作り出しました。

赤い潰れた肉に混ざる髪の毛や爪や毛皮や服やリボン。自らの手を尽くして役に立ちそうなものをかき集めました。その中には見覚えのあるものがたくさんありました。たとえばそれは水鳥の羽を詰めたクッションや塩漬けの猫の死体や、お気に入り目の玉などでした。それらの全て、戦いには使われました。

あるいは太古に滅びた動物の化石や石油や石炭といった化石燃料に始まり、食われて死んだ虫たちのなれの果てである糞尿、それらを微生物が食って生まれる硝石^{しょうせき}、遙か古代に在ったらしい大海の底にいた珊瑚^{けいしゅ}のなれの果てである大理石、あるいはそれがさらに大きな圧力で変成して生まれる珪質岩^{けいしつがん}、すなわち地底の空洞そのものを支える岩自身まで動かしてお燐は戦いました。



それらすべてかつて生きていた者です。

それらすべて死んでしまったものです。

誰もそれを手伝おうとはしませんでした。

というより、怨霊たちは誰もそこで子猫が戦っていることを知りませんでした。噂程度には聞いていても、本当のことだと身をもって感じてはいなかったのです。そしてお隣も戦いに巻き込ませることを望まなかったのです。

やがて資源のリサイクルということについて、地獄の市場が傾きはじめました。新鮮な屍肉はいつの間にか猫に盗まれてしまうので、貴重になっていったのです。

誰がどのように回収したのかはわかりませんが、戦って負けた者達の肉が流通するようにになりました。放射線で灼かれているというのをかえって健康に良いという触れ込みで売り出したのです。いつどんな時でもずる賢い者というのはいるのでした。それが怨霊という者たちでした。

だからもしもいつか旧灼熱地獄のあたりへ旅行することがあったら、猫肉^{big fat cat}バーガーという珍しい食べ物を目にするかもしれません。あなたが猫族で無い限りそれは口にする価値のあるものです。中性子味と融合ヘリウム味の二種類のフレーバーがあるはずです。トッピングはチーズ抜きも出来ます。



そう、血は血。肉は肉。確かにそれだけのことはあるのです。既に死んでいたものが再び死んだというだけであり、なんら新しいことなどない。それは繰り返し退屈な日々と同じことです。

何もないあんにも、この場所は変わらないのでした。ずっと昔、地獄が地獄で無くなった時分から、この場所は何一つとして変わらないであり続けたのでした。

地獄の底で一人きり戦っている猫の噂など、誰も気にとめませんでした。

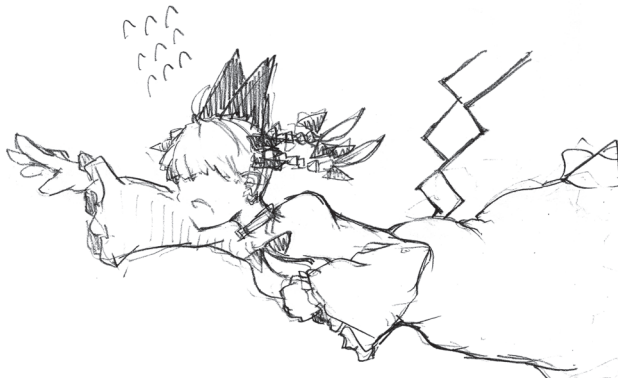
それらは、大鯰や神様や太陽の噂と同じことでした。

世界を救おうとする者は、端から見ても皆、馬鹿げた者たちなのです。

それでも、子猫は孤独に戦い続けたのです。

それを笑うことの出来る者はいるでしょうか？





戦いがどれほど長引くものか、お隣には予想もつきませんでした。けれど出し惜しみしては、けして勝てない存在であることも薄々感づいていました。

だからこそ一回一回が総力戦であるべきでした。

己の持ちうる装備を全て完備して、地獄の軍隊は出来上がりました。生きとし生けるものが皆、いつかは死ぬように、どんな肉もいずれは死体になるのです。鹿も、犬も、狼も、虎も、猪も、犀も、猿も、ヒトガタを備えた者も多くそこにはいました。前足だけの豹が居りましたし、首だけの馬もいました。大ウツボは尻尾をなくしたカングルーの尻に噛み付いてバランスを取る役目を仰せつかりました。死んだときに他の生き物の骨を間違って混ぜてしまったせいで、明らかに首の方向を間違えている骸骨のキリンがいました。体の四分の三が朽ちてしまって、もはやどんな生き物だかさえわからなくなっている者もありました。自分の目玉を無くしてしまったので、拾った二種類の目玉を交互に入れ替えて、どうにか視力を保っているフクロウもいました。近くの物はトンボの目玉で、遠くの物は鷹の目玉で見るのでした。



それら全てを、お隣一人で操っているのです。一行をただ歩かせるだけでやつと
の状態でも、その死体（へいし）の分厚い壁がお隣（おひめさま）を全ての攻撃から守ってくれるはずでした。

一匹のカラスを捕まえるのにそこまでするなんて、自分でも馬鹿げていると思いま
した。

それでも、他に方法が思いつかないのでした。

「命令（order）…代理（agent）運転（mode）。演算（program）…YATA-M。肉弾戦（boxing）適応度（approximately）50%。装填弾数（number of bullets）…膨大。
重力場（gravity field）…中強程度（medium field）」

向こうもそれを勘づいて、多対多で戦う用意をしているのがわかりました。無数の
小さな光弾が渦を巻くようにして赤く赤く燃えたぎる鳥の形をした業火を取り巻いて
駆け抜けていました。その一つ一つが核弾頭のごとき破壊力を秘めていることは疑い
ようもありません。

行軍は号、合、業、剛、拷、轟轟。

ただひたすら愚直なまでの行軍。前進。腹回りに抱えた硝石と炭素の混合火薬が爆
発します。油紙に包み込んで胃の中に飲み込ませたプラスチック爆弾が暴発します。
戦術などはあるはずもなし。人海戦術と言うことさえおこがましいぐらいのただの
前進。行進。賢い子猫にあるまじき愚行です。たちまちのうちに焼け焦げた死体の山



が出来上がりました。そしてそれらはすぐにただの二酸化炭素や水蒸気やその他様々な気体に変じて流され消えていきました。

それでも、それしか、出来なかったのです。

ただ前へ前へ前へ。

燃料は尽きなくとも、一瞬のチャージの合間を見つけるために。針の穴の一点のような僅かな隙間を見いだすために。

ちらちらとかいま見える息継ぎの一点。それを良く狙って狙って。

お隣はその一瞬、全ての動きを止めました。

魂を二つに引き裂いて、片方は道具に込める。それぞれ二分の一の確率でしか子猫は存在しない。生きながらに死に、死にながらに生きて生きる。己の魂の片割れを、一つの車輪に込めたのです。

そして、猫車を走らせました。ただまっすぐに、おくうへ向けて吸い寄せられるようにして一心不乱に駆けていきました。

その小細工すらも、空しいものにしかありません。

「重力場…万有」
gravity field universal

走っていったはずのものが、みるみるうちに速度を落としていきました。そしてお



くうの手前でひたりと停止すると、来たときと同じように今度はお隣の手元に帰っていくのでした。太陽に唾する者は自らその唾を受けることになるのです。

お隣は避けようと努力しました。死体の壁を間に設けて、どうにか軌道を妨げようと試みました。それでもそのたびに重力場がねじ曲げられ、逃げられないのでした。

こうしてお隣は自ら走らせた猫車に轢かれて死にました。

お隣は死ぬ間際に、何もかもが自業自得なのだと思悟りました。おくうにはきちんと言葉を届かせてあげることが出来ないのだと、そのように育てた自分が悪いのだと思いました。

それでも今更どうしようもないことでした。

どのように戦うべきなのか、分からないような気持ちになりました。

自分の手の中にある、この旧地獄の力を結集させたとて、あのクラスには届かないような気がして、ぽたぽたと悔し涙が溢れるのでした。その涙も融合炉の熱に遭えば蒸発して紫の煙purple hazeになってしまいうのですが。





手持ちの死体のほとんどを使い果たしてしまったので、お隣は仕方なしに猫の一匹に戻ることになりました。その代わり、地底に存在する全ての有用な鉱物^{ミネラル}を砕いて加工して飲み下すことにしました。

強くなるためにありとあらゆる薬剤を考案しました。その副作用を抑えるために必要な化学物質をさらに投与しました。頭痛がすれば鎮痛剤を投与し、胃痛がすれば粘膜保護剤を直接塗布しました。そしてそれらが流れ出てしまうのを防ぐために、胃液の分泌腺を切除しました。胃はもはや爆弾を飲み込むための収納ポケットでしかなかったからです。

代謝系の改善については特に重点項目を置かず、バランスの良い基本性能の改善に重きを置きました。ドラッグカクテルの調合においては神経の伝達速度を上げ、筋肉の血流速度を上げ、心拍数を倍に増し、脳内の化学物質の分泌を加速させることを目的としました。

感覚器周りの改造では特に電磁波検出を徹底して弄りました。視神経と脳の間の回



路を繋ぎ換え、網膜成分を塗り替えて、可視領域の波長を赤外から軟X線まで広げました。出来ることなら中性子の検出器も備え付けたいところでしたが、この世界で生きる物で未だそのような器官を持つ存在はいなかったため、断念しました。

チューンナップ

調整には出来る限りの手を尽くしました。

そして、時間はあまり残されていませんでした。

それらの身体改造は確実に生体としての寿命を縮めていたからです。

おそらくこの体でおくうに勝利したところで、猫としての形を保っていられるのは六時間かそれぐらいだったでしょう。

もはやなりふり構ってはいられませんでした。

ともかくにも、勝たなければなりませんでした。

ただの一言でいいから、届かせなければなりませんでした。

そして、二匹は対峙しました。

赤い目玉がいつもの通り応答しました。

order

agent

mode

program

boxing

approximately

gravity field

「命令…代理運転。演算…YATA。肉弾戦適応度70%。重力場……」

「遅いねッ！」

一瞬のうちに、その背後に回り込んでいました。いつもの口上を言わせる暇さえあ



りませんでした。翼へ向けて、長い爪で斜めの斬撃を浴びせかけました。

肉が切り裂かれる感触の途中、硬質音と共に爪が折れてしまいました。

protocol irregular penalty exit only
「規律違反。罰則…出入禁止」

めきめきと盛り上がってきた翼の筋肉に爪が食い込んで、逃げることも叶わない様子でした。その一瞬の逡巡の間、振り返ったおうの顔を、見ることはできませんでした。

視野角の中に、一切の異常は感じられませんでした。ただ一瞬の時間的空白が、風切り音が、あっただけでした。

気がついた時には指一本分にも満たないような細い鋭利なレーザーワイヤで頸動脈ごと切り裂かれていました。

ドット欠け
盲点を利用した巧みな一撃でした。視神経の網膜に繋がっている一点のみ、見ることが出来ないという性質を利用した繊細にして英知に長けた攻撃なのでした。

巨砲だけが取り柄ではなかったのです。

思い返してみれば、おうだって大きな図体の中に優しい繊細な心も持ち合わせていたではありませんか。だからこれはけして代行者が暴走しているのでは無いのです。こうすることは、おうの意志でもあったのです。



鮮血の勢いよく噴き出す中を、猫の生首がくるくると回りながら飛んでいきました。脳にまだ酸素のふんだんに残った血液が流れているゼロコンマ数秒の合間、お隣は必死で必死で考え続けました。

首だけになってでも噛みつきたいと願いました。

口先の嘘だけでもいいから届けたいと望みました。

それは到底かなわないことでした。なにしろあの平和だった時ですら口付けをすることもかなわなかったのですから。

このようにして子猫はまた死んでいきました。

一体、何匹の子猫を実験台にすれば気が済むのでしょうか。

血だまりの中を、てん、てん、と丸い頭が転がっていきました。真っ赤に染まったその首を、おくうはそっと抱き上げました。

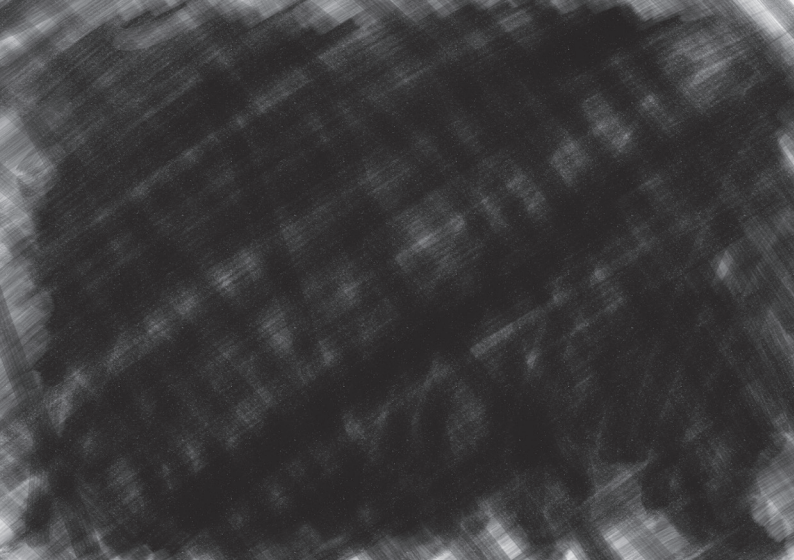
「……ごめんね」

その声の主は、果たして誰だったのでしょうか。慰めるように、赤い目玉が覚えかけの片言の日本語で言いました。

「子供、大丈夫
kids are alright 大丈夫」

それは本当に大丈夫なのでしょうか。





死因一〇七 市中引き回しの上打ち首獄門

もはや自分にどのような手が残されているのか、お隣にはわかりませんでした。

ただよぼよぼと老いてひげも背中も曲がった猫の死体に取り憑いて、樹の上に登るのもやつの様子で、はい上がるぐらいしかありませんでした。気持ちの悪い肉の塊に爪を引っかけてようよう登っては休み、登っては休みするぐらいでした。

力ではかち合えないのなら、もう、情にすぎるぐらいしか思いつきませんでした。声をかけても届かないかもしれないのに、それはほとんど無謀といえる取り組みでした。

それでも、ひょっとしてという希望はありました。

おくうは優しい子でしたから。

優しくて優しくて、それだからこそ、誰のことも拒むことが出来ずに、ありとあらゆる欲望の象徴として祭り上げられてしまったのですから。

「おくうやあい。おくうやあい、からすのこやあい」

しわがれた声で惨めったらしく鳴きました。鳥の形をしたこの世の罪悪はすぐに飛



んできました。

mode
auto-eject
「状態…強制排除」

冷たい声と共に制御棒が構えられました。もうじき熱線の一斉放射が来るでしょう。お隣は観念してぎゅっと目を閉じました。この方法もダメなのかと思って、また弱虫のため息をつきました。

澄んだ声が、しました。

「止めて」

それは、一つの意志なのでした。

「ヤタさん、そういうの、わたし嫌だな」

見上げたおくうの両目は光を取り戻していました。お隣は口をぽかんとして、久々に友人の顔を見つめました。

「おくう……?」

「ごめんね」

言葉は、ただ落ちていくばかりでした。地に落ちては業火に焼けて消えていくようでした。

「わたし、みんなが幸せになればいいなって、思うんだ」



微笑は灰のように白く。声は煙のように儂く。

「この力で、地上を焼き尽くして制圧して、そうして、お隣にもたくさんたくさん幸せを持ってきてあげるから」

夢を描き、絵を描き、そして紙ごと燃やしていく。

「だから、ごめんね。今日はごめんね」

何もかもがとうに決められてしまっていて、動かせないのです。初めからこのようになつていたのです。

「たくさんたくさんごめんね」

謝罪も贖罪も断罪も意味はなく、積み重なるは罪ばかり。

「そして、忘れてください」

痛いことや辛いことや、嫌なことは全部。

わたしのことは、全部、忘れてください。

制御棒は再び振り上げられました。そして、二度と止められることはありませんでした。

ただ白い光が目の前を灼き焦がしていきました。それはまるでお終いの日に天国や極楽が来てしまったみたいに真っ白に清浄なのでした。



このようにしてお燐は死にました。

孤独に一人で死にました。

お迎えの天使は、白い衣をまとった真つ黒な鳥でした。

縁起が良いのか悪いのか、さっぱり分からないやと笑いました。そうして悔し泣きに泣きました。

それらは全て、魂の見た幻覚に過ぎなかったのですが。

世に救いはあるのでしょうか。

何故このような子猫たちが、苦しまなければならないのでしょうか。

我が主よ、このように残酷なことを見届けなければならない、我が身を恨まずにはおれません。どうかわたしたちの命ごと、この世から消し去って下さい。猫の悲鳴がまた一つまた一つとこの地獄へ響くごとに、祈らずにはおれないのです。

Yama, Yama, Lem's abachthani.
主よ、閻魔よ、何故我らを見捨てたもうや。

世に地獄なるものが在るなら、この地こそが地獄でしょう。地の空隙を埋め尽くし溢れかえるこの阿鼻叫喚と怨嗟こそが真の地獄というものではありませんか。地獄は既に地底から去ったのでは無いのですか。なれば地獄にすら見捨てられたこの惨劇を、



何と呼ばわれば。

答えて下さい、主よ。

何のために、この惨劇はあるのですか。

それとも、全^レては^レある^レが^レま^レま^レで^レな^レけ^レば^レな^レら^レない^レの^レで^レす^レか。



死因一 幸せすぎて生きるのが辛い

皆さんは生まれたことそのものの意味について、考えたことがありますか。

産道を通り過ぎる間、お隣はずっとそのことについて考えていました。

自分が生きることの意味はあるのかって。

生まれてもどうせ死ぬのなら、初めから死んでいた方が賢いんじゃないかって思っていたのです。

生まれる前からたいそう賢い子猫でした。この場合の賢いという言葉は決してほめられた言葉ではないようですが。

そして、どうやら子猫は難産の様子でした。周囲があわてふためいて緊張しているのが聞こえます。母子共に無事でいられるかどうか。周りじゅうはてんでこ舞いの様子でした。

けれど誰かが歌っていました。安らかな歌でした。その歌のおかげで心安らかでいられるのでした。その歌が、きっとお母さんというもののなのだと思います。それは暗い中でも安心させてくれるすばらしいものでした。



けれど不意に一気に明るいとこへ押し出されました。暗くて暖かった場所から急に明るくて寒いところへ出されてしまいました。

あの優しい歌は聞こえなくなっていました。お燐は不安で不安でみいみいと泣くばかりでした。けれどどれだけ求めたところで、歌は取り戻されませんでした。

その代わりにぎぶぎぶとお湯で洗われ、ごしごしと手ぬぐいで全身を拭かれました。乱暴で荒っぽくて嫌になってしまいうくらいに痛いものでした。生きているというのはいくらにも窮屈で苦しくてやってられないようなものなのだろうざりしてしまいました。

閉口したお燐は作業が一段落するなり言いました。

「知らない、こんなの知らない」

知らないから、おかあさんを返してよ。

それを聞いた老婆は少し考えた末に、その死んだ母親の魂を手の上に載せて、生まれたばかりの子猫と重さを比べました。掌を秤のようにして何かを計っておりました。

その間、お燐は目も開かないまま、世界の音を聞き続けていました。うずくまっていた子猫の耳に届くのは、ごうごうと鳴り響く風の音。回りの生き物たちが動いたり話したりしている音のようでした。言葉や意味合いが大気の中に込められて、濃くわだ



かまった地獄の熱の中でたゆたっていました。くしゃくしゃのボロ切れの中で少しづつ逃げていく熱を捉えようとしても果たせないように、流れていく声も意味も、全ては流れて消えていくようでした。

怨婆はやがて、みどりご嬰兒に言い聞かせました。

「おまえは優しい子だ。誰かのためにずっとずっと死に続けることを選ぶと言うのかい」

小さなお燐は躊躇なくこっくりとうなずきました。

「あたいは生きていたくなんかないんだ。それよりもっと大事なことがあるはずなんだ」

それが、お燐の答えでした。

自分よりも価値のある者に、自分の大切なものを捧げるということ。そのような生き方を望んだのでした。

「よろしい。おまえに呪いをかけよう」

怨婆は小さな鈴をたぐり寄せると二、三度鳴らしました。そしておまじないを唱えました。声は、他の色々なものと同じようにすぐに消えていきました。

「おまえは死に続けなさい。そして、誰かを救う英雄であり続けなさい」



そして怨婆は小さな猫の目と鼻と口をふさぎました。

子猫はぴくぴくっと体を震わせたかと思うと、すぐに動かなくなりました。その死に顔はひどく安らかなものでした。大変幸福そうに見えました。

そのようにして、お燐は息を引き取ったのでした。

それが一番最初の、幸せの記憶。

一度しか失わなかった、自分のほんとうの命の記憶。

そんな生き方を選んでいたからこそ、

大切なもののために、

死に続けることが出来るのです。

だから、そう。

あの、幸せな日々を取り戻すためには。

友人を救うためには、

戦い続けるしかないのです。





でも、

それが苦しいことだなんて、
お隣はちつとも考えちゃいないのです。

だって、二匹は友達で仲良しなのですから。

いつかまた元通りに仲直り出来ると信じているのですから。



お燐の意志はとどまるところを知りませんでした。

ひたすらにただ前へ進み、己の持ちうる力を捧げるだけでした。力が足りないのなら脚を棒のようにして歩き回るだけでした。脚がくたびれて動けなくなったら、棒を膝の関節に突っ込んで歩き回るだけのことでした。

お燐は靴を探していました。

古い古い昔に怨婆がくれたものでした。獣たちが去って、ほとんどすさんでしまった市場の片隅に、ぼつりと置かれているのをやっと見つけました。主のいないその店の中に忍び込んで、お燐は長靴を手に取りました。

昔、地割れとともに飲み込まれたゴム長靴は、前よりもずっとずつとひどい状態で、すねの部分はほとんどちぎれて無くなっており、すり減った底の部分はゴム状硫黄で、何度も何度もふさがれていました。

それでも、裸足の肉球よりはずっとましでした。棒きれの脚にぐるぐるとリボンを巻き付けて、けして脱げないように細工をしました。



肉と骨とに楔を打ち込み、膝はベアリングを埋め込んで、丁寧に磨き、油污れで指先を真っ黒にして、自分の内側に異物を埋め込んで。そうやって戦うしか無いのです。

再び、一匹と一匹とは対峙しました。ぐるぐると威嚇して、見つめ合います。もはや口上が述べられることはありません。今は手動運転なのです。力に振り回されていた雛の姿はなく、自らの意志で焰と熱とを操ることが出来るようになっていたのです。

雲のごとく無数に立ちこめる光弾の中を、お燐はただ駆けていきます。距離を少しずつ少しずつ縮めながら、ぐるぐるとおくうの周りをまわっていきます。

不意に暗雲が立ちこめ、その中を青白いプラズマが走りました。それは肉たちの間を駆け抜け、お燐の足下まで電流が走っていききました。

しかし子猫の足下は全く滑ることがありません。赤い目玉が感嘆の声をあげました。

「絶縁体……!？」
insulator

「そんなもんじゃ、効かないね」

お燐は笑みを浮かべてみせます。そんな余裕など何処にもないはずなのに、無理矢理にでも笑ってみせます。



「バカラス。一回しか言わないから、良く聞きな」

言葉は、虚しい。通じないかもしれない。届かないかもしれない。口にするだけで罪悪であるのかもしれない。

それでも、言わなきゃ、伝わらないから。

「友達が間違ってたらブン殴ってでも正すのが友達だろッ！」

固めたのは意志と拳と力。全身、全力、全速力の前進。

紅い目玉に爪をめり込ませる。ぐじゅりと嫌な感触が。

エラー音が響き渡ります。

「――八咫烏部損傷、視覚消失、main parts Damaged mode: blind高速炉制御不能」

熱が一瞬にしてしぼみます。

それでも、戦いは止まりません。かみさまのところが傷ついても暴走は止まらないのでした。なぜならそれを望んだのはおくう自身だったからです。

「ごめん、お隣、ごめんヤタさん、ごめんみんな、ごめんごめんごめんごめんごめんごめんごめんごめんない」

謝罪の言葉を重ねれば重ねるほどに、おくうの体は小さくなっています。炎は縮み、腕はもげ、脚は萎えていきます。



やがて小さな鴉の形に変化しました。翼すら小さくしぼんで飛べなくなってしまいそうに見えました。

「でも、わたしは、間違っていないもの……！」

代行ではない、本当の自分の持つ武器で、おくうはお憐を傷つけました。

飛びついて、お憐の肩口に止まります。そしてそのまま顔を向けました。

硝子玉のような目と目が合い、そして、硬い嘴がそれを遮りました。初めての口づけでした。

その尖った先でお憐の目玉を貫きました。死体を喰らう地獄鴉の本能をむき出しにして、ただひたすらお憐の目玉をかみ砕いて、その奥にある脳味噌を掘り出していきましました。

「ごめんね、こうするしかないんだ」

泣きそうなおくうの声だけが聞こえます。何かを考えようとすればするほど、お憐の心は取り出されていきました。一口ずつ心はついばまれて切り刻まれ、咀嚼されていきました。

精神も感情もすべて一緒くたになって、胃袋の中で消化される運命になってしまったのでした。愛情も友情も、ありとあらゆる親愛の情が取り出され食い物にされてい



きました。

やがて脳味噌を全て吸い出されて、身体の制御が利かなくなった子猫はぱたりと五体を投げ出しました。

鴉はその遺体を名残惜しそうに見つめていましたが、それ以上の損壊を加えませんでした。ぱたぱたと羽音をたてて逃げていきました。傷ついた部分を修復するのです。よう。

魂だけになって、お隣はしばらくたゆたっていました。

何度も何度も繰り返して、あの子の回りをぐるぐる回って。猫車の輪のように巡る運命の輪。どれだけ早く回ったところで、その中心にいる者には届かないのです。



それでも。

お隣は小さく笑ったのです。

ただ硬い硬い意志がそこにあるばかりでした。

そして、心の底で呟いたのです。



「あんたは
なんにもわかつちやいない。

強い奴が
勝つんじゃない。

あきらめた奴が
負けなんだ」

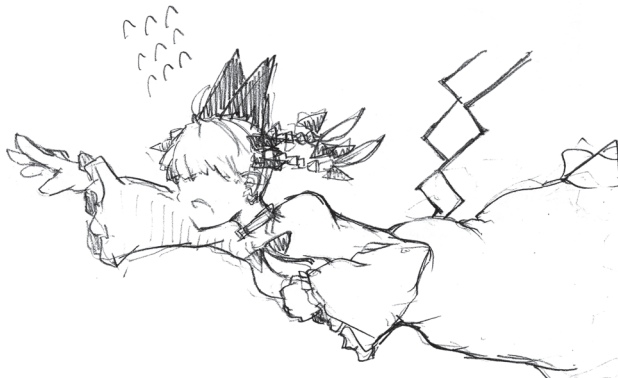




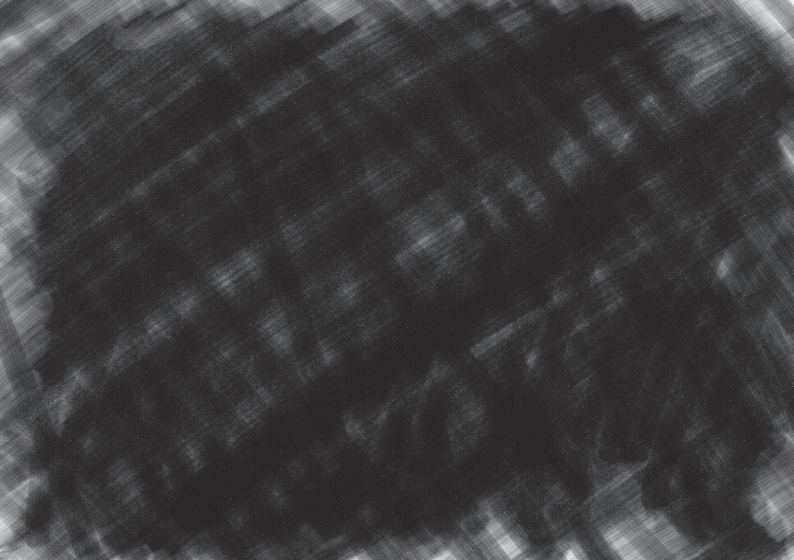














死因一〇九 両手による縊死

死因一一〇 業火に囲まれて焼死

死因一一一 殴打による頭蓋骨陥没

死因一二二 四肢切断による出血多量

死因一二三 樹上からの墜落死

死因一二四 頭部切断によるショック死

死因一二五 薬物摂取による自家中毒

死因一二六 プラズマによる感電死

死因一二七 地割れによる圧死

死因一二八 腹部殴打による内臓破裂

死因一二九 煙による窒息死

死因一二〇 鴉に全身を突かれる

死因一二一 皮膚が火傷で爛れる

死因一二二 致死量の放射線被曝

死因一二三 全身の水分が蒸発する

死因一二四 目玉をくり抜かれる



死因一二五 象の足で踏みつぶされ、胃と腸と肺と鮮血が溢れる

死因一二六 耳穴から撃ち抜かれる

死因一二七 憤りのあまり脳溢血

死因一二八 両手両足をもがれる

死因一二九 頭部を吹き飛ばされる

死因一三〇 身体を縦に半分にされる

死因一三一 口の中に熱い石を放り込まれる

死因一三二 鼻の奥に熔けた鉄を流し込まれる

死因一三三 高温蒸気を吸い込み火傷

死因一三四 崖にぶら下がるが結局落ちて地面に叩き付けられる

死因一三五 身体を横に半分にされる

死因一三六 頸動脈を光弾で引きちぎられる

死因一三七 舌を引き抜かれて出血、窒息死

死因一三八 耳と鼻と口を削ぎ落とされる

死因一三九 喉を高温レーザーで貫かれる

死因一四〇 胸骨強打により胴体に穴が開く



死因一四一 心臓を片手で引き抜かれる

死因一四二 脳みそを手で掻き出される

死因一四三 肺の内部が火傷して水膨れが破裂

死因一四四 人力ギロチンにより断頭

死因一四五 全身を無数の火の玉に貫かれる

死因一四七 マグマにダイブ

死因一四八 袈裟斬りで真つ二つ

死因一四九 小太陽を飲み込んで内側から爆発

死因一五〇 頭蓋骨を上下に切断される

死因一五一 電磁波で狂死

死因一五二 脳みそレンジでチン

死因一五三 肋骨が粉になるまで殴打

死因一五四 下腹部貫通レーザー

死因一五五 肺の中に血が溜まって死亡



(以下省略)

死因八〇〇 マラソン完走後、心臓発作でショック死

そのようにして、お燐は死に続けました。

数も分からなくなるほどの死体を樹の回りへ残して、殺され続けました。それでもお燐は諦めませんでした。

愚直なほどに前へ前へ、新しい方法が思いつけばそれがどんな方法であっても試してみます。それがまるで日常の生活みたいになっていました。日々の仕事みたいに生と死とをこなすのでした。

それはまるで平穏な日々のもようでした。凄惨な戦いの繰り返し、まるきりただの平和のもようでした。

ある日、戦いの準備をしているお燐のところに怨婆がやってきました。

「地上も悪くはなかったね。でもまあ、あたしゃ帰るわ」

荷物をどこかに預けてきたのかひどく身軽な様子でした。

ちょうどそのときお燐は小さな黒猫の形に化けているところでした。怨婆は上機嫌に子猫を撫でてやりました。



「あんたも、一回ぐらい行ってみるといいさ」

「あたいは今忙しくてそれどころじゃないんだ、怨婆」

そう言っではねのけようとする、どうやら怨婆のかんに障ったようでした。顎ごと搦んでぐっと顔を向けさせられました。

「世界は広い。強い奴が幾らでもいる。あんたの強みはなんだ？ それはあんた自身が強くなかったって良いってことさ」

そう言われてぴんと来ました。お燐は賢い子猫だったのです。このところのどうにも突っ走るだけしか出来ない状況の中ではどうにも忘れがちなことでしたが、本当は本当は賢い子猫だったのです。

「頑張りな、ろくでもない泥棒猫」

怨婆はほとんど透き通っていました。本当のお別れが来るのだと分かりました。

怨霊とは、この世に怨念を残した者がなるのです。怨婆の最後の心残りが、お燐とおくうのことだったのです。

「欲しい物があるんなら、地上から奪ってくればいいのさ。頭を使いなよ。あんたが行かなくても、向こうから力が来てくれるんだ」

そこまで言われなくてもお燐には分かっていました。何しろお燐は地獄で一番賢い



子猫だったのですから！

そして走り出しました。まずは、必要な道具を呼び寄せるところからでした。とにかくお燐は地獄で一番の大空洞まで駆けていって、そのてっぺんから大声で呼びました。

「地上へ行くよ、お前たち！ 奴らを思いっきり驚かしてやるんだ！ 地上には綺麗なものがたくさんあるぞ、たっくさんのきらきらを見せてやるぞ！ そしてみんなてぶちこわしてやるんだ！」

それからまた駆けていって、二番目に大きな穴でこう叫びます。その声は大きく、果てなく、何処までも届くようでした。鯨の居なくなった湖にも、商人の消えた市場にも、子猫の鳴き声は響いていきます。

「地上へ行くんだ、お前たち！ ゲロを吐いて、あいつらの綺麗な着物を汚物まみれにしてやるんだ！ ごちそうに糞便を！ お祭りに猫の死体を！ 建物はたたき壊して全部薪に！ 何もかもぐしゃぐしゃにしてやれ！ 混沌こそあるべき姿！ ありとあらゆる者を地獄の業火の中に投げ込んでやれ！ 地上を燃やし尽くせ！ 全てを破壊しろ！ 世の富は全部、あたいらのもんさ！」

おやおやどうしたことでしょう。そんなことを言うなんて。ついにお燐もおくうに



屈して地上へ攻めるつもりになったのでしょうか。

いいえ、そうではありません。ちゃんと考えがあるので。

そして、怨霊たちはお隣の所へ呼び寄せられました。お隣はぐっと拳を振り上げて地上への縦穴を指し示しました。もしも怨霊たちが生きていたら、ときの声が地上をも震わせたことでしょう。代わりにびかびかと眩しいぐらいに穴の中を照らし、熱い間欠泉が噴き出してきました。

本当にたくさんさんの怨霊がお隣の後へついていきました。お隣が世界を救うような正しいことをしようとしていた時にはけしてついて行きませんでした、このような負の感情にこそ彼らは惹きつけられるのです。卑しい卑しい怨霊なので、誰かを妬んだりうらやんだりすることの方が彼らにはぴったり来るのです。

そうして、終末の大縦穴を黒猫が駆けていきます。

尻尾も根性もねじ曲がったままで、それでも堂々と胸を張って全速力で怨霊たちを引き連れて、黒い流星が闇の中を走っていきます。尾っぽもちぎれそうなほどの早さで、上へ上へ駆けて行きます。通り過ぎていった岩がそのスピードをおそれて堅く堅く縮こまるほどの速度です。

届け届け天まで届け。風と共に、蒸気と共に。



「地上はすごいぞ、地上はすごいんだ。妬ましい恨めしい」
怨霊が呼ばうは、救い。この世の怨嗟を祈りに変えて。

「暴れてやる、騒いでやる。はちゃめちゃにしてやるんだ」
だから、だから、お願いです。

お憐の心の中は、必死で祈りを重ねていました。

誰か、助けて下さい。この世に救いを。

この地底から地獄を、本当に取り去るために。

大騒ぎの一行は、そのようにして地上へ向かいました。ここから先のことは、皆さんが知っている通りです。

地上に湧いた間欠泉に温泉、そして怨霊。雪の降り積もった博麗神社に起きた異変。地上に騒ぎを巻き起こしたお憐たちの最初の一団はまずは巫女に打ち倒されました。しかし、お憐の口車に乗った怨霊たちは後から後から湧いて出てきました。上に下にも大騒ぎです。

業を煮やした博麗の巫女は地底へ怨霊征伐へ出たのです。怨霊は、一匹見たら三十匹。根絶やしにしてやるつもりで意気揚々と飛び出して行っただけでした。



一足先に地底へ戻っていたお燐は、まんまと策略に引っかけた間抜けな巫女にとびきりの笑顔を向けました。

熱い熱い灼熱地獄。おくうの力のせいで昔と同じ熱を取り戻した溶岩の上で対峙します。

「じゃじゃーん！ お姉さん、灼熱地獄を楽しんでいるかい？ 軀も魂も焦がれる業火」

これがお燐の本当の狙い。あれだけ騒げば誰かが来るに違いないと、そう思ったのです。賢い賢い子猫の謀略はそれだけではありません。

そして弾幕は展開されました。すれ違ういくつもの弾にぞくぞくと背筋が震えます。確かにこれだけの強さは地底にはなかったものです。

「くー、お姉さんしびれるねえ。その強さ、堪らないわあ」

巫女は怪訝そうな顔をこちらに向けます。理解していかないのでしょうか。別にそれでもかまいません。お燐としてはこちらの思い通りになりさえすればそれでいいのですから。

巫女はたちまちのうちに、お燐をぶちのめすと、先を急ぐようにして飛んでいきました。



「さあて、と」

これで終わりじゃ、火焰猫燐の名が廃^{すた}る。

こてんぱんに叩きのめされたお燐はふるりと耳を小さく振りました。別の屍体にとりついて、全速力で空飛ぶ巫女を追いかけていきます。息を切らせて心臓を弾ませて、まるで生きているみたいに、一生懸命かけていきます。目の前の景色も全部ぐちゃまぜに真っ白になるぐらいに。地獄の熱が全部真っ白になってしまいうるぐらいに。ようよう巫女に追いついた子猫はこう言ったのでした。

「そうそう、一つ忘れてたよ」

負けたからって諦めない。しぶとく図太く残り続ける。

それが地獄の猫というもののなのです。

「地獄^{じごく}の底で死ぬとみんな焼けて灰すら残らない」

その身体盗んででも、自分の手でアイツを倒す。

「死体が欲しけりゃ、やっぱりあたいがお姉さんを仕留めないとね！」

ただ浮かぶのは感謝の念。自分たちを生んだ地底の全てに感謝する。この巫女を産んだ地上の全てに感謝する。ただこのようにして戦い続けることが出来る自分自身に感謝する。



このろくでもない世界に、ありがとうを。



死因八〇一？ 死ぬのには理由があるが

生きるのには理由がない

そして、全てが終わりました。

皆さんも知っている通り、紅白の巫女は予想を遥かに超える強さでお燐とおくうを叩きのめし、地獄と幻想郷とを強制的に平和にしました。

どれだけおくうが強くても何度でも繰り返して挑んできて慣れていつてついには打ちのめしてしまつたのです。

だからお燐の作戦は半分成功、半分失敗といったところでした。ねらい通りおくうを止めることができましたが、自分の力で止めることは出来なかつたのですから。

そして、もっと残念がつていたのは、さとりでした。

すぐに二匹を地霊殿に呼び出したさとりは、おずおずとこう切り出しました。

「あのね、あなたたち。一緒に暮らせませんか」

まじめな飼主らしく、今回の一件に関しては責任を感じているようでした。自分が信頼されていなかったからこそ、このような事態が生じたのだと感じて止まないよ



うでした。

お隣はそんな気持ちにさせてしまったことを申し訳なく思う気持ちで一杯でした。一度は自分を捨てたさとりをまったく信用していなかった訳ではないのです。ただ、おくうのことは自分が止めなきゃ、自分でしか止められない。そんな気持ちでただ走っていたのです。

しょぼんと耳を垂らしてうなだれているお隣を、さとりは小さく撫でてやりました。そしてきゅつと手を握ってあげました。

お隣の反対側で同じくしょぼくれているおくうのことも、さとりは手を握ってあげました。

右手に冷たい手、左手に暖かな手。

白いクロスのかかったお茶会のテーブルをみんなで囲みました。みんなで手を繋いで座る為にこの食卓は丸いのだとお隣は気がつきました。

「二度とこんなことがないように、私たちは家族にならなくてはなりません」

そのままさとりはぶつぶつと独り言のように言葉を紡ぎ続けました。

私は熱いのや騒がしいのは苦手ですからこれぐらいひんやりと落ち着いた地霊殿の方が生きやすいのですけれど、炎を食べ、死体を食べるあなた達にとってこの場所は



若干静かすぎて不気味に感じるのかもしれませんが、それでもそれはそれで一つのライフスタイルなのですから、受け入れて認め合うのが良いのではないかと思うのです。ここはここでそれなりに良いところですよ。たとえば部屋がたくさんありますから、一つを火災や騒音専用の部屋にしたところで何も困ることはありません。それならばあなた方も少し居心地が良いのではありませんか。もちろん、外出や門限をもうけることもありません。私には出ていったきり、家ではおやつばかり食べて、あとは不要品を捨てるときぐらいいしか戻ってこない妹もいるわけです。そういった点ではちょっとぐらいの家出も認めるにやぶさかではありません。云々。

「正直、あの子にはもっと家に居て欲しいのですけれどね」

そう言って少しばかり恨めしげな顔で虚空をにらみつけました。お隣もそちらへ視線をやりましたが、やはりそこには誰もいないようでした。

ともあれ、おくうが一生懸命沸かしてくれたおかげで、美味しい紅茶を飲むことが出来るようになったのです。今はもうゆっくりとお茶とお菓子を楽しむことに致しましょう。紅茶は煮えくりかえるようなお湯で淹れるのが一番ですから。

「ありがとうね、おくう」

さとりはおくうの耳の後ろをかいてやります。おくうは目を細めて、かあ、かあと



嬉しそうに鳴きました。おくうはもう、さとりのことを信じることに決めたようでした。

ともあれお燐にはもう少し時間が必要な気がしました。けれどおくうがそうやって誰かを信じることに決めたのなら、お燐が信じてやらないわけにはいかないのです。二匹はいつまでも一緒にいることを決めたのですから。

「子供なら、子供らしくちゃんと甘えなくてはいいじゃないよ」

さとりはそつとお燐の頭を撫でてやりました。その感触は確かに、昔聞いた歌によく似ているような気がしました。

「頼りないお母さんで申し訳ないけれど、この地獄のことは、私なりに気に入っているのですよ」

優しく笑みを浮かべました。本当に儂くて、弱々しいのですけれど、それでも頑張っているという気持ちが見えるような気がしました。

「あのねさとり様。わたしね、時計屋さんやるの」

おくうがうつとりと次の夢を語り始めました。それをみんなで聞くことにしました。「鯨さんがいなくなってみんな困るから、原子時計屋さんなの。ヤタさまとお燐ちゃんに手伝ってもらってね、そいでね……」



「我、手伝フ、空、全カヲ尽クシテ」

「あたいもなのかい。いいけどさ」

八咫鳥やお隣の合いの手を挟みながらおうの夢物語はいつまでも続いていくようでした。

さあ、いつまでも聞き耳を立てるわけにはいかないでしょう。せっかくの家族水入らずなので、私たちはそつと地霊殿の扉を閉めることにしましょう。

このようにして、二匹は新しいお母さんの元でいつまでもいつまでも幸せに暮らしたのです。

めでたしめでたし。



……私はこのように、この物語リポートを終わらせていただきたいと思います。
我が主マイスターよ、分かっています。

永遠の幸せなど何処にもないということを。

私も地獄も世界もこの計画も永遠には存在し得ないのと同じことです。
けれど、二匹はするように暮らそうとお互いを信じたのです。

これ以上の言葉などは無意味です。

どうか、これでこの報告を終わりにさせてください。

願わくば、永久の幸せを。

この二匹の友達が、末永く幸せでありますように。

（以下余白）

801回^{かい}生^いきたねこ



<http://imoni.org/special/rinku100314/>

電子書籍版(二版) 2012.4.7

書籍版(初版) 2010.3.14 (第七回博麗神社例大祭)

発行 ぽたぽた焼

autumn_kite [at mark] yahoo.co.jp

小説 i0-0i (ぽたぽた焼)

イラスト 妹尾在処 (在りや)

組版(電子書籍版) moki (てきとーに)

原作 東方Project (上海アリス幻楽団)



書籍版あとがき

<http://imoni.org/special/rinku100314/secret/>